

外科医のメスに国境はない

—荒瀬秀俊伝—



荒瀬秀治 著

溝田忠人・溝田武人 編集

外科医のメスに国境はない

—荒瀬秀俊伝—



荒瀬秀治 著

溝田忠人・溝田武人 編集

目 次

	はじめに	1
1	老婦人にもたらされた新聞記事と児玉さんから聞いた話	2
1.1	新聞記事	
1.2	児玉さんから聞いた話	3
2	それは昭和17年（1942年）の戦時中のこと	4
2.1	ジャワ島近海で拿捕され三次の監獄に拘束されたオランダ病院船の乗組員	
2.2	ブラウアーさんの罹患そして日本への要求	
2.3	“看護婦ブラウアーさん”の状態について	5
2.4	医者は来た、しかし一度目も二度目も何もせず無言だった	
2.5	事態は急を要した	7
2.6	日本人看守もまた同情を感じていた	
2.7	破局の直前に患者のために船長によって実行された手段	
2.8	収容所の患者に関する情報は児玉看護婦長から荒瀬秀俊医師に伝わった	8
2.9	手術への立ち会いもOK	9
2.10	祖父・秀俊は英語力を発揮して2段階の手術の説明をした	
2.11	荒瀬病院の手術室で	10
2.12	児玉看護婦長は日本の軍人の言葉に啞然とした	
2.13	祖父の自信、手術の結果	11
3	我が祖父荒瀬秀俊とその家族	12
3.1	東京から三次に帰る前の私の暮らし	
3.2	当時の荒瀬病院	
3.3	祖父の時代と“盲腸”の手術	
3.4	祖父とその英語趣味	13

3.5	やっかいな食事時	14
3.6	祖父の趣味	
3.6.1	祖父との生活	
3.6.2	彼自身の手術用メスの作製	15
3.6.3	狩猟	16
3.6.4	赤チンで描かれた小さなオタマジャクシ	
4	荒瀬病院看護婦長の児玉さん	17
4.1	看護婦の外科手術への貢献	
4.2	看護婦長、児玉さんの存在の意義	
5	もしも祖父の決断がなかったら	19
5.1	終戦処理、東京裁判	
5.2	戦争終結と原爆の効果	20
5.3	B, C-級戦犯とごぼう	21
6	荒瀬秀俊とその関係者の思い出	22
6.1	親父、秀俊の思い出 荒瀬敏博	
6.2	荒瀬家と溝田との関わり	25
6.3	佐藤（溝田）英子の思い出	26
6.4	溝田忠人による伯父秀俊と秀賢君の思い出	
6.4.1	患者としてお世話になったこと	27
6.4.2	伯父のものづくり魂	
6.4.3	伯父の周りの悲喜劇——英語の質問	29
6.4.4	秀賢君の思い出	30
6.4.5	川立の荒瀬旧宅とその周辺	31
6.5	溝田武人による伯父秀俊とその家族の思い出	37

6.5.1	伯父には大変お世話になった	
6.5.2	従兄の荒瀬敏博は私をまるで弟のように可愛がってくれた	38
6.5.3	秀賢と秀治兄弟との私たちの交流	39
6.5.4	荒瀬家及び澤家と我が家の交流	40
7	秀治君の原稿を編集して	41
8	謝 辞	44
	引用文献	46
補遺 1	荒瀬淳子さん及び秀治君と溝田兄弟との最後の10日間のLine	49
補遺 2	手塚プロから荒瀬病院へ返還された秀俊作の医療用メス	56
補遺 3	収監者の一人、ファン・ヘリット・ヘンドリック・ファン・ケーフェルデン大佐 の描いた三次戦時収容所のスケッチ	58
補遺 4	第2期広島県三次抑留所名簿：外務省資料、小宮まゆみ氏より提供	61
補遺 5	三次収容所に滞在していたオランダ人看護婦 A. E. van Waning Boltさんの 写真と感謝のメモ	62
補遺 6	秀俊が学生時代に模写した人体解剖図とラウベル人体解剖学教科書の原画	63
補遺 7	「巴杏」から、谷岡只雄産婦人科医師の荒瀬秀俊伯父との交友話など	66
補遺 7.1	巴杏 2号 昭和 49年 2月 1日発行 随筆/ずいひつ 谷岡只雄	
補遺 7.2	巴杏 17号 昭和 52年 11月 30日発行 会員紹介 荒瀬敏博	67
補遺 8	荒瀬秀賢の巴杏投稿記事“鯉心”と“荒瀬病院 200年のあゆみ”	68
補遺 9	芸備線を走っていた C58 (シゴハチ) と荒瀬秀賢による SL スケッチ	72

外科医のメスに国境はない —荒瀬秀俊伝—

荒瀬秀治 著

溝田忠人・溝田武人 編集

はじめに

広島県北の三次市に江戸時代から11代続く医師の家系荒瀬家がある。江戸時代の7代荒瀬元安(1835-1899、64歳没時の墓碑には元泰)は、九州豊後の日田にあった広瀬淡窓(1782-1856)の咸宜園(かんぎえん)に1857年に入門している。その入門簿¹⁾に、出身地は藝州三治郡川立村と記してある。現在の三次市下川立町である(編集者注1)。次の第8代荒瀬一基は隣の村上家から荒瀬家に養子に入り、長崎で研鑽を積んで医者の家系を継いだ。一基の子、第9代荒瀬秀俊は昭和初期に現在の三次市三次町に移って開院している。

私の祖父、この家系の9代荒瀬秀俊(明治28(1895)年6月5日誕生～昭和37(1962)年5月3日66歳没、写真1)²⁾、の晩年の数年間を私は荒瀬病院で過ごした。看護婦長であり、祖父とその医療人生を最も近くで過ごした児玉ハズエ(明治42(1909)年11月2日誕生～平成12(2001)年10月24日91歳没、写真2)から、あるできごとを中心にした祖父の生き様と人となり聞いたことを覚えており、私はこれらの話を後世に記録として残したいと思う。私の兄、荒瀬秀賢(写真3)こそが11代荒瀬病院の院長として、このことをなすべき適任者であったが、彼は73歳でその人生を閉じてしまった(2019年1月没)。

75年以上前、太平洋戦争勃発の一年後、1942年12月20日、44名のオランダ人がこの町、三次に戦争の拉致者として連れてこられた^{3),4),5)}。その後、彼らはあの戦争の終結までの約2年と9ヶ月の間を三次収容所の中で過ごした。彼らはオランダ海軍の病院船の要員(医師と看護婦を含む)であったにもかかわらず、戦時国際法に則らない不公正な扱いの下で生き抜いた。日本は、敗戦後、彼らが無事その母国に返すことができたが、私はここに、その間、彼らが三次を離れる1945年9月12日より前に、そこで起こった1つの特別な事件について述べたい。彼らのグループの中の一女性が外科的治療を要する深刻な消化管障害を発症したとき、この敵国の収監者を診察し、人道的な立場から彼らを助け、戦時下の多くの困難を乗り越え、外科的処置によりその女性を救う治療を行ったのが、わが祖父、荒瀬秀俊であった。

編集者注1

著者の荒瀬秀治医師は、執筆途中の原稿を残して2019年2月6日に亡くなった。この原稿を完成させるために、彼の父の従弟である溝田忠人・武人兄弟は編集を引き継いだ。この経緯は第7章と補遺1に書かれている。この原稿の編集の過程では多くの参考資料を集めた。それらの一部は以下の9つの補遺として掲載した。

補遺1：著者秀治および彼の妻淳子と溝田兄弟との亡くなる前10日間のLINE

補遺2：手塚プロから荒瀬病院へ返還された秀俊作の医療用メス

補遺3：収監者の一人、ヘリット・ファン・クーフエルデン大佐の描いた三次戦時収容所のスケッチ

補遺4：三次収容所に収監されていた捕虜の名簿、1942年12月～1945年8月

補遺5：帰国後に送られた三次収容所に滞在した看護師A. E. van Waning Boltさんの写真

補遺6：秀俊が学生時代に模写した人体解剖図とラウベル人体解剖学教科書の原画

a)荒瀬秀俊により描かれた頭部人体解剖図とラウベルの解剖学教科書の原画

b)その表紙とラウベルの教科書の第1ページ

- 補遺 7：谷岡只雄産婦人科医師による荒瀬秀俊伯父との交友話など
- 補遺 8：荒瀬秀賢の巴杏投稿記事“鯉心”と“荒瀬病院 200 年のあゆみ“
- 補遺 9：芸備線を走っていた SL C58 と荒瀬秀賢による SL スケッチ

なお、咸宜園の入門簿(1857 年)に元安の出身地は藝州三治郡川立村¹⁾とあるが、文政 2 卯年(1819 年)に地元から広島藩に提出された国郡誌下調書出帖(国勢調査の元)によると三次郡下川立村と記してある。この不一致は、備後と安芸からなる広島藩を広島の所在地の安芸すなわち芸州とひとまとめで他国からは見られる場合があったこと、および三次と三治がどちらも訓読みで「さんじ」となることから誤記されたものと思われるが明確な理由はわからない。

登場人物の何人かの名前は日本人でも混乱するほど良く似ているので、読者の理解を助けるためにこの書に現れる人々の関係を荒瀬家の家系図の形で図 1 として掲載した。

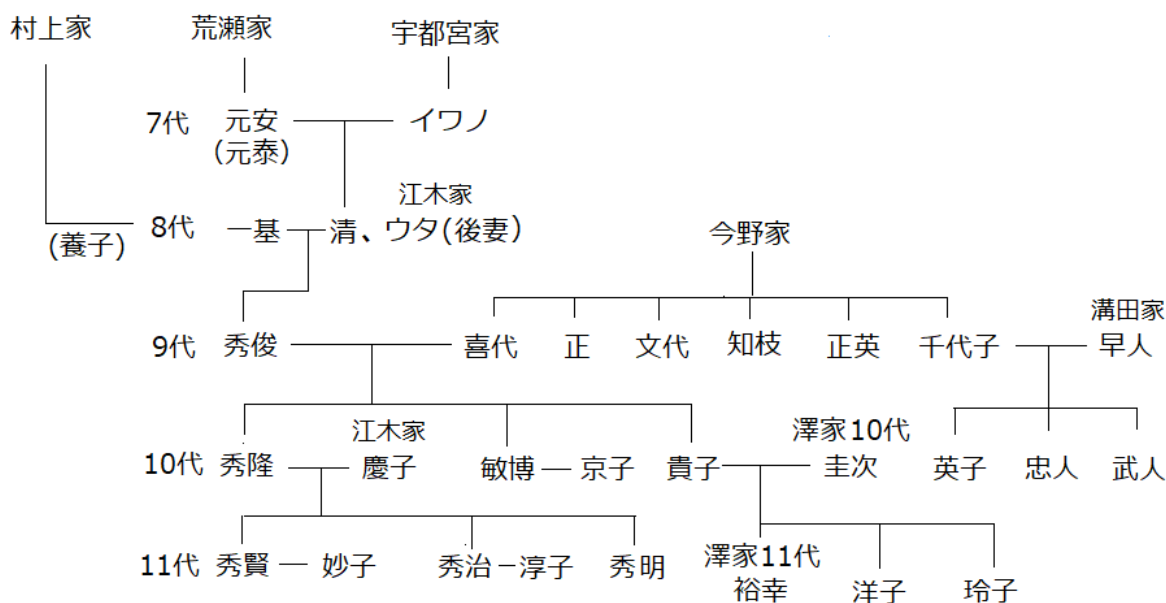


図 1 荒瀬家と関係する家族の家系

1. 老婦人からもたらされた新聞記事と児玉さんから聞いた話

1.1 新聞記事

それは多分 2002 年頃のこと、私が現在まで仕事場としてきた三次市の君田診療所に 1992 年に勤務し始めて 10 年も経ったころだった。ある日、このクリニックの患者として一人の老婦人が訪れて、私の診察が終わると、すぐに彼女はこう言った。「先生、あなたのおじいさんはとても素晴らしいことをしちやったんですね！戦時中の収容所に関する事で、この話を、先生は知ってってですか？」 私は「ええ・・・」、「またどうぞ」と気のない返事をした。この患者は少し興奮気味に、「すごいことです！私たちの誉れです！」しかし、いつものように私は「お大事に」と言って、同時に次の患者が診察室に入ってきて仕事を続け、その日の終わるまで、そのことについて考える暇もなかった。その人のように患者の容体が安定していれば次の診療は普通 2 週間後であった。しかし、2-3 日後にその患者は私に何か手渡したいものを持って診療所に来た。大きな封筒に入った何枚かの紙で、それらの幾つかは、とじ束ねられたコピーのように見えた。紙面にプリントされた記事

には書き跡を示す赤ペンによる小さな字、大切なところを囲んだ丸で満たされていた。それらの記事は「中国新聞」などの新聞記事や三次地域で発行された地方史の冊子から抜粋されたものだった。そして大部分の内容は戦時中に存在した三次収容所で起こったある事件に関するものだった。

その内容は私が子供時代に児玉さんから聞くのを、いつも嫌がっていたことで、そのエピソードの中には私の全く知らないこともあった。それらをすべて読んだ後で、私は祖父の人生がしばし輝くように感じられた。なぜならそれらの記事が他人によって活字にされたものだったからである。医療処置以外の事実もまた含まれていた。もちろん、もし児玉さんが生きていてくれたら、彼女はそれらについてすべてを知っており、私に話してくれたであろう。しかし、児玉さんはほんの1年前に亡くなっていたのである。

1.2 児玉さんから聞いた話

児玉さんはこの事件についていつも私に話そうとしていた。しかし10歳にも満たなかった私には全く興味が無かった。聞く振りをするか、その話が始まりそうになると、そこから逃げ出そうとして、必ずこう言った「それはもう何度も聞いたよ!」。私は生意気なガキだった。その後何年か経ち、小学校の5年生になったころには、私は多くのことに興味を示すようになっていた。そして、児玉さんが戦争中に経験したその事件についてももっと詳しく知りたいと思うようになった。しかし、その話を聞くことに抵抗していた過去があるために、私は簡単には彼女に尋ねられなかったことを覚えている。

2000年代の初め、児玉さんはその91歳の人生を終えた。看護婦として、彼女は荒瀬病院と、そしてもちろん、患者たちに彼女自身を捧げた明治の女性であった。彼女は看護技術と医薬の基礎を知り、正看護婦の資格を持ち、そしておそらくその時代の先端に行く女性であった。恐らく、その時代の医師の数よりもそのような看護婦の数は少なかった。もし私が何も残さなかったら、彼女について誰も語らず、この重要な話は永遠に埋もれてしまうであろう。私は天国から祖父(写真1)が「黙っておりゃーがって面白くないのおー」といいかねないプレッシャーを感じて、ここに記憶を手繰り寄せようと思った。

編集者注2

以下、本文の記述に関して、荒瀬秀治医師が引用文献の1)、3)-13)を読んでいたことは知られている。この2章の内容の多くが参考図書(5)に基づいているように思える。秀治の妻、淳子さんは、「彼は沢山読んでいて、特に三神氏の本(5)を診療の間に読んでいた」と我々に話した。これと彼が児玉さんから聞いた物語が重なって、伝聞との区別が明確ではなくなっている。従って、私たちにも記述内容の引用の詳細を指摘することが難しい。我々はこの状況を受け入れ、明らかな間違いと判断されること以外は原稿に従うことにした。文中、今では看護師と称するところが看護婦になっている。これも原文に沿って看護婦のまま記述した。

2 それは昭和 17 年（1942 年）の戦時中のこと^{3,4,5)}

2.1 ジャワ島近海で拿捕され三次に拘束されたオランダ病院船の乗組員

戦争の始まった 1941 年の真珠湾攻撃の少し後、1942 年 2 月 26 日、オランダ海軍の病院船 オブ・テン・ノール号はオランダの植民地であったジャワ島の海域で、日本海軍によって拿捕された。79 人の収容者は横浜に連れてこられた。彼らは、6 人の軍医、1 名の歯科医、17 名の看護婦（その内の 2 名は男性看護師）と艦長タイジンハおよび彼の船員 19 名（その内の 2 名はインドネシア人機関士を含む。他はオランダ国籍）である。合計 44 名は非戦闘員だった（補遺 4）。

三神の p.70 の記述⁵⁾によると以下の通りである。“2 月 26 日、駆逐艦「天津風」は病院船 オブ・テン・ノール号を発見して臨検し、命によって同船を後方に一時抑留した。臨検の結果同船に不審な点はなく、乗組員のほかは軍医、看護婦ら病院関係者が乗っているだけだった。

1942 年 4 月 2 日付け朝日新聞¹²⁾によると、その戦時期（最初の打電では 3 月 31 日）、オブ・テン・ノール号は 2 月 27 日から 3 月 1 日のスラバヤ海戦における敵（日本）艦隊の中心にあった。この船が日本海軍により拿捕されマカッサルに投錨した時、齋藤、坂本の両記者共にこの船に乗艦していた。188 人の船員（22 名の高級船員のオランダ人とそのほかのインドネシア人）と 7 人の軍医、15 人のオランダ人看護婦、および 23 人の患者が乗っていた。22 名の船員、7 人の医師、15 人のオランダ人看護婦が三次収容所に連れてこられた”。

44 名の収容者たち(p.61、補遺 4、参照)は以前の幼稚園（愛光園）を改装した収容所の建物に収監された。そこは広島県双三郡三次町（現在の三次市三次町）にあった。収容者たちは日本軍ではなく三次警察の管理下に置かれた。非戦闘員としてとらわれた場合、その扱いは衣服、食事、住まいなどにおいて戦闘員捕虜とは区別すべきものであった。しかし、その扱いの程度は一般の戦時捕虜（戦闘員捕虜）と同一のレベルに下げられ、そして戦争が継続するにつれて、物資不足の影響のため、彼らは惨めな生活状態に追い込まれていった。彼らは故郷に帰る日を夢見るばかりであった。互いに励ましあい、毎日を耐え忍んだ⁶⁾。

2.2 ブラウアーさんの罹患そして日本への要求

この監禁の間に、ある事件が起こった。病院船のスタッフの一人の看護婦のブラウアーさん（p.61 補遺 4 の 39 番目の人）が消化管の病気を発症したことが同じ病院船のオランダ海軍軍医によって診断された。戦争中の収監者として彼らは、もてるはずの能力の何一つとして行うことができなかった。彼女の同僚、軍医はもちろん薬を処方しようとした。しかし、病院船が拿捕された時、すべての薬は没収されていた。彼女を治療するためのものは殆ど何も持たなかった。その症状は、最初は吐き気だったが、次第に悪化して行き、食事の後に嘔吐するようになった。

病院船のスタッフのような非戦闘員の戦時中の収監者の処遇には、いや普通の戦闘員の収監者であっても、国際法的なルールが存在する。健康管理には日本の医師が月に一度巡回することが定められていた。それにもかかわらず、医療検診は、最初は 2 ヶ月後に 1 度行われた。しかし、何も理由が告げられないまま、その後医師は来なくなった。ブラウアーさんの状態は、もし

彼女がきちんと診察され適切に処方されれば治るはずのものだった。オランダの軍医は繰り返し日本の医師の往診を要請した。しかし、回答はなかった。彼らには薬もなく、収容所の看守を通して日本の当局に要請を続けた。しかし、まったく返答はなかった。患者の容態は悪くなり続け、ついに栄養状態が危険なところまでに至った。オランダ軍医は、最悪の場合には手術が必要と判断し、日本の医師の往診を繰り返し訴えた。しかし、医者は来ることはなかった。約2か月経過したころ、彼女はついに食べ物や飲み物を口からとれなくなった。かなりの栄養状態の悪化と脱水状態から、彼らは彼女が間もなく危機的な状態になると結論せざるを得なくなった。病状は受け入れがたいところにまで至ってしまった。

これに加えて、時に意識混濁が起こるようになり、そして外科手術しか選択の余地がなくなると考えられた。彼女を診察したオランダ軍医も体重が10kg以上減少していた。患者の皮膚は蠟のように青ざめ、そして次第に明確な意識状態の悪化が伴うようになった。緊急手術を行うためには、彼らは日本の医師を直ぐ呼ぶ以外に何もなすすべがなかった。結果として、彼らの混乱の状態と日常の振る舞いが次第に粗暴なものになってきた。収容所の看守は収容者が異常な状態になってきたと感じ始めた。

2.3 “看護婦ブラウアーさん”の状態について

オランダ人軍医は幽門閉そく症と診断した。幽門付近は、健康なら胃から十二指腸へ食物をスムーズに送る部位である。しかし、胃部の潰瘍やそれに伴って十二指腸の潰瘍が同時に生じるなどする場合には、治療に困難が伴う多くの症例のある部位でもある。もし胃潰瘍を適切に治療しなければ、最悪の場合、潰瘍は深部に達し、結果的に胃壁の穿孔を生じる。これを胃穿孔と呼ぶ。この状態は重篤な腹膜炎“穿孔腹膜炎”に至るかもしれない。ブラウアー看護婦はこの状態に非常に近かった。細かな道筋は知られておらず、想像の域を出ないが、彼女は他の多くの人々と同様に過酷な精神的かつ肉体的ストレス状況に置かれたことが原因で潰瘍を発症したと考えられる。

2.4 医者は来た、しかし一度目も二度目も何もせず無言だった

収監者の訴えは日本の管理側にも伝わったようで、待望の日本の医師が診察に収容所を訪れた。医者は彼女のベッドのところまで来たが、何もせず、診察も腹部の触診もしなかった。一言もしゃべらず踵（きびす）を返して部屋から出て行った。彼はおおよそその症状くらいは訪問に先立ち聞いていたであろう。そして、腹部の触診は消化管症状を訴える患者への基本的な手技である。指先による触診は医者に多くの場合、言葉で述べるよりも多くの情報をもたらす。にもかかわらず、彼はそれさえせず立ち去った。オランダ人医師はなお進展することを期待し、応答を待った。間もなく二番目の日本人の医師が患者を訪れた。しかし収容者たちの期待にもかかわらずその医者も同じで、何もしないで出て行った。



写真 1 荒瀬病院にて荒瀬秀俊医師。明治 28(1895)年 6 月 5 日誕生～昭和 37(1962)年 5 月 3 日 66 歳没



写真 2 荒瀬病院、児玉ハズエ看護婦長。明治 42 (1909) 年 11 月 2 日誕生～平成 12 (2001) 年 10 月 24 日 91 歳没



写真 3 荒瀬秀賢医師。昭和 22(1947)年 1 月 1 日誕生～平成 31(2018)年 1 月 11 日 71 歳没。



写真 4 1961 年 晩年の荒瀬秀俊医師

2.5 事態は急を要した

その後、進展はなく、時間だけが過ぎていった。そして患者を見守って来たオランダの医師たちには、この時点で既に手術を実施する機会さえ失ってしまったように思えた。言い換えれば、状況は“手遅れ”と考えられる限界点に達していた。しかし、オランダの収監者達は要望が日本の軍上層部には届かなかつたのだと感じた。彼らはこの状態を乗り越えるには非常手段に訴えるしかないと決断した。もし病院船であったなら、豊富な薬品があり、緊急外科手術のための手術室があつたであろう。手術用の装備品、手術台、適切な照明、などなどもあつたであろう。完全な対応が医師、看護婦などからなるスタッフによってなされたであろう。それらのいずれもが成功のためには必要不可欠な要素と考えられた。しかし、この収容所には手術用具は何一つ無かつた。ただ彼ら医療人材のみしかなかつた。この見放された状況下で、オランダ人軍医と医療スタッフ、そして病院船の乗組員は彼ら自身で彼女の手術を行うしかないと信じていた。

2.6 日本人看守もまた同情を感じていた

すべての収監者が拿捕された時に比べて 10kg 以上の体重が減るほどの待遇を耐え忍んでいた。彼らを近くで見ていた収容所スタッフたちもまた、近くで見ていたからこそ彼らを助けたいと感じた。時には彼らの立場を超えて同情の念が生まれ、そして変化が現れ始めた。児玉さんの思い出によれば、彼らに対する率直な同情はその時代許されなかつた。その収容所に関係していた人の中には彼女に、当時は「ほんの同情のそぶりを示すことさえ罰せられかねなかつた」という思いを話す人もいた。日本側の協力が得られなかつたが、オランダ軍医達は彼らの手で開腹手術を直ぐに行う準備を要望することを決めた。しかし、この深刻な病状の患者を救うための時間はもはやないとも彼らは考えていた。展望を決して捨てず、希望を奮い起こして、彼らは日本の軍部に直接訴えることを決めた。

2.7 破局の直前に患者のために船長によって実行された手段

一つの計画が2度目の医者が患者に何もせず立ち去つた次の日の朝、実行された。病院船の船長のタイジンハがそれを実行した。その詳細はこの行動が漏れて失敗に終わるかもしれないことを避けるために、クルーの1名だけに告げられた。夜明け直後、船長タイジンハは行動を起こした。それは収容所を囲むフェンスを破壊することだった。それは単純だが危険で、そして子供じみた計画のように思えた。しかし、この計画を一人で実行したのは病院船の大佐である船長であつた。この朝、彼が木製のフェンスの板を壊した瞬間は、その行動こそが、この患者を救うべく、後悔をしないために必要であつた。しかし、船長は直ぐに拘束されそして三次警察署の地下の独房に24時間幽閉された。それは要求を伝えるための賢いやり方ではなかつたが、最後の手段として、想像を絶する危険を顧みず、実行された彼らの計画だった。

船長は高い社会的地位にあり、そしてもちろん、専門家としての教養人でもある。彼は病院船のクルーと医療スタッフの代表である。このような高い地位の人が犯人として拘束された場

合には、彼を尋問すべく対応も相当な地位の人を日本側は用意せざるを得ない。この尋問の間に、船長は地域の軍部の高官を引き出すことに成功した。

実際のところ、彼らの要求は以下のごとく単純だった。彼らは患者の看護婦に手術を受けさせることを求めた。しかし、この要望を受けた日本軍の担当者は当時手術用具と医者を確保するには困難な状況にあった。もしこのような要望が例えば広島市のような大きな都市で行われたのであれば、可能な施設として広島医専病院からの協力を得られたかもしれない。しかし、患者は三次から 70km 以上も遠くの広島への移送に耐える十分な体力を持っていなかった。広島県北の三次町は当時人口 2 万人以下で、オランダの戦時収監者の要望に応えることは難しかった。

2.8 収容所の患者の情報は児玉看護婦長から荒瀬秀俊医師に伝わった

このひどい患者の状態がどのような道筋を通して私の祖父、荒瀬秀俊、に伝えられたのか、詳細を知る人は今はいない。幸運にも、その収容所は祖父の荒瀬病院から僅か 350m にあった。その病院は日常の診療で忙しかったが、秀俊は「緊急の外科診療を必要としている患者が収容所にいて、自分が医療的支援に手を貸してほしいと求められている」との情報を受け取った。児玉さんがその要望を院長に伝え、院長はすぐさま彼女に訪問のための準備をするように命じた。彼は診察かばんを持ち、児玉さんと収容所に向かった。そこは早足でほんの 4 分程であった。収容所には知らせがすでに行っており、憲兵が祖父を敬礼で迎えた。

児玉さんは、そこにいたオランダ人の彼らに向けた視線を感じたと言っていた。主任医ともう一人の医師、そして婦長が傍らで荒瀬医師の一举一動を黙って観ていた。明らかに懐疑的で敵意に満ち、時には低い声で何かささやいていた。彼らはその猜疑心を隠そうとはしなかった。訪問者が外科医であることくらいは軍の通訳から聞いていたとしても、彼らは用具を準備し自身で手術を行うことを希望していただろう。最初の診断は 4、5 分かかった。患者は祖父の無言の診察が行われる間、話せる状態ではなかった。いずれにせよ、患者のオランダ人看護婦はその時 100% の意識がある状態ではなかった。この医者が何者なのか分からないという恐れを彼女は持っていた。彼女は後日、ある意味で精神的に身構えており、完全に意識がある状態ではないように、「苦しい」とか、うめくような反応もしない振りをしていたと述べている。祖父は彼らの要望を聞いていたので、彼女の診察を始めるとすぐ、彼女の状態がかなり深刻であるという印象を受けた。オランダの医師と看護婦たちは祖父が誰で、専門は何かと通訳に尋ねていた。しかし、通訳は説明が困難なように見受けられた。祖父は、横たわる患者のベッドの脇で注目しながら付き添っている二人のオランダ人外科医と看護婦長の方を向いて、深く深呼吸をし、英語で切り出した。「彼女を私の病院で私が手術しましょう」。祖父の言葉の後でしばらくの沈黙があって、そして彼らは自分たちの動揺を隠せなかった。しかし、雰囲気はこの時点から次第に変わり始めた。祖父は直接彼らに英語で話しかけると同時に、児玉さんに荒瀬病院に運ぶことを指示した⁷⁾。横たわる患者を運ぶために、救急車も搬送用台車もない時代、彼らは布製の担架を用い徒歩で運んだ。

2.9 手術への立ち会いも OK

収容所での劣悪環境に加え、こと医療に関して裏切られ続け、挙げ句の果てに仲間を緊急手術の必要な事態にまで追い込まれた彼らであった。初対面の日本人医師の説明を聞き、その内容が寸分違わず彼らと同じ見解であっても、はたして祖父の執刀を納得して受け入れたのだろうか？ 祖父の話に対し彼らの表情や態度は猜疑心に満ちたものであったのは、致し方ない。立場上、祖父の執刀の申し出に、うなずいては見せたが、同時に彼らは「手術に立ち会いたい」と強く求めた。それに対して、祖父はあっさりと、当然そのつもりであることを告げた。「まあ、わしに任せておきんさい」という彼の絶大なる自信である。

2.10 祖父・秀俊は英語力を発揮して 2 段階の手術の説明をした

祖父は患者の診察を終え、あからさまに疑いの目を向けるオランダ人スタッフに向き合い、スタンバイする軍の通訳を通すこともなく、直接彼らに英語で説明を始めた。おそらく医師同士の話になり通訳を通すことで余計に手間がかかることを考えた結果であろう。自分が診察した結果から、患者の診断と、どのような手術を行うべきかを英語で彼らに告げた。児玉婦長も院長が英語に堪能であることは知っていたが、実際英語で会話しているところは見た記憶がなかった。院長の新たな面を目の当たりにした。その時代、あるいは三次という土地柄からも、外国人医師と話す機会など滅多にあることではない。聞き入っているオランダ人スタッフも落ち着いてきている様子を感じ、児玉婦長も緊張感が解けてきたようだ。

祖父はオランダ人軍医等に概ね次のように語った。患者の状態について、「癌などの悪性腫瘍を否定できないため、根治術にまで持って行けるかどうかは、開腹してから判断する。いずれにせよ、今一次的にでも行うべきは栄養状態の改善を目的とした手術である。まずは食物を胃から腸へ進める手術（バイパス術）を行い、体力を回復させた後、改めて閉塞させている原因を切除（根治手術）する」。この手術の段取り、手順、についてはさほど珍しい方法でもなく、消化器外科ではこのような症例に行う一般的な対応であり、この見解にはオランダの軍医にも異論はなかったものと思える。

不安のぬぐえない軍医達に対して、祖父は「外科医のメスに国境はない」と英語で伝えた。果たしてどう英訳すれば再現できるのか、婦長はしゃべっているところを憶えていたがその文章までは記憶していない。

Surgeon's *Mes* has no Borders.

実際の英文は分からないが、このような“決めぜりふ”がここで言い放たれるとは驚く。あの時代の強い恐れと不安の下で患者がこれを聞いてどう思ったか私は知らないが、その瞬間とても安心をもたらしたであろうことは想像できる。彼女は後に、院長の上述の言葉をはっきりと覚えていると述べている⁷⁾。

編集者注 3

英語のネイティブスピーカーの言い方では“The surgeon's knife knows no borders”だろうと、ジーン・マリー・マヒューさんが助言してくれた。この部分、秀俊は「患者を救う仕事に国境はない」として診察した、と児玉さんは述べている⁷⁾。辞書によると、単語“mes”はオランダ語のようであるが、秀俊のみならず当時の医者はドイツ語を学んでおり、多くの日本人がドイツ語の“Messer”を“メス”と発音するのが普通のことだったと思われる。江戸時代からオランダ人との長い付き合いがあったので、“メス”は日本人に聞きなれていたであろう。“メス”が正しくオランダ人に理解できたのは幸運だった。

2.11 荒瀬病院の手術室で

児玉さんはすぐ手術の準備を始めた。患者は手術室に運ばれ意識の薄れる中で手術台に寝かされた。立ち合いを望んだ3人、ブレード軍医と2名の看護婦、は元気づけるために何かを彼女に話しかけていた。患者は母国オランダから遠く離れた日本の田舎町で自由を奪われ、知り合いもなく、支援もない状態に置かれ絶望的だった。彼女は死の恐怖に耐え、諦めるなどの多くの励ましを受けながら、遂に手術台に横たわることができた。手術を待つ間の束の間、彼女はまさに消え入りそうな意識の中で眉を上げ、そしてその眼差しに日本の看護婦をとらえた。児玉さんは手術の前にいつもするように、“心配しないで良いですよ”、と患者の手を握りながら言った。患者はわずかに手を握り返した。例え国籍は違っても、それは同世代の、そして同じ看護婦である二人の女性の交流から生まれる心の触れ合いの瞬間であったであろう。一言付け加えさせていただくが、児玉さんは外国語に堪能ではなかった。それで、“Don't worry”と言ったのではなくて、完全に三次弁がちりばめられた純粋な日本語だった。手術室に安堵の静寂が流れた瞬間だった。

2.12 児玉看護婦長は日本の軍人の言葉に啞然とした

手術室の手術台からちょっと離れた窓際で、彼女はいつものように手術の準備に忙しい時、軍人と思われる監視役の男が児玉さんに近づいて、そして低い声で彼女に言った。彼女は彼の言葉に愕然とした。「看護婦さん、彼女は戦争捕虜ですけえ、どうなってもええですよ。心配なーですけー」。これが戦争中の日本軍の本性を現していた。非戦闘員であろうとなかろうと敵国の人への敬意、命の尊厳さえほとんどないのであった。まさに始まろうとしている手術に直面して、日本軍の思考は揺るがなかった。あえて繰り返すが、その確固とした姿勢は恐るべきものだ。この瞬間にこの軍人が続けて言ったのは、もし彼女が亡くなったら、その死体は検体として病院に寄付するということだった。「たいしたことではないですけー」。勝利の展望もない、まして夢なども無い多くの戦場で、投入された日本の兵士がこういう意識を持った日本軍人の命令の下で戦って死んでいったのなら、恥ずかしいことである。徴兵されそして亡くなられた日本兵の御霊を、私はただ祈るしかないのである。

この時、怒らせるのではないかと児玉さんが思ったのは、患者自身や相談役として立ち合いのオランダ人に対してではなかった。なぜなら、彼らは日本語が理解できなかったからか。そうではなくて、このことが祖父の耳に届いていたら事態は一体どうなっていたらどうか?と云

うことだった。幸いにも、それは起こらなかった。もし万一このことが彼の耳に届いたとしたらということ、児玉さんは私に言わなかった。しかし、私は想像できる。私が経験した子供時代の記憶から、とんでもない難しい状況が起こったであろう。私の祖父は絶対的な正義感と誇りを持っており、患者や彼の周りの人々の大部分から“怖い先生”と思われていた。しかし、彼は子供や弱者にはすごく優しく、当時、祖父ばかりではなかったけれど、すべての医療従事者は支払いの難しいと思える患者からは診察料は決して徴収しなかった。²⁾

再び静かになった手術室に祖父が入ってきた。どんな外科的な処置がなされようとしているのだろうか。そしてこの知らない土地で命は救われるのか、亡くなってしまうのか、という心配が患者自身に去来した。そばで立ち会っているオランダ人医師と看護婦も同じような不安を抱いていたであろう。

2.13 祖父の自信、手術の結果

祖父はその手術の技は最善のものと確信していた。彼の経験と技術に基づいた自信は揺るがなかった。オランダ人医師は手術が進行するにつれて次第に話す言葉を失った。それは彼ら自身が想像する手術をはるかに上回る技術レベルで進んで行ったからである。祖父の手の動きを見つめる彼らの眼差しには彼らの母国で通常行われる外科処置を完全に凌駕したものに見えた。もちろん、彼らを救った祖父に対するリップサービスの延長かもしれないが、終戦後、彼らがオランダへ帰還した後にその医者たちは最大級の賛辞を表明している。「日本の外科医は素晴らしい手術を行なう。それは荒瀬医師だ」、と感謝を表明している。^{4),5)}

もしその時、何か心配があれば、自分たちの技術は日本のそれより優れていると思っていたので、彼らは直ちにその手術の主導権を奪ったであろう。私の祖父の技術と理論は、もちろんオランダ人医師を凌駕するあの時代の最高の外科術であった。児玉さんは、オランダ人医師の会話の雰囲気から、手術の直前に祖父を遮ろうとしているように感じていた。それは彼等オランダ人が日本人の医療技術より優れているというプライドに基づいていた。彼らはまた、敵国の医師が公正に対処してくれることはあり得ないとも考えていたであろう。

二か月後、オランダ人看護婦ブラウナーさんは二回目の手術を受け、最悪の状況を脱し、最終的に健康を回復した。戦争終結後、スタッフ全員とともに、彼女は無事に三次町を離れることができ、母国に帰還した。彼女を支援し続けたオランダ人医師たちの思いは、“必ず44名のすべてを救いオランダに帰す”、であった。全ての病院船仲間の思いと行動、そして“自分も必ず生き抜かねばならない”という患者の強い確信があった。それらの結果として、あの不幸を克服することができた。それが祖父の決断と処置に結びつき、44名はその通り生き延びた。祖父達は終戦後オランダ人医師、看護婦などを含む数人を院長宅に招き、オランダへの帰還の直前に送別会⁷⁾を開いている。

3. 我が祖父荒瀬秀俊とその家族

3.1 東京から三次に帰る前の私の暮らし

私に物心がついた頃、両親と私は三人で東京で一緒に暮らしていた。私の兄、秀賢は幼少時から三次の祖父母のところで私たちと離れて暮らしていた。私の父、秀隆は当時は完全に無休であったインターン医師として医師訓練(編者注:秀隆は医学博士の学位論文を仕上げている^{14)・17)}を受けていた。彼は大変忙しく、夜は毎日私が眠ってから帰宅していた。私はその大部分の静かな日々の時間を母、慶子と一緒に過ごしていた。私達が東京から三次に帰った時、祖父は子供時代の私にとって手の届かない存在であった。

3.2 当時の荒瀬病院

実のところ、祖父の時代には外科の開業医は稀だった。広島市の場合であれば、広島医専病院では多様な外科の疾病(内臓器官、脳外科等)に対応できたであろう。さらに、いくつかの広島市の個人開業医、例えば土屋病院は外科の患者を受け入れることができたと思われる。その時代、外科治療を必要とする患者は、県の北部ばかりでなく島根や岡山の県境から祖父の治療を受けに病院にやって来た。

その時代は、専門病院の外科の各科は今日の大学付属病院の診療科の様な分科ではなかった。例えば、現在包含している種々の外科と臓器のタイプに従って、A教授は“脳外科”、B教授は“胸部外科”、C教授は“腹部外科”、“整形外科”、“麻酔科”、等々に専門化している。各教授、准教授、講師、および助手のそれぞれが、各専門外科を持っている時代である。しかし、祖父の時代には、もし学生が外科のコースに入ったら、彼は腹部外科から整形外科まですべてを自身で行わなければならないなかった。祖父の医学関係の知識と技術は我々の時代の多くの医師よりずっと広範囲にわたっていた。彼らには選択の余地はなく、あの時代にはそうするしかなかった。さらに加えると、祖父は病院を開業した後も驚異的な自己研鑽によって、当時の医療知識水準をはるかに超えてこれらを獲得していった。

3.3 祖父の時代と“盲腸”の手術

私の祖父は1896年に広島県双三郡下川立に生まれた(現在の三次市下川立町)(写真5)。彼は東京医専で学びそして彼の父、荒瀬一基医師から医業を受け継いだ。32歳の時、昭和3年(1928年)、時代の名称が“大正”から“昭和”に代わってすぐ後、三次町の町内会が“外科病院”を開設することを要請し、それに応じて西中町に開業した。その後内町に移転し、1943年に三次町栄町に50床を持つ外科病院になり、そこが現在の荒瀬医院²⁾である。

“虫垂炎”いわゆる、盲腸炎は抗生剤が発達する時代までは一般的に開腹手術により虫垂突起を除去することを必要とした。さらに昔、祖父が若かったころには絶対的な手段が無く、外科医が少なかったため、それは一般的に“致命的”な病気と考えられていた。

実際、多くの当時の患者が不幸な結果を迎えていた。祖父は当時の新しい処置であった虫垂突起切除術という言葉と、“盲腸炎”が命を脅かすことがほとんどない病気になって来た情報を広めた。人々はそれが手術によって治ることに気づき始めた。しかし、この“外科処置”という診療は身近なものではなかった。外科診療を受けるために、患者はその家族に別れを言い、“水杯”と呼ばれる儀式を行って病院に行った。今日では滑稽に思える。祖父は外科の必要性（医療技術としての）を認識し、外科処置ができるだけ速やかに行えるための活動を確立するために働いた。結果、“虫垂炎”は死に至るような深刻な病ではなくて、手術により完全に治癒し、そして患者は退院後彼らの元の生活に復帰できた。次第に多くの人々が再び働き出せるようになった。このことは、広島県北の地でも外科の信頼性が改善され高まったことを示した。

3.4 祖父とその英語趣味

私の祖父は外国で学んだり、行ったりした経験は全くない。しかし、英語に堪能だった。今日では英語を話すことのできる人は大勢いる。しかし当時は稀だったが、祖父は医学を学ぶ以前から英語に長けていた。そして彼の旧制中学時代から科目としての英語の成績は良かったと聞いていた。当時は医学を学ぶ上でドイツ語が主要外国語として必要とされた。それを学んだうえで、祖父は当時学ぶべきはアメリカの医学であり、それで英語が必要と考えた。

私が小学生のころ、月に一度、祖父のところに一通の封書が送られてきたが、それは珍しい外



写真 5 大正 15 年（1928 年）ころの下川立の荒瀬旧宅。写真に写っている人は 5-6 歳の荒瀬秀隆と思われる。屋根の頂上の構造物は避雷針である。右の白い壁の建物が病院として使われていた。

観で特別な封筒であった。それには英語の小さな住所ラベルが貼ってある。それはアメリカ合衆国からの有名な外科学会誌だった。その素敵な包はとても重い紙の雑誌で錠を使わないと開けられなかった。祖父は66才で亡くなった。しかし時折、彼が眼鏡をかけて、片手に辞書を持ち別の手に虫眼鏡をもってその雑誌の行を追って読んでいる表情が思い出される。

3.5 やっかいな食事時

私の家族が東京から三次に帰ってきたとき、私は兄と共に、3世代の家族と共に暮らし始めた。それは私にとって、その時、病院のスタッフを含む大家族スタイルの生活が始まることだった。朝も昼も晩も、食事のテーブルを囲んで座る私の父、秀隆（写真6）とその弟（敏博）にとって、逃れることのできない祖父による英語の語彙力のテストの時間だった。楽しい食事時間であるはずのものが、大人であるにもかかわらず、彼ら二人にとって地獄同然であった。彼らの仕事である外科に関する医学用語についての会話の一部などではなかった。母や祖母によれば、多くの質問は食物に関するもの、例えば食卓に並んでいるナスやキュウリなどが出された。英語で答えられなければ、彼らは勉強の足りなさを強く叱られ、そして、正しく答えて安堵するとすぐに、次の質問は、「その綴りはどうか？」であった。彼らの周囲の他の誰もが正しく答えて！と祈るばかりであったことは祖父にはほとんど理解されていなかった。楽しかるべき食事は味気ないものになっていた。兄と私は子供だったので詳しくは分からなかったが、私は食事の時間はできれば楽しくあって欲しかった。しかし、大部分の大人は食欲を失っていた。但し、祖父を除いて、そんな雰囲気は私は感じていた。父と叔父はただ一つのことに集中していた。それは、その場をいかに早く立ち去るか、であった。彼らはすごいスピードで食事を終えて、「ごちそうさまでした」というや否や立ち去った。



写真6 父、荒瀬秀隆、

大正9(1920)年9月28日誕生～昭和59(1984)年12月7日64歳没。

3.6 祖父の趣味

3.6.1 祖父との生活

彼と同居し始めた時には、祖父はおよそ60歳であった。彼はエネルギッシュな外科医であるばかりでなく、疑いもなく広い趣味を彼の仕事への情熱の源であるかのように持っていた。このことは6、7歳の私の興味を掻き立てた。それまでそんなことは経験したこともなかった。私は彼のことを“かっこいい”人、男らしさにあふれ、多くの趣味を持って人生を楽しみ、そして秀でた知識と技術を自らの修練で獲得した明治生まれの外科医と思った。私は医者としての彼の仕

事以外のことに次第に興味を持つようになった。なぜなら、私が恐らく小学生の10歳ころのことであるが、夕食後いつも祖父の部屋に入り浸っていたからだった。

3.6.2 彼自身の手術用メスの作製

祖父の毎日の生活の中で、彼は自分のメスを作製していた。それは外科手術のために使うものだったが、私はある時期それを知りたくて仕方なかった。最初、彼が砥石や回転式グラインダーでナイフを研いでいるのを見て不思議に思った。祖父は私に丁寧に道具をどう使うかを教えてくれた。「これを見たことあるか？」と問い、最後には必ず「わしが作ったんでー」という。この時、“刃物”が何を意味するのかも、またそれで何を切るもののかも、そして何のために使われるのかも私は知らなかった。今となっては、はっきりした記憶を掘り起こせないでいるけれど、思い出せる範囲で、その仕事場の特異な様子の幾つかを拾い上げてみよう。

彼が左手でT型ハンドルを握って前後に操作すると鞆（ふいご）から炉の炭火に空気が送られる。本物のレールを30cmくらいの長さに切断した金床（ハンマー台）が正面にある。そのすぐ前に据えてある炭火の燃えている小さな炉、そして水槽などがあつた。こんな道具と祖父の動きを見るのは私にとっては初めてだった。そこは後年テレビで見た日本刀の刀鍛冶と同じ仕事場だった。T型ハンドルを前後に動かすと、噴き出す空気で炭は真っ赤な炎に包まれる。火鉢でつかまれた鋼が炭と同じ鮮やかな赤色に加熱されると、直ちに取り出された。それを金床の上で整形するために、彼はハンマーでそれをたたき、そして少し赤みが残る間に水槽の水の中にさっと突っ込む。この時、水が爆発し水蒸気に代わり、水滴が跳ね回った。時には私をめがけて鉄くずが飛んで来た。これを避けるために、大げさに「わー！アツ！」と、悲鳴をあげた。そんな時には、「静かにせい、熱うはない！」と祖父の大声の決め台詞が私に襲い掛かる。実際に私の肌に鉄くずが張り付き、それを払いのけようとしたが、不思議なことに熱くない。祖父の言うことはその通り正しかった。

メスを作る全工程は子供の目にはまことに特別で、疲れも感じなかった。さらに、次の“砥ぎ”の作業は別の意味を持っていた。そして特別なダイナミックな驚きであった。今日、我々が使うグラインダーは非常にコンパクトである。しかし、祖父のものは、机ほどの高さ、廊下いっぱいの幅、むき出しの鋼材で作った立方体のフレーム（今様の言葉で言えばシー・スルー）であった。この重いセットの下にあるモーターの回転はプーリーとベルトによって上部のグラインダーに伝えられた。この作業でメスの形は決められ、その機械作業が終わると、メスの刃は手作業で砥石をもちいて研磨された。これが、その“鋭い刃”を完成させる最後のステップであった。

祖父は完成したナイフの刃を上向きにして彼の視線より少し高く支え、そして刃にわずかに光を集中させる。その完成度を確かめるための彼のしぐさは格好よかった。私には、鼻眼鏡で私に視線を向ける祖父のその眼差しが懐かしい。

現在外科処置で使われているメスの大部分は替え刃式のものであり、極めて鋭く切れ味に問題は無い。あの当時は、しかし、握りと刃は一体で作られ、そして他の手術で使った場合、それは滅菌する前に研いで研磨する必要がある。祖父によって作られたメスは危険なので触ることは禁止されていた。刃先を研ぐことは私にとって怖かった。それは白い光を反射するほど研磨され、私は決してそれに触りたいとも思わなかった。

彼は殆ど野戦病院におけるごとく毎日働いていたが、彼のメスの作製を含む趣味に対する執

着心は、お金に換算できないものだった。これは祖父の特権だった。そして全ての人がそれを認識していた。例えばある人がこの種の趣味に没頭したとしても、すべての人がそうしようとはしないだろう。どんな趣味であろうと彼が使ったのはすべての最高の道具で、それらは既製品であろうが特注品だろうが素晴らしいものだった。それらはとても高価だと思われていたが、誰もそれらの正確な値段は知らなかったようだ。

3.6.3 狩猟

私は、秋の初めに狩猟が解禁になると祖父に連れられてよく狩猟に行った。発砲するときの緊張は格別なものだった。猟犬がハンターである祖父の目の届く範囲を探索する。犬は放たれると興奮し、楽しげに動き回る。しかし獲物の気配を感じると、動きを止め制止を続ける。それがシグナルだ。これでハンターに彼らが獲物にかかる準備ができたと伝える。そして祖父の“Go!”という掛け声を待つ。犬たちは茂みの中に走りこみヤマドリを飛び立たせる。ハンターは銃を構え、獲物に狙いを定め、引き金を引く。私は何度も祖父と狩猟に出かけた。その時祖父は犬が飛び立たせたどんな獲物も撃ち逃したのを見たことがない。もちろん、何にも獲物に出会わない場合もある。そのようなときには祖父は怒って、「足音が大きい!」とか「話をするな」とかイラついて言う。しかし、私は彼と歩くのがまんざらでも無かった。

ある日、私は山で祖父について歩いていた。犬が立ち止まり、一か所を狙う状況になった。犬はやぶの中に消え張り詰めた空気になった。そして祖父は“Go!”と号令をかける。ヤマドリは飛び立った。私は耳を塞ぎ一瞬息を止めた。しかし、祖父は引き金を引かなかった。飛び去る鳥からすぐ目を離し、彼は歩き始めた。祖父が撃ち損じたからなのか。何故彼が撃たないことを選んだのか。なぜだろうと私は自問した。私はヤマドリが優雅にそして静かに飛び去るのを見た。その後、祖父は何も起こらなかったように歩き始め、私は彼にちょっと納得できないまま続いた。案内のスタッフの一人が私の近づくのを待っていて、ささやいた。「坊ちゃん、院長先生がどうして撃っちゃなかったか分かって? ヤマドリが雌じゃったからですけー」。ハンターはその鳥が雄か雌か瞬時に見分けなければならなかったのである。

祖父が狩猟に出かけるときには、同行する人々が前もって決まっていた。彼は当時心臓の病を抱えていた。川に釣りや鳥撃ち以外の狩猟に行くときも、必要な薬を持った病院の看護婦1名が我々に同行した。さらに、運転手1名と案内人、私たちを含めて合計5名（そして必要な猟犬たち）であった。この辺りのレジャーとしては当時はまだ珍しかったが、自家用車でよく出かけた。

3.6.4 赤チンで描かれた小さなオタマジャクシ

私は看護婦長の児玉さんから祖父のやさしさについてよく聞いた。もし祖父が普通のお医者さんであったなら、それは珍しいことではなかったかもしれない。しかし、祖父のことを怖い院長だと思っていた人々には驚きだった。単純な怪我で治療される子供が特に以前病院で治療してもらった経験がある子の場合、病院の建物が目に入った途端に“恐怖のスイッチ”が入る。それは両親にも、もちろん診察室の看護婦にとっても、必ず難しい事態になる。患者が恐怖の状態では病室に入ってくると、いつもの3倍の抵抗に直面することになる。そんなある日、祖父は驚きの行動を行なった。傷口のそばに、古くは良くつかわれたマーキュロクローム（赤チン）で、その

時は何匹かのオタマジャクシを描いたのである。看護婦は驚いた。おそらく彼女がそれまで見たことのなかった技法だっただろう。その子をはじめ赤いオタマジャクシにおびえているように見えた。看護婦は大暴れしないかと身構えた。祖父が治療しやすいように看護婦が押さえつけるにはさらに大きな力があるであろう。看護婦はこの子が次の診察の時はさらに大泣きするだろうと想像していた。しかし、不思議なことに数日後、その子の場合、母親に促されて、泣くのではなく、おとなしく振舞って、院長の前に置かれた小さな椅子に自ら座ったのだった。その時、祖父、看護婦そしてほかの病院スタッフはどう思っただろう？それは映画の1シーンのようだった。一コマ一コマゆっくりと診察室の大人たちの視線が心配げに就学前の子供に注がれてゆく。祖父は恐らくこう言っただろう。

「ほれ、赤チンオタマジャクシが効いたで」。児玉さんはそれ以来、“赤チンオタマジャクシの絵”を見たことがなかった。祖父は赤いオタマジャクシが子供には効果的だ、とよく理解していたのだ。私も自分の目でそれを一度で良いから見たかった。

4 荒瀬病院看護婦長の児玉さん

4.1 看護婦の外科手術への貢献

私は外科医として外科手術用具の名前をすべて覚える前に、何もトラブルもなく最初の手術を安全に終わることができた。それは一般的にはそう難しくもない虫垂突起切除手術だった。ベテランの看護婦が手術の間私に手術用器具を手渡してくれたが、彼女が私に「先生、素晴らしい手術でした！」と手術を終えた時、言ってくれた。私は新参者に過ぎず、器具のちゃんとした名称を思い出せなければ、許してほしいと願っていた。私は口ごもって、「えーと、あの一 あれ、次、何だったかあの・・・をくれ・・・」、と言ったのかも知れない。しかし、新参者に過ぎないにも拘らず、私は虫垂切除手術を、あたかも熟練外科医のようにバックグラウンドにブラームスの曲を流しながら、スムーズに終わることができた。この病院のその看護婦は手術室のベテラン、そしてはるかに古参の・・・百戦錬磨の経験を持つ古参に違いなかった。私が彼女にそれぞれの器具の名称を言う前に、彼女はそれを予測し正確な器具を次々に手渡すことができた。この支援があったからこそ、静寂な雰囲気 flowed のだった。

4.2 看護婦長、児玉さんの存在の意義

児玉さんは祖父が診療を開始した当時から看護婦として働いていた。彼女は荒瀬病院の看護婦長だった。そして祖父、私の父（荒瀬秀隆：大正9(1920)年9月28日誕生～昭和59(1984)年12月7日64歳没）そして叔父（荒瀬敏博：大正12(1923)年1月25日誕生～平成7(1995)年8月30日72歳没）の医療活動を直接に支えたばかりでなく、彼女の晩年には、私の兄と私自身に助言することにより助けてくれた。私の父は、手術の時、児玉さんから直接器具を手渡された最後の人だった。父が病を得て、荒瀬病院を支えるための人が必要となった時、私の兄は医科大学の麻酔科の中心的立場の仕事のためにそれは不可能だった。しかし、私は融通の利く仕事

で、同じ大学病院で中心ではない仕事に3年間いたので、より自由にそこを離れ、三次に帰ることができた。この間三次の病院では、いくつかの手術を行った。しかし、児玉さんは、すでに当時、実際に80歳を超していて、その年齢の人には手術室で支援することは容易でなく、彼女は手術スタッフには加わらなかった。兄も、数年後に病院を引き継ぐために帰ってきたが、大変高齢となった児玉さんから手術器具を手渡してもらった経験はなかったようである。



写真7 荒瀬病院の手術室における手術

左が看護婦長児玉ハズエ、眼鏡をかけた人が荒瀬秀俊

その仕事は簡単に思える。しかしすべての器具の名前を記憶し、医師の要求に従って適時それを手渡さなければならない。道具類の名称と種類は驚くほど多様である。例えば、医師が鉗を手渡すように言った場合、看護婦は医師が使いたい“鉗”の種類がどれかを決めなければならない。しかし、実際の手術に使われる道具の中で、鉗だけでも4つか5つの種類があり、それぞれ違う名称を持っていて必要な操作に従って正しくそれらを使うことが必要である。執刀医は看護婦に“鉗！”とは言わずに、個別の名称を用いて要望をしなければならない。鉗一つに関しても、医師は手術中の各手順に関して別の適したものを要求する。

児玉さんは手術室を離れても、勤務時間には彼女は診察室に来て、若い看護婦を教えたり、困難を抱えた患者を支援したり、そして泣いている子供をあやしたりしていた。彼女は訓練された看護婦として多様なことに適切に対処した。私が三次にいなかった、高校入学から医師として帰ってきた間の20年間のギャップを、彼女は直ぐに埋めてくれた。彼女は、新しい医師としての私に、彼女が荒瀬病院においての長い仕事の間に得た必要な情報を与えてくれた。

児玉さんは病院スタッフと地域住民の橋渡し役を担っていた。長年培った多様なデータの質と量は比類なきものだった。例えば、ある患者が病院を訪れると、児玉さんは、患者はもちろんのこと、患者の家族構成、経済状態などを含む患者の背後の情報も知っていた。私たちは恐らくそんなところまでとても知り得なかった。

これが祖父の医療活動にとって極めて重要であった。言い換えれば、親密に人々と交わることのできる自然な徳の結果である。ともあれ、その情報は、外部の世界と親密ではない院長と彼の家族に蓄えられ、児玉さんを通じてうまく結びつき、そして彼らの協力が診療活動において効果的な観点となったようだ。児玉さんの存在の利点を考慮すると、長年同一の病院で働いたこと、そしてその他すべての関係において彼女の存在は家族の一員のものであった。家族全員がそれに感謝していたことは自然なことであった。

彼女は院長、荒瀬秀俊が施術する際には第一助手として助けた(写真7)。その間彼女の医療知識は豊富になった。私の兄と私は医師になりたての日々、我々は彼女から多くの支援を受けた。彼女の技術は主に祖父によって訓練された結果であったとはいえ、彼女はかなりの努力をしな

ければならなかった。彼女は自分の価値のある経験について誰かに言っておきたいと思ったに違いないと私は思う。しかし彼女は何も書きもので残していない。

医師や看護婦として、そして直接的に言えば、人間として、彼らは類まれな技術とやさしさをオランダの婦人を治療した。さらに、私の祖父と児玉さんの存在は多くの支援者の代表として三次 POW（戦時収容所）の収監者の全員に手を差し伸べることを可能にした。この POW の人々は最も不自由な環境を耐えて、最終的に最高の結果を勝ち得ることができた。晩年の児玉ハズエ婦長とその同僚の看護婦さんたちの写真を示す（写真 8）。



写真 8 昭和 55(1981)-56(1982)年当時の荒瀬病院の児玉ハズエ看護婦長を囲んだ看護婦さん仲間。後列向かって左から：山田明子、井上多恵子、滝口一七江、広川イツコ、小路美保、水本文子、高野瑞江、前列向かって左から：片山節子、山音静香、児玉ハズエ、西村勝代の方々。児玉、西村の両看護婦は p.70 の**写真 8**（昭和 11 年）にも写っている。

5 もしも祖父の決断がなかったら

5.1 終戦処理、東京裁判

私が児玉さんから聞いたのは戦争中の出来事の中で、荒瀬病院の医療スタッフが女性の患者を助けるために行った話だった。患者を含むオランダの人々が最悪の状態になった時、その最悪の状態から救い出された。このことが、ある意味で関係した多くの人々を助けることに繋がった。

この文書を書きながら私は本当に考えてしまうのだが、もし結果が逆だったら、その時はどう

ということが起こったのだろうか？ それは何も非難されずに済んだのだろうか？ 私が日本の戦争犯罪人に対して行われた戦後の東京裁判を知ることに興味を持ったのは学校の歴史の授業ではなくて、私の祖父とオランダ人女性患者の関わりのためだった。

連合軍法廷の裁判官が日本を当時戦争に導いた軍部や政治家のいわゆる A-級戦犯に“絞首刑”と宣言するのは日本人として、私には大きなショックであった。何度も見聞きする間に少し感じ方が変わってきたことを、私は、しかし、許容せざるを得なくなった。これらの人々は、今や被告であり、当時軍の前線を指揮し、先例の無い人類史における犠牲――広島、長崎への原子爆弾の投下の後に敗北を認めることを強いられた。日本の軍人や政治家の指導者たちのような主要な刑罰について、戦勝国の立場から連合法廷によって指揮される裁判に対して異議を述べる傾向があるが、私はここでは裁判について意見や印象を表明しようと思わない。

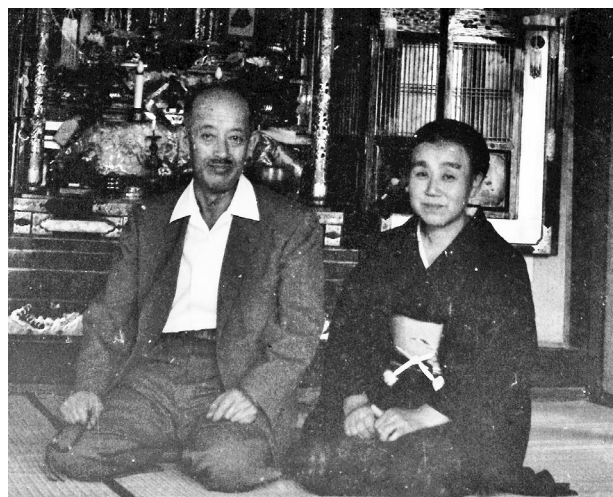


写真 9 1960年8月。荒瀬秀俊と喜代夫妻。川立の旧荒瀬邸の仏壇の前にて。

5.2 戦争終結と原爆の効果

多くの家族がそうであったように、私の親戚の家族は1945年8月6日のその瞬間まで広島でいつものように朝の喧騒の中にいたはずである。その瞬間、一つの爆弾に抗する何事もできなかった。そして私の母はその瞬間に命を失った彼女の姉夫婦について語る時無念さをにじませる。その話のつらさと深い悲しみは子供の私にも理解できた。広島だけでも、その爆弾は十万以上の命を一瞬で奪った。人間が作った武器が、これまた人間自身によって、広島、長崎のピンポイントに投下されたのである。

人々はスイッチがオンされて始まった地獄のなかで無念のうちに死んでいった。私はテレビ番組の証言を見た。そこではあるアメリカ人の退役軍人が十数人のレポーターから原爆に関して質問を受けていた。太平洋戦争で得たメダルで全体が覆われたコートを着てテンガロン・ハットをかぶって、こう言っていた。「原爆の使用によってのみ日本人がさらに戦争の犠牲者になることを避けることを可能にした」。これだけで日本人の感情を逆なでするに十分だ。この個人的な発言に加えて、その次に発せられたことは、「我々が使用した原爆によって日本人が戦争を終わらせることができた。彼らは合衆国に感謝すべきだ」、というのである。原爆攻撃の生存者のみならず、すべての日本人がそしておそらく全ての原爆に直接関係のない世界の人々がこの発言に怒っていると確信する。これは原爆の悲劇を知らない人の言葉だ。未だに後遺症の影響を受

けている人々にとって、これはできれば放送すべきでなかったと考えるのは私一人だろうか？もし彼らが広島への爆撃をもっと冷静に分析していれば、一度に十万人を超える人々を殺す力を詳細に予測していれば、そしてその異常に大きなパワーをそれ以前の武器のものと比べていれば、この悲しみを生む事態は生じなかったと私は確信する。

5.3 B, C-級戦犯とごぼう

A-級の戦犯に関しては、適当な判決が明確な理由の結果としてなされたということができる。しかし、例えば、B 級および C 級戦犯に関する判決の中には、少なからぬ人々が全く理不尽な口実で死刑にされている。私の親戚の一人が東京巣鴨拘置所の通訳として雇われていた。そこでの当時の経験の話を変え聞いた。すなわち、ごぼう（日本では料理食材として普通だが、西洋では雑草とされている）を食べ物として給せられた時、連合国の戦時収監者が訴えたという。収監者はそれを棒きれと間違えてしまった。この話は現在インターネットでも見ることができる。私はこの訴えがのちの判決にどう扱われたかは知らない。

戦争中に収監されていた敵国の非戦闘員である収容者の患者に行われた祖父による医療行為が、もし適切な診察と処置を欠いているとか、あるいはあまりに遅れたことにより彼女を死に至らしめていたとしたら、日本軍は彼女の死に関して祖父を非難できたであろうか？ 実際の日本軍の対応は、通常の介護を放棄し、度重なる医療措置の要望を無視し、そして患者が困難な状態であるのを故意に見過ごしたのである。仮定として戦争が逆の結果で終わったと考えると、祖父は手術を行ったための戦争犯罪者として厳しい判決を受けなかったであろうか？ 私はこの妄想から逃れることができない。これが私のこの問題に向き合った祖父、婦長そしてオランダ人戦時収容者に関する歴史事実を遺産として残したいと思った理由である。

6 荒瀬秀俊とその関係者の思い出

溝田忠人・溝田武人

我々（溝田兄弟）にも編集者としてまた甥として、伯父秀俊に関する忘れがたい数々の思い出話があるので、以下に記述しておきたい。

伯父、秀俊の家族は妻喜代（写真9）、二人の息子（秀隆、敏博）及び娘貴子（写真10）である。伯父、二人の息子と娘、そして編集者の2名はすべて現在の三次高校（我々以外は前身の三次中学、三次高等女学校）の卒業生である。伯父秀俊と息子二人は東京医学専門学校（現東京医科大学）の卒業で外科医である。その孫秀賢と秀治もまた外科医で、戦後の東京医大の卒業である。

最初に、6.1 では敏博の回想文²¹⁾を東京医科大学同窓会広島県支部の出版物“東京医科大学同窓会広島県支部の歴史”から、許可（2019年5月30日付）を受けて引用掲載する。

6.1 親父、秀俊の思い出²¹⁾

6月の中旬、金林先生より親父の思い出と題して何か書いてください、との電話があった。はい書きましようと言ってはみたものの、何から書いたら良いか困ってしまった。それ程父に関する話は多い。順序建てて書くのは難しいので、思いついたままを書くことにする。

今頃の季節になると、親父の血が騒ぎ虫が起きる。河漁、特に河川に恵まれた三次地方は魚が多く、鰻釣りは、名人芸であった。ハヤは浮子を見て釣るのであるが我々が見たのでは解らない動きを見逃すことなく釣り上げる。小生はハヤ釣りが好きでやってみたが、親父に遠く及ばず今日に至っている。それに鰻の穴釣りは、又名人の域に達していたように思う。鰻の釣鉤は自分の手製でないと信用しない。自転車のスポークで作り、麻糸をつけ出来上がり。それを自慢そうに見せるのである。それを褒めないで機嫌が頗る悪い。その自慢の鉤を持って、お供を連れて毎日釣りに行く。小生も一緒に行き、色々と教わったものである。そして段々と父の域に近づいて、小生が一尾でも多く釣ると機嫌が悪いのである。普通の親なら息子が多く釣れば、よく釣ったと喜ぶものであ

荒瀬敏博（昭和23（1948）年卒業）



写真10 昭和18(1943)年5月9日日曜日。敏博の東京医専入学の年。荒瀬敏博（後列左）、荒瀬秀隆（同右）、鈴木文代（前列左：彼らの母喜代の妹）、荒瀬（澤）貴子（前列右）。叔母の鈴木文代が東京での母代わりであった。子供がいなかった文代の生きがいは、甥や姪やその子供たちの面倒を見ることだった。

ると思う。然し父は何事でも息子に負けると腹が立つのである。そして何時もケチをつけるのである。

鮎の友釣りの頃になると、毎日釣りに行きたくてソワソワし出すのである。その時は行きなさいよと言うと、子供の様に喜んで飛んで行く。然し父 60 歳の夏、昼食を済ませて川へ急いで出掛け、心筋梗塞で川辺に倒れた。幸い対岸に鮎釣りの知人が沢山居たので、すぐ飛んできてくれ看病をし、家に連絡をしてくれた。父は幸いその日は川に入らず岸辺に立って釣って居た。そして鮎がかかったので川を下り、鮎を網に入れて元の場所へ帰った途端倒れたと対岸で見ていた人が教えてくれた。幸い一命は取り止めたが、父が後になってその時のことを話した事がある。倒れたときのことをよく覚えていないが、医者である自分は、ここで狼狽したのでは恥になるから激痛をじっと我慢して取り乱す事はすまいと心に誓ったのだと。何時もなら川の中に入って鮎掛けはするのに、その日は対岸に釣人が多かったので反対側で釣っていたのが幸いした。川に入って釣って居たら間違いなく死んでいた事ことだろう。

父の趣味は川のみならず狩猟、主としてキジ、山鳥、シギ(編集者注4：鴨(シギ)ではなく、鴨(カモ)の間違いだと思われる)等が対象物であり、これもまた毎日毎日である。昭和初期の頃で自家用車はない。毎日タクシーで運転手を連れて歩くのである。これも毎日毎日よく続いたものだと感心して見ていた。余程元気な者でないと真似出来る芸当ではない。それに狩猟の腕も一級品であった。ある時はキジを九羽も撃って来たのには驚いた。

父の事を褒めてばかりで恐縮に思うが、実際歌を唄う事を除けば何でもやった。中学校時代は柔道をやり、何時から始めたか定かではないが弓道もやった。絵も上手であり、毛筆も綺麗な字を書いた。東京医専創立当初の連判状の最初の書き出しは父が書いたと聞いていた。また解剖学の講義の時使用された図譜も父の筆になるものと聞いた。医療の面でも非常に勉強家であり、死の1年前までアメリカから取り寄せた原書を辞書片手に翻訳していた。

外科のオペに使う機械でも色々工夫を凝らし便利なものを自分で作っていた。メスも自家製で、一本のステンレスに鋼を接続して自分で研磨し、よく切れるメスで開腹術に使っていた。切れ味が落ちると自分でまた研いで使うのである。その勤勉さと努力には今でも頭の下がる思いがする。

然し父も一人の人間である。良い点ばかりである筈がない。父は生来短気者であった。それが一寸やそとの短気ではない。父の時代、広島県の北には外科医は多分父位のもので聞いていた。クランケには、的確な治療をするのであるが、一寸でも父の気に触る行動や話し方が悪いと瞬間的に父の激怒が大爆発するのである。あの頃、いや父が死ぬ迄、叱られない患者は居なかったであろう。あの炯々たる眼光で睨まれたら誰でも震え上がった。小生は毎日睨まれていた。田舎から患者が来るときは村によっては、村長の訓示があったと言う。村長、「荒瀬に行ったら先生に決していらん事は言うな。黙って診て貰って来い」。これは嘘のような本当の話である。今でも父を知って居る人は、先生は本当に恐ろしかったと言う。家に来る連中も沢山あったが、特に開業当初より出入りして居た人々は、父に先生とは呼ばず、親分と呼んでいた。幼い頃の小生は奇異に感じられた。父は人情家でもあり、金の無いクランケからは、一銭も取らなかった。人の面倒見も良かった。それで父の周囲には人が何時も集まって、何時も哄笑が絶えなかった。

父は英会話が話せた。戦争中三次町の尾関山と言う桜の名所があるが、そこにオランダの病院船の捕虜が、人数は一寸忘れたが軍医中将を頭に相当の人数が居た。その連中の中には病氣

になる人も居た。そして父のオベを受け、良くなった者が3人位居た様に思う。こんな時に英語が喋れると言う事は、非常にプラスになる。父が英語を喋れた為に、彼、彼女等は助かったのである。いよいよ彼らが母国オランダに帰る時、一夜送別会を催した。彼等は父に感謝の言葉を述べ、国に帰ったら必ず父を招待すると約束した。しかし、何年経っても招待状が遂に来なかった。ただし父はその事について一言も語ろうとしなかった。後に分かった事であるがオランダは日本に対して非常に敵愾心を持って居た事が報じられた。お国の事情があったので、招待状も出せなかったのであろう。

戦後間もない頃、当時の耳鼻咽喉科の教授広瀬隆先生、お供として南原、蔵田両先輩が来られ、父といろいろ話された事もあり、その後、外科の故篠井教授、それに今尚元気で御活躍中の杉江教授も来広され、父と酒を痛飲され乍ら一夜を過ごされた事があった。あの当時が父の一番脂の乗った時ではなかったろうか。うれしそうだった父の顔が懐かしい。

父も昭和30年夏、心筋梗塞で倒れてから段々と弱って行っただが、勉強だけは続けて居た。毎朝毎朝当時としては、珍しいアメリカの外科の原書を読んで色々と教えてくれた。今でも頭に残っているのは小児単径ヘルニア変法は創痕も残さず比較的簡単なものであった。

父が死期が近づく頃、盛んに右腹を抑えて居た。多分肝臓に変化が起こり痛みでもあったのだろう。それでも主治医の先生の目を盗んで川に山へと出掛けた。死ぬ迄それは続いたのである。父は昭和37年4月下旬アポで倒れ5月3日朝永眠したが、私の拙い文章では、表現できない豪放な数奇な生涯を閉じたのである。

父は広島県の同窓会会長を昭和初期より、井槌先生に受け継ぐまで20数年勤めた様であるが、その頃は今の様な東医出身者は多くなかった。父がどの程度の事をして居たのか私は知らなかった。

話をするなら一晩かかっても語り尽くせない程の話があるが、いざ文章にすると実には拙い筆となって情けないと思います。余暇を割いて書いた下手な文で御免なさい。父の思い出の一旦にもなっていないと思いつつ筆をおきますこと重々お許しください。

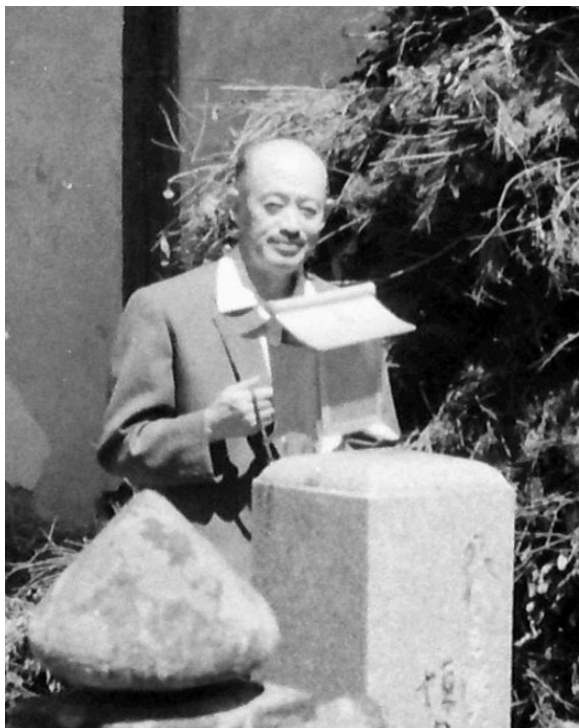


写真 11-1 荒瀬秀俊。お盆の円勝寺にて。



写真 11-2 荒瀬敏博。大正 12(1923)年 1 月 25 日誕生
～平成 7(1995)年 8 月 30 日 72 歳没。

6.2 荒瀬家と溝田との関わり

溝田忠人・溝田武人

私たち溝田一家（両親と3人の子供）は、1945年3月東京の吉祥寺から下川立の荒瀬家の旧宅（写真9）、広島県双三郡川地村（当時の住所）、に疎開した。それは、東京の爆撃と戦争の影響が次第にひどく危険になって来たので、私たちの家族は母の一番上の姉、荒瀬喜代(明治31(



写真12 新宿小町と言われていたころの今野（荒瀬）喜代。明治31（1898）年5月16日誕生～平成5（1993）年11月9日94歳没。

1898)年5月16日誕生～平成5（1993）年11月9日94歳没)とその夫秀俊（写真9、11）の荒瀬の旧宅に住むようにという厚意を受けたからであった。その家は私たち全員にとって十分に大きかった。以来、私たちはそこに20年以上住むことになった。

私たちの伯母今野喜代は若い時大変な美人だったので“新宿小町”（写真12）と呼ばれていた。これは平安時代の絶世の美人、小野小町のように美しかったということの意味する。秀俊は近くの東京医専の学生だった。彼らは出会い、恋して、



写真13 在学中の荒瀬秀俊。東京医科大学図書館の戸村さんが見つけて提供された。



写真14 昭和35（1959）年1月9日。宇都宮家の葬儀会葬時の今野の3姉妹。手前から荒瀬喜代、鈴木文代、溝田千代子。宇都宮家（高田郡甲田町下大原）の娘イワノ(p.2、図1参照)が7代荒瀬元安（1835-1899）に嫁して以来100年の縁。この当時、両家は法事等では行き来していたが、両家の縁を明確に知る人は無かった。

結婚したのだった。

写真 14 には、そのずっと後の喜代、鈴木文代、溝田千代子の今野の 3 姉妹が写っている。

末の妹、私たちの母、溝田千代子（大正 5(1916)3 月 25 誕生～平成 29(2017)年 2 月 25 日 100 歳と 11 か月で没）は、私たち子供に大正 12 年（1923 年）9 月の関東大震災の経験について以下のように語っていた。千代子の家族、今野家は地震の後、安全のために新宿区の東大久保の東京医専のグラウンドに避難した。そこは新宿キャンパスまたは教員キャンパスと学生によって呼ばれていた。彼らは戸外で 1 週間過ごし、地震の後の交通困難のために帰宅が遅れていた父の帰りを待った。外国人が井戸に毒を入れ、不安を助長して混乱を引き起こそうとしているという偽情報が避難者の間で広まった時、当時医学生であった荒瀬秀俊は、“そのような話は信用できないデマに過ぎない”、と周囲の人達を説得していた。

6.3 佐藤（溝田）英子の思い出

1945 年 3 月、私たちが川立に転居したとき、姉の英子は 6 歳だった。4 月から彼女は小学生になった。戦争が終わってすぐの 9 月 12 日、オランダの収容者は福塩線経由で三次を離れ、そして帰路についた。三次を立つ少し前、秀俊は、病院で手術を受けたブラウアー婦人を含む主要なオランダ人を招待して送別会を持った⁵⁾。さらに、秀治の母、荒瀬慶子（大正 13(1924)年 1 月 27 日誕生～平成 15(2003)年 12 月 14 日 79 歳没）の話したことが引用文献 4) に書かれている。“軍医と看護婦達がここに来たがっていて、そして 5、6 人のグループでよく来ていた”そうだと。加えて、“メレマ医師と別の外科医が 10 人の看護婦らを伴って荒瀬家を訪問していたが、送別会に招待され、彼らは収容所での長い空腹を耐えた後のおいしい食事を満喫した”と記録されている。

英子は、ある日荒瀬家を訪問した時、居間兼食堂に入った。彼女はぱったり何人かの背の高い外国人に出くわして、驚いた途端に泣き出した。その時、彼らの一人が彼女を慰めてキリンと象の縫いぐるみの人形をくれた。英子は小学生として、日曜日以外に、彼女の住まいから 10km 以上離れた三次町の荒瀬病院に行くことはない。伯父の秀俊とそのスタッフは 1945 年の 8 月 6 日の原爆投下による患者の治療で忙しかったであろう。英子が何人かの外国人と荒瀬の家で出くわした日は 1945 年の戦争の終わった 8 月末から 9 月の間であろう。その時期、三次には他に外国人がいたことは想像できない。英子の記憶はこの時期のことであった。

その後、二つの動物の縫いぐるみで長い間遊んで、しまいには擦り切れてしまった。しばらくの間、それらは下川立の家にあったが、最後には捨てられてしまった。もちろん、我々はそれらがそんな国際的な事件に関係していたとは知る由もなかった。

6.4 溝田忠人による伯父秀俊と秀賢君の思い出

“荒瀬のおじちゃん”と我々が呼んでいた伯父は前述されているように怖い人と思われており、そして、家族、大人の親戚は彼と直接話すのを遠慮していた。私は子供の時でさえはっきりそれが分かっていた。初めて彼にあったのは、疎開した直ぐ後で私は 3 歳であった、そして私は特別

に怖い人とはちっとも感じないどころか、とても興味深いおじさんだった。

6.4.1 患者としてお世話になったこと

川立に転居して、戦争直後の良くない栄養状態から私は皮膚トラブルを抱えていた。当時の子供たちと同じように、私は病気に対する抵抗力が弱かった。夏には、私の足は虫に刺されて、そこから“おでき”が出来ており、包帯で覆われていた。荒瀬病院で治療してもらい、そこでは、ただ包帯を足から取り去って、薬を塗り直すだけだったけれど、おできは包帯とガーゼに固くくっついていて、毎回、包帯とガーゼはかさぶたにくっついており、足から引きはがされた。私は血が出るのと痛みで殆ど泣かんばかりであった。優しく軟膏を塗ってくれたのは児玉さんだった。私が小学校に上がり、3年生になって、抵抗力がつき、治療は要らなくなった。

4年生の時、私は夏休み中に恐らく川で泳ぎすぎたようである。そして体力を失ない、秋になって少し熱が出ても下がらなくなった。荒瀬病院で X 線検査を受け、肺門リンパ腺炎と診断された。それは結核の初期である。幸運にも私は抗生剤のストレプトマイシンを朝と夜に注射してもらうことができた。荒瀬病院に一ヶ月滞在した後、その薬から脱することができた。その新薬が使えたとはいえ、間違いなく当時は伯父の大きな支援があつてのことであった。後年、伯父は私に、何も跡が残らなくてよかったと言った。なぜなら結核の影があると検査のたびに疑われて医療再チェックを受ける必要があつたからである。荒瀬病院に滞在した間に、体温は朝晩測定した。しかし、夕方にはその体温が 37°C 以上にどうしても上がる。私は我慢できなくて、それを下げるために体温計を正しい位置からずらしたりした。しかし、その温度がしばしば低すぎて見破られ叱られた。体温が平常値に戻った時は、私の周りにいた人々がみんな喜んでくれたことを忘れられない。その治療の時、私は学校を休んだ。そして一日中荒瀬家の人々と過ごした。自由な時間があつたので、江戸時代を舞台とした推理小説“銭形平次捕物帳控”を伯父の蔵書から取り出して読んだ。

その当時は多くの人々が、子供も同様だが結核にかかった。それは簡単に“肺病”と呼ばれていた。私が川地小学校の 1 年生の時には、教室で若いきれいな先生が咳をしてハンカチの上に血を吐いたのを見た。私はハンカチの上の真っ赤な色を今でも忘れられない。その後、その先生はお休みになった。その後、担任は年配の女性の先生に代わったが、その方が三次に箕岡医院を開かれている箕岡医師のお母様である。

今では考えられないことであるが、伯父は私に何回か「今から手術をするが、見学するか？」と言った。多くの場合それは“盲腸”の手術、すなわち虫垂突起切除手術であった。しかし、ある時美しい若い女性が手術台に横たわっている。そして伯父が最終的に彼女のお腹を開けて中から取り出したのは血にまみれた大人のげんこつほどの肉塊であった。それは後でわかったことだが、子宮筋腫を切除する手術だった。伯父はその患者に「大丈夫でえ～、赤んぼも生めるでえ～」と言った。彼は私に外科医に興味を持たせ、そして将来医者になってほしいと思っていたようだと思った。

6.4.2 伯父のものづくり魂

伯父はものづくりが上手く、彼の自身の釣りや医療の道具、およびメスまでも作った。極めて小さいメスは耳鼻咽喉科手術で用いられた。さらに、特別に注意深く作られ、金メッキされたメ

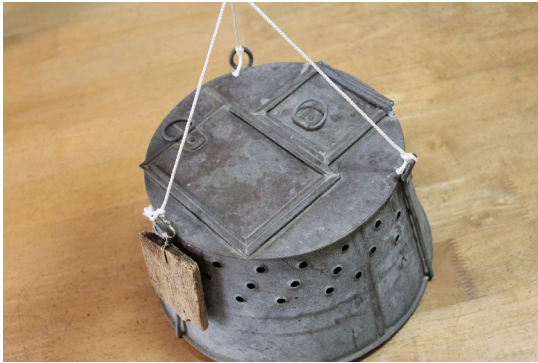
スが医師（おそらく英子の記憶によると東京医科大学の教授）にプレゼントされた。普通の金魚を飼う四角いガラス容器の中のメッキ液は暗緑の魅力的な色だった。陰極の磨かれたメスと陽極の金板が電池の電源に繋がれ、メッキのために沈められた。一連の過程が済んで、取り出されたものは美しい金色に変わっていた。メスの刃は普通の鋼で作られるのではなくて日本刀から切り出された。そして持ち手部分は青銅またはそれに似たもので作られた。刃の部分は持ち手部分に差し込まれ、続いてピン止めし、磨き、さらにメッキした。完成すると、彼は頭の後ろの髪（伯父の頭のとっぺんに髪は殆どなかったが）に刃を当てて、切れ味を試していた。その動作の意味が私にはわからなかった。それで、私はメスを手に取って、伯父をまねて自分の頭に持って行ったとき、私はびっくりするような声で「危ない！！」と叱られた。伯父は刃を剃刀の状態まで研磨し、チェックしていたのだった。さらに、伯父はアユ用の収納箱を自分で設計してブリキ屋さんに作らせていた。それは、釣り上げたアユを容易に収納箱に入れ、安全に保ち、そして釣

りをしている間に逃げるのを防いだ（写真 15）。

6.4.3 伯父の周りの悲喜劇——英語の質問など

私が中学生と高校生の時、伯父と食事をする場合、英語の試験が、前に秀治によって述べられているように(p.14)、私の従兄たちと同様に始まるのだった。「大根は英語で何というか?」「豹は英語で何というか?」などなど。彼はだんだん難しい質問に発展して行った。私はこれらの試験にご飯中に耐えなければならなかった。しかし、荒瀬家のごちそうを美味しくいただくことができた（写真 16）。

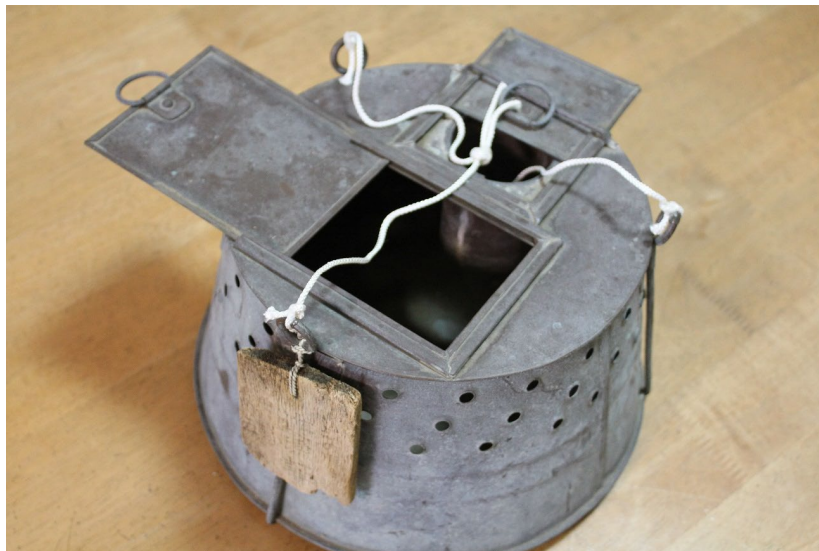
伯父は私が大学生の時、三次から離れていた間に亡くなった。彼は心臓病、肝臓病などを患っていた。私は三次を離れるとき、彼を見舞った。彼は話すことさえ困難だったが、彼の最後の呼びかけ「タ ダ ト …」を聞くことができた。



a



b



c

写真 15 秀俊が考案し、作らせて使用していたアユ釣り用のびく。敏博が受け継ぎ、武人が貰って、保存していた。a： 外観、ふたを閉めたところ。 b： 付いていた「江の川遊漁証」の字が読める鑑札。c： ふたを開けたところ、手前の大きな口がアユを取り出すための口、上の半円の小口が釣った鮎を入れる口、中に円筒のガイドがついていて、中の鮎が飛び出せないようになっている。見えている周囲の多くの小穴は、水に沈めて中の水を新鮮に保つための流水穴。

以前、伯父は含蓄のあることを言っていた。「医師は単に患者の半分を助けるに過ぎない。後の半分は患者自身の生命力で治癒するものだ」と。

明治時代に育った人には普通のことだったであろうが、天皇がテレビジョンに登場すると、伯父は「あまりに失礼だ！不敬である！」というようなことを言っていた。彼は天皇がテレビ画面に映されることを批判していた。そして、天皇の映像が消えるまで TV スクリーンの前に正座し、威儀を正し、時には涙していた。

彼は被爆直後の広島市に三次の医師団長として行き、被爆した患者たちの救援のために次男の敏博と児玉看護婦長を伴って診療活動を行った²⁾。多くの傷ついた兵士を含む市民がおり、ある人は「わしは軍人だ。早く診察しろ！」と要求した。一方で、他の軍人はひどい怪我をしているにもかかわらず診療の列に静かに並んで待っていた。伯父と従兄については確認していないが、児玉さんは被爆者手帳を持っていた。

敏博は、柔道4段で、卒業した三次高校によく練習に行っていた。そこで彼は簡単に高校生の柔道部主将を投げ飛ばしていたと聞いた。彼は東京医専をとっくに卒業し、荒瀬病院を手伝っていた。しかし、彼は時に彼の後輩の練習に参加するのを楽しみにしていたのだった。

伯父は晩年閉所恐怖症を患っていて、夜寝ているときなどにパニックに陥っていたようだ。人々は、彼が原爆被災者救援に行った時に受けた精神的、肉体的ショックによるに違いないと想像していた。外科医のパイオニアとして、彼は多くの修羅場を経験してきただろう。しかし、そればかりではなく、見かけの豪胆な印象にもかかわらず、彼は毎日の生活を生き抜き、とてつもないストレスの多い人生を送っていたのだと私は思う。

彼の晩年の数年、体のあちこちの病になり、特に便秘に苦しんでいた。ある日、私はトイレの壁に貼ってある半紙を見つけた。書いてあった正確な言葉は忘れたが、俳句のようなもので、“出るべきものが出るほど気持ちのいいものはない”というようなものだった。妻に、トイレに紙と筆を持ってこさせてそれを書いたと聞いた。皆な呆れてクスクス笑っていた。

伯父の愛娘、澤 貴子は父ゆずりのユーモアに富んでいた。彼女には面白い特技があった。まるでカメレオンのように左右の目を別々に動かせるのだ。右目を真ん中に止めて左目をぐるぐる回せた。両目を内側に寄せるのは多くの人ができるが、彼女は外側いっぱい寄せられる。それだけでなく、大きなびっくり眼（まなこ）の彼女がそのようなことをすると、特別なすごみがあり、皆を驚かせていた。また奥眼の親族には、“この奥に眼あり馬繋ぐべからず、という立札が立っている”と言って笑わせていた。その上、面倒見は極め付き良くて、川立の近所の先輩や後輩達を三次の荒瀬病院に連れて行ったり、川立に来た時には共に遊んだそうである。



写真 16 1961年12月24日のクリスマスイブ。秀俊と喜代（下段左）を囲んだ荒瀬家の人々。

6.4.4 秀賢君の思い出

故秀賢君（写真 3、17）の思い出についても書いておきたい。彼が幼少期から小学生までの時期、父秀隆は東京医大で医学の研鑽を続けていたので、祖父母の気持ちもあって、秀賢は三次で育てられた。病院と家庭とは一体になっていたため家庭の人々は彼を除いて全て成人だった。その人たちの大部分は病院スタッフで、その中で“こぶちゃん”（彼は児玉さんを“こぶちゃん”と呼んでいた）は彼をとててもかわいがった。そのせいで、小学校に入るまで自分自身を”坊っちゃん“（彼をみんなが”坊ちゃん“と呼ぶので）と呼んでいた。そこで、彼らはそれを小学校に入学する前に”ぼく“と呼ぶように直そうとしていたが、うまく行かなかった。私たちがまた子供同士、彼の教育を手助けするように頼まれた。彼が川立の家に来た時だけは、遊び仲間としての私達のような子供がいた。

その家の 300m 前方にある芸備線の線路を走る蒸気機関車（SL）（p.72 参照）を見るのが大好きであった。彼は汽笛の音がするや否や、どこにいても家の縁側に走って行き、列車が通り過ぎるまで客車や長い貨物列車の数を数えていた。私たちは夏には家の後ろの可愛川（えのかわ）で彼に泳ぎを教えた。彼が4年生になると、英語のアルファベットのローマ字を学習するのに手こずっていた。母、慶子さんが我々に彼がローマ字を早く覚えられるように頼んだ。彼女は当時すでに三次で彼と一緒に住むようになっていた。それまでは、川立では彼は勉強をしなくて良かった。なぜなら村の環境では、勉強するためのたくさんのツ

ールはなくて、絵を描くことくらいだった。そこで、どうやってローマ字を教えようかと考えて、私は彼の好きな広島カープの野球選手の名前を書いた。今覚えている選手の名前は、Kozuru, Shiraishi, Hasegawa など、彼にそれらを書いて見せると、途端に興味を持って、その他の色々な選手の名前の書き方を尋ね始めた。そしてあっという間に彼はローマ字をマスターした。彼のその後の長い人生の2つの趣味、SL列車と広島カープがその時代に既に出来上がっていたのだった。

6.4.5 川立の荒瀬旧宅とその周辺

昭和20年(1945年)春、私の家族は東京を離れ、下川立の荒瀬の旧宅に住み始めた(写真18、図2)。そこには、秀俊の継母ウタさんが一人で住んでいた。子供の私の目からはずいぶん年寄りに見えたが、実際にはおよそ70歳を少し過ぎたくらいである。その家はとても大きくて母屋には8つの部屋、台所、そしてその建物の3辺を取り巻く長い廊下があった。古い人力車(写真19)が広い玄関土間の隅に置いてあった。玄関土間の北の壁には、米俵を積み上げた丸い跡が天井近くまで残っていた。その母屋は平屋建てだったが、大きな2段の屋根で覆われていて全部の高さは普通の家を2階建の高さをはるかに越していた。避雷針が屋根の棟の中央に置かれていた。その避雷針の先は白金板で覆われていると聞いていて、白く輝いていた。家を含む敷地の周囲は屋根付きの塀で囲まれていた。南東の大門と南西の小門があり、前の塀に連なっていた。大門には脇門が付いていた。他に2つの門があり、1つは北東の面に、他は裏にあった。

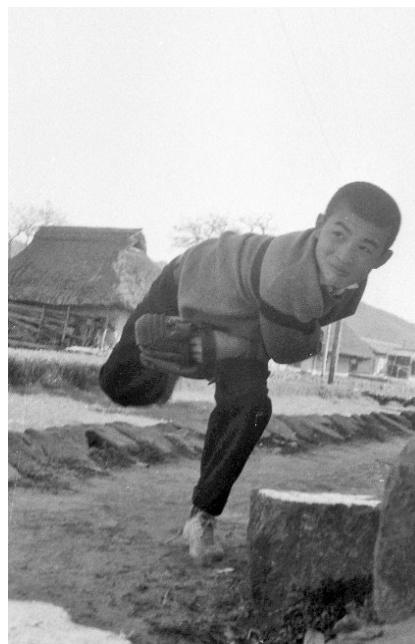


写真 17 1961年4月。荒瀬秀賢、14歳。
川立旧荒瀬邸前にて。

塀に囲まれた敷地の中には母屋の他に大きな3つの建物があった。33頁の図2のように西門を入れて左が別館であり、大門の直ぐ右手は病院棟で、右手の奥まった所に倉庫があった。病院棟を“診察場”と私たちは呼んでいた。その中の各部屋の役目はすぐに想像できた。例えば、患者の待合室を兼ねた玄関室、受付を併設した薬局、診察室、そして最も奥に手術室があった。診察場にはある期間、母の姉である伯母の草刈知枝と娘の3姉妹が住んでいた。彼女らは終戦直後に北部中国(満州)から帰国していたのである。

母屋の裏には井戸があった。裏の塀の外は、現在でも有限会社児玉醤油(現在は児玉敏宏社長)のお宅である。児玉さんの井戸は旨い水で有名だった。しかし荒瀬の井戸は、たったの30mくらいしか離れていないのに余り良くなかった。児玉家の家と堤防の向こうは可愛川だった。子供時代の最も心躍る楽しい記憶は夏の水泳と四季を通じての川の周りでの遊びだった。

その当時、短い期間だったが、磯崎家も共に荒瀬邸の母屋に住んでいた。私より少し年長の磯崎弘毅さんのことを鮮明に覚えている。彼の叔父さん（彼の父の弟）は後年の日本国有鉄道の総裁、磯崎 叡（さとし）である。磯崎弘毅（こうちゃんと我々はよんでいた）は、川崎重工業の部長として国産初の旅客機 YS11 の開発に携わり、日本ロケット学会の会長になったが、兄のように私たちと遊んでくれた。彼は、工作が得意であった。例えば自分で作った“鉛筆列車”の玩具で遊んでいた（図3）。その列車は、木の鉛筆を縦に2分割して、芯を中心に残し、数センチメートルの長さに切断して客車にしていた。いくつかの鉛筆の客車を彼の木製の机の表面に彫った曲線の溝にその鉛筆の芯をはめ込んで並べてあった。当時は鉛筆の品質が悪く縦によく割けたので、その弱点を上手く使って自家製の玩具にして机の上で遊んでいたのだ。その最後尾の貨車を後ろから押すと、列車の列が曲がりくねった溝に沿って本物の汽車のように進んだ。今から考えるとそれはモノレールの走りであった。

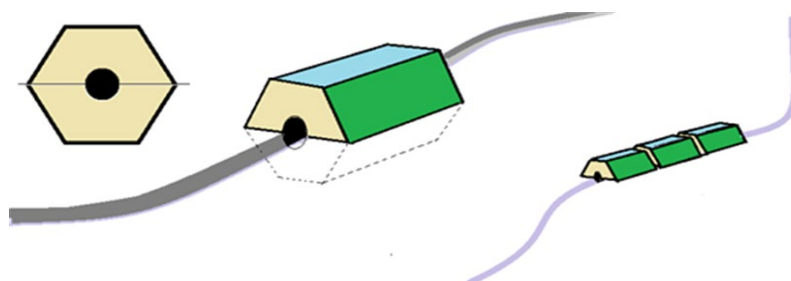


図3 磯崎弘毅さんの作った独特な鉛筆列車。左：筆の切断断面図。中：1両の貨車。右：貨車を3両連結。

武人は小学生の時、広島市に引っ越した磯崎家を訪問したことを覚えている。弘毅さんの部屋には、畳が見えないくらい沢山のレールが敷き詰められ、おもちゃの電気機関車が走りまわっていたのを覚えている。また60歳代であったが流体力学者の東 昭氏に学生への講演を依頼した際に、雑談で磯崎弘毅氏に関する昔話で盛り上がったこともある。

我々が高校生のころ、前述の診察場の薬局だった部屋を勉強部屋に改造して受験勉強をした。しかし、その部屋の気温は冬には -5°C にまで下がった。その敷地の右側の奥には蔵があった。蔵の入り口の前に小さな居間があり、以前は荒瀬で働く人が住むところだった。そこに、私たちの子供時代に永木家の家族が大陸から帰還してしばらく住んでいた。その後、永木のお婆さんは、若い人たちが立ち退いた後もそこに一人で住んでいた。母屋の左側は客殿だった。私たちは“離れ”と呼んでいたが、そこが東京から移転してきて私たちが最初に住んだところだった。母屋からは長い直角に曲がった廊下に沿って、2つのトイレと風呂場があった。秀俊の継母のウタさんが亡くなってから、私たち家族は母屋に移転して住んだ。

毎年秋10月末、太平神社の収穫祭がある。3年に一度は当屋で下川立地域をお祭りの行列が練り歩く。旧荒瀬家の大門のすぐ内側の広場が、お祝いの“胴打ち”が演奏と踊りを行う場所になっていた（写真20、21）。“胴打ち”は太鼓や鐘を打ち鳴らして踊る。着物を着飾った、多くの子供たちが演じる。ヒョットコの面をかぶった年長の少年は、竹製で色とりどりの紙で飾られた軍配を持ち、踊りと演奏の“胴打ち”を率いていた。

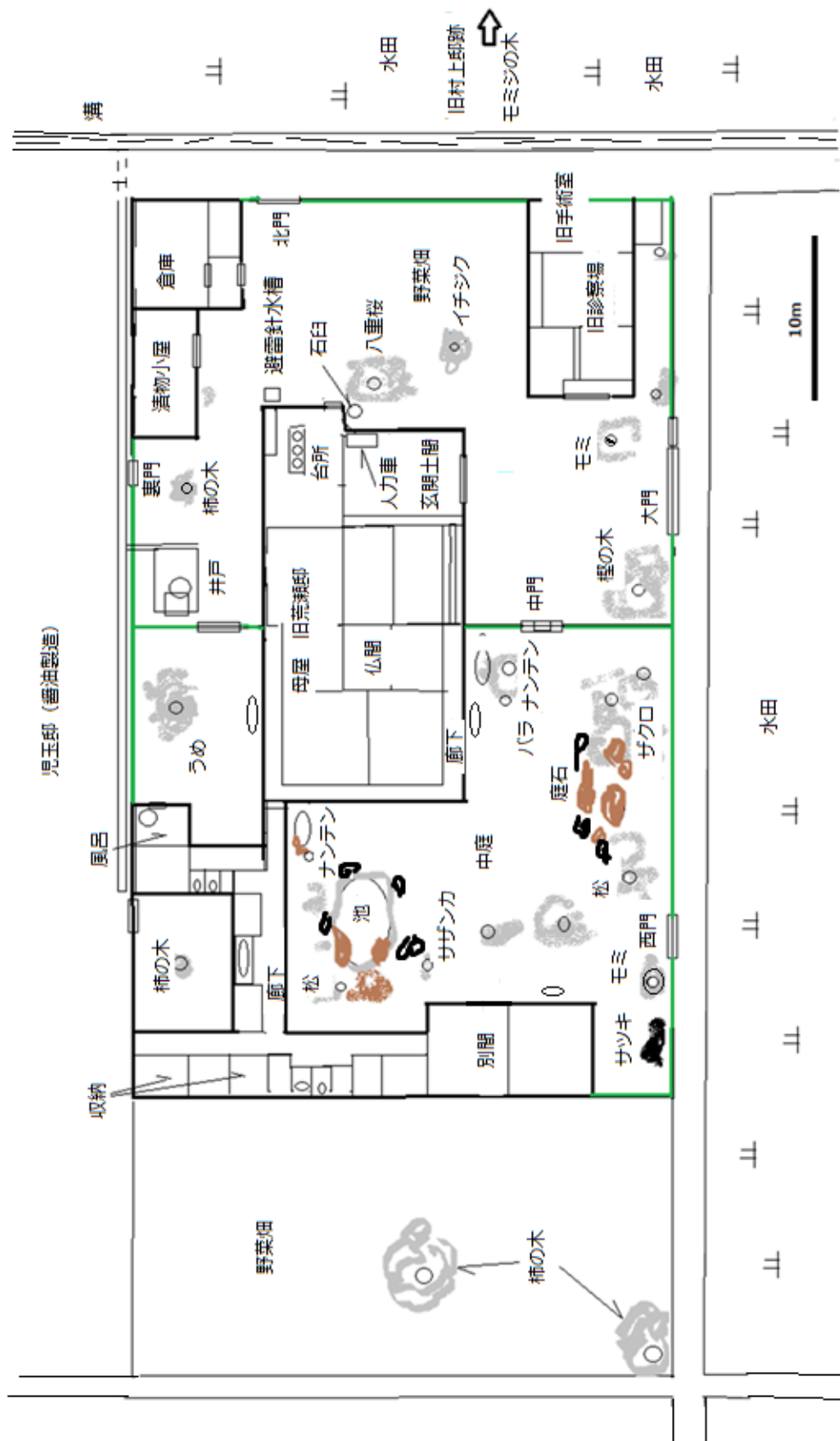


図2 旧荒瀬邸の建物等の配置図、1960年当時



写真 18 1960年の夏。下川立の荒瀬家旧宅。溝田一家が住んでいた当時。



写真 19 下川立の荒瀬医院の昭和初期に往診などに使われた人力車。現在は修理されて三次の荒瀬医院の母屋の玄関に展示されている。

彼らは川地村の大平神社への行進の間にこんな時とばかり、子供たちを追いかけたり脅したり、ぶったりした。獅子舞も胴打ちに伴って大きな獅子が周りの子供の頭を咬む真似をしたので、小さな子供は泣くばかりだった。神道のお祭りで子供の健康な成長のための願を現す意図でしかないのだが、子供にとっては必死で逃げ回る恐ろしい経験であった。



写真 20 荒瀬旧宅の大門内の広場で大平神社の秋祭りに向かう胴打ちの集団の演舞が行われた。中央少し左の木の幹は馬の蹄で片面が削られてへこんでいる。昭和 37(1962)年 10 月 30 日撮影。この年の 5 月 3 日に荒瀬秀俊は亡くなっている。故人への弔意を込めて特に賑やかに行って頂いた様子である。



写真 21 秋祭りの子供胴打ちと右下の後ろ姿の竹製の軍配を持つ少年リーダー（トウハチ）。昭和 37(1962)年 10 月 30 日。

診察場の前の広場の一角に 1 本のモミの木があった。その幹の片面は失われていた（写真 20）。私はその理由を、昔、診療所の医師が往診に行くのを待っていた馬がこの木に繋がれていて、いつも鉄の蹄でこの幹をひっかいていた名残だと、聞いていた。

中門を持つ塀がこの広場と南西側の庭を隔てていた。その門の内側には客殿（離れ）と小さな池を囲んで広い日本庭園があった。西門の傍には最も背の高いモミの木があった。他の木々は、百日紅、山茶花（茶の木の種類）、ザクロ、沢山の松、多くのサツキ類、が植えられ、そして大きな庭石が置かれていた。サツキが満開の頃は、見物に立ち寄る人もいた。

離れの左手前方には二本の大きな柿の木があった（写真 22）。その実は大きくて甘かったが、熟して食べられるようになるまで、ほとんど冬近くまで長い時間を必要とした。2 本の木はどちらも太く背が高く、枝は我々のずっと上高くに伸びていたので、小学校高学年になっても登るのが困難だった。これらの木の周りの畑は当時の家族にとって大切だった。それ以前の荒瀬家は医者の家系として裕福で村の中心的、指導的な名士としての存在であったが、終戦直後の食糧難の間に、私たちは自身の農産物を自給した。

旧荒瀬邸の東北側には、狭い田があった。そこに石垣で囲まれ低い盛り土部分があり、その中心には古いモミジの木が立っていた。この村の庄屋、村上家がそこにあったと言い伝えられて、田圃の中には整然とした礎石の配列が残っていた。8 代荒瀬一基は村上家の出であった。私たちは村上がその家系を何故継いでいないのか、どこに行ってしまったのかを聞いていなかった。以後、一基は荒瀬家の養子となり、そして 8 代目の医師の家長となった。

広い田んぼが荒瀬家の前に広がっていた。戦前、付近の多くの土地は荒瀬家の所有であったと聞いていた。すべての土地が戦後の農地改革によって農家に移転された。私は幾人か



写真 22 秋のカキの実の収穫。もう 1 本の柿の木の枝が左側に見える。

の小作人がいくつかの米俵を荒瀬家の玄関広間に運び込んだのを、1945年の秋に見た記憶がある。地主の立場からは、農地改革政策は彼らの田畑を奪うことを意味するだけであった。荒瀬家の一人が、こう言った。「我々は農民の依頼によって農地を買い上げたに過ぎないのに、農地改革はまるで泥棒のように我々から農地を強制的に奪った」。しかし、昭和20年(1945年)当時は不在地主だった訳で、農家との間で何らかの軋轢はあったかも知れない。

その農地改革の進行過程の結果だったのだろうが、私の家族は1シーズンのみだったが荒瀬家の前の2反の田んぼでコメ作りをした。戦前にあった社会の格差は農地改革によってこのように修正された。このことによって主に農民からなる単純な社会構造の土地の所有制度が成功裏に実施された。現代社会の社会格差は余りに複雑で70年以上後では人々はこれを理解することさえ難しい。しかし、個々の交流は別で、昭和20年3月末から住みだした我々一家は、ご近所からは何かと親切に食料や生活物資の供与を受けた。父・早人が残した手記(昭和老人の手記、1989.9.27)には、涙が出るほどうれしかったと書いている。

荒瀬家の前の広い田んぼの向こうの茶臼山の麓の斜面に、鉄道の芸備線が走っていた。当時はSLだけが走っていた。父は、当時の食料難の時期を家族の食べ物を確保するために国鉄から荒地を少し借り、自ら開墾した。カヤで覆われた近くの斜面は雪が降っても降らなくても子供達にはそり遊びのための良い場所だった。線路を超すと、ため池“おおづつみ”(大堤)があった。ある種の水草がそこには生えており、水鳥が泳いでいた。この池から大平神社への途中にいくつかの古墳があり、その1つは大きな穴の周りが石造りである。その穴は江戸時代に博徒の秘密の根城であったと言われていた。小学校校長の鶴殿先生は私に金の指輪を見せてくれた。それは古墳の床を発掘しているときに偶然見つけたものだった。

6.5 溝田武人による伯父秀俊とその家族の思い出

6.5.1 伯父には大変お世話になった

私達はいつも可愛川で遊んでいた。小学校1年生の時、水泳中に耳に水が入って中耳炎になった。2年生になって、秀俊伯父に耳の後ろを切開する中耳炎手術をお願いした。今でも私は医療用のノミが頭蓋骨の付近を打つ鉛のハンマーの不愉快な感触を覚えている。それは局所麻酔の厳しい手術で、伯父の手作りの道具を用いて行われたようだ。この手術は、オランダの看護婦が7年前に同じスタッフによってなされた手術台で、同じく児玉さんの補助で行われた。

大学に入学後、1年生と3年生の夏休みに私は右耳が慢性中耳炎術後症と診断され2回の手術を受けた。熊本大学病院の執刀医は、12年前の手術跡を診て伯父の腕前を称賛した。「12年前にこのような素晴らしい手術ができたとは、彼は極めて稀な優秀な外科医だったに違いないですね」。76歳の今でも慢性中耳炎術後症で定期的に耳鼻科に通っている。右耳は聞こえないが、ほとんどトラブルはなく、伯父にも大変感謝している。

三次の荒瀬家の中庭には大きな池があり、そこに冷たい井戸水が注がれていた。その深い部分には体長1m級の2、3匹の大サンショウウオ(ハンザケと呼んでいた)を飼ってい

た。今では特別天然記念物で飼うことはできない。鯉と鮎が浅い部分に飼われていた。

1匹の日本猿が檻に飼われていた。廊下には、伯父の作った竹籠に鶉がいた。フクロウやムササビも飼われていた時もあった。

伯父は猟銃ばかりではなく空気銃も持っていた。彼は猿の檻に近づく蠅を空砲で打ち落とすという面白い趣味を持っていた。それは部屋の端から弾を入れなくて空気砲で撃つのである。同じ空気砲で部屋の天井の蠅も撃ち落とすことができた。弾を込めなくて空気砲でハエを打ち落とせることは、彼が見出した発明だったのかもしれない。空気銃から発射されたリング状の空気の渦は、離れた距離を正確に直進し、小さな虫を空気で十分打ち落とす威力があったのである。

荒瀬にはいつも10匹程の猟犬が飼われていた。そこで生まれた犬の何頭かをもらい、番犬として川立でも飼った。その内の一頭は大きな黒い犬で名前は“ゴール”（犬種名の“ゴールデンセッター”に因んで名付けた）で私より重かった。その背中に私が乗っても少しは歩くことができた。ゴールは喧嘩が得意で、相手を溝の中に落として抑え込んで屈服させていた。塀の下に脱出穴を掘って夜の内に脱出し、相当遠方まで遠征していたようである。そんな日々、「犬が好きか？」と問われると、私はいつも「わしゃ犬を好きじゃないが、犬がわしを好くんじゃ」と答えていた。

犬に関して忘れられない伯父との会話がある。伯父は博識な人であったので、ある時、私がこの目を見たことについて質問してみた。

下川立の旧荒瀬邸の前の山（茶白山）に向かう斜面を国鉄の芸備線（現JR芸備線）が横切っていた。その斜面は場所によって傾斜がいろいろあって、子供にとっては格好の遊び場だった。雪が降ってかなり積もることもあった。早春になって、雪が消えて、芝生に代わっても、私たち子どもは芝生の上で、手製のそりで遊ぶのに夢中だった。ある日、愛犬“チヌ”と一緒に遊んでいた。チヌは私の周りを走り回っていたが、そのうち私の隣にやってきた。そり滑りをしようとする、チヌは私の傍に座った。私が斜面を滑り始めると、チヌも犬座りのまま前足を使って尻滑りを始めた。そして私たちは一緒に滑った。私は、犬が自分の意思で人との遊びに加わったことに驚いた。そのことを伯父に話した。“伯父ちゃん、犬が自分の意思でぼくたちの遊びに加わったと思うが、どう思いますか？”伯父は言った“その通りだ。賢い猟犬はその獲物をハンターが撃ちやすい方向に飛び立たせるからね”。それ以来、こいつは全て分かっているぞと、私は犬をずっと尊敬している。

伯父は川釣りが好きだった。晩年には浅瀬で椅子に座って、ハヤ（オイカワのこの地域の呼び名）釣りを楽しんだ。ある時、川立の円勝寺の裏の深川橋を渡って対岸に釣りに行くために歩いていたが、その途中で伯父の幼馴染の一人である永木のお婆さんに会って話し始めた。その当時、伯父は60歳を過ぎていたが、「わし等の歩んできた道を振り返ると、ほんの一瞬だったのぉ！」としみじみといった。15,6歳だった私はそれに深い感銘を受けた。

6.5.2 従兄の荒瀬敏博は私をまるで弟のように可愛がってくれた。

従兄の敏博は秀俊の次男であるが、父と同じく狩猟と川釣りの趣味を持っていた²¹⁾。彼

はご自慢の高級なバイク、猟銃、そしてカメラ、全てドイツ製のものを持っていた。彼の影響で、私は、ドイツ製のものを持つことがステータス・シンボルだと刷り込まれた。後年、ドイツ人の知人が日本製のカメラを絶賛していたが、私は 56 歳の時ライカ M2 を買った。今ではカメラケースの飾りである。

私が小学校 3 年生の時、風邪を引きやすいので、敏博兄が扁桃腺の除去手術をしてくれた。手術中に意識を失い、片方の扁桃腺を取り除いた後で手術を中止した。意識を回復した後にもう片方も取り除かれ手術は終わった。

ある時は、「武人、今晚釣りに行くから、その前にイナゴを取って来ておけ」と言った。私はたくさんのイナゴを三次の旭橋を渡った寺戸地区の田んぼで捕まえた。大きさ 40-50cm 級のイダ(ウグイの比較的大型の魚の地方名)が尾関山近くの江の川の深みで釣れた。

6.5.3 秀賢・秀治兄弟と私たち

毎年、新年の 1 月 2 日には溝田一家は新年の挨拶に荒瀬家を訪問した。私がほんの小さい子供のころだが、鮮明な 1 つの記憶がある。白衣を着た大きな人が白いタオルにくるんだ赤ちゃんを抱いている。私はそれを見たいと思うが、ひざの高さしかない私の目線から何も見えなかった。それについて後日考えた時、彼は生まれたての赤ちゃんの秀賢(12月28日生まれ)と彼を抱く児玉さんだったことが分かった。これが私の人生最初の記憶である。私は 2 歳と 11 か月であった。

秀賢君と私は三次と川立のあちこちでいつも遊んだ。私たちは特に川遊びに夢中になった(写真 23)。三次では可愛川が江の川に合流する地域の浅くて流れの速いところでハヤ釣りを楽しんだ。そういう朝は、私たちは早起きして、秀賢君が二人の朝食を作った。彼はフライパンでご飯をバター炒めして、生卵を落として混ぜた、焼き飯を作った。それは結構美味しかった。

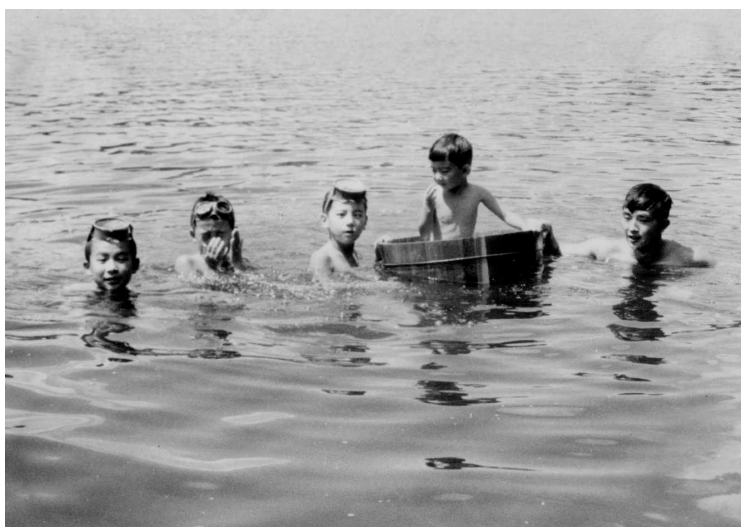


写真 23 1961 年ころの可愛川の川遊び。左端が秀賢、中央が秀治、右端が忠人。この写真は溝田武人が写した。彼は中耳炎のため、あまり川に入れなかった。

秀賢君はよく川立に遊びに来た。夏の間、可愛川上流ではよく赤痢が流行って、深川橋の周りのいつもの場所では泳ぐことが禁止された。そういう時には、私たちはいつも、可愛川に流れ込む小さな支流である長屋川を登って行った。私たちは流れを遡って“清水どんどん”と呼ばれる場所に行った。その名前は岩清水が絶え間なく湧くことに由来している。

私が50歳を少し過ぎたころ、秀賢君から1枚の絵ハガキが送られてきた。彼はその絵をどうしても私に見せたかったと言った。それは西口保画伯の“日本の四季の子供たちの川遊びの風景”という名前の作品だった。その絵には川で遊ぶ子供たちが描かれていて、まるで清水ドンドンの風景と同じであった。

秀賢君は2019年1月11日に札幌の病院で亡くなった。彼の臨終の12時間前、11日の早朝私は夢を見た。秀賢君がベッドから起き上がってこう言った。「ねえ、武ちゃん、会いたいんだけど、会いに行けんのよ。会いに来てくれんかのぉ」、と夢枕に立った。目覚めた時に、今は札幌にいる彼が気になってそんな夢を見たのだと思った。しかし、その日の夕方彼が他界したという知らせが届いた。そういう話は時々聞くが、私もそれを経験したのだ。

私はずいぶん久しぶりに、おそらく10年くらいぶりに秀治君(写真24)に、彼の兄、秀賢君の葬儀の日に会った。私が葬儀場の駐車場にいた時、「溝田さん、溝田さん！」と遠くから誰かが呼ぶ声を聞いた。誰だろう旧友かいなといぶかった。彼の妻淳子さんと“あうちゃん”(秀治君の幼いころの呼び名)がゆっくり私の方に近づいてきた。「あうちゃん、溝田さんじゃないだろう、武ちゃん、だろう」、と言った。秀治君と妻は一緒に笑った。

彼らの父、秀隆(これらの名前と彼らの祖父の名前、秀俊は全く音的にも漢字でも混乱する)は、東京医専でインターンとして研究していた時に、彼の博士論文と共に学術論文を著わしている¹⁴⁾⁻¹⁷⁾。また秀隆は三次ロータリークラブの会長も務めた(1971-1972)。

6.5.4 荒瀬家及び澤家と我が家の交流

ある夏の日、一人の老人が川立の荒瀬家の庭の手入れをしていて休息をとっていた。伯父の娘、澤貴子が彼にこういった。「元治さん、あなたは90歳よね。江戸時代の元治元年に生まれちゃったんじゃないね? ガンジガ〜ンネンじゃけーね」。私は貴子姉のおどけた抑揚をはっきり覚えている。その老人を私は知らなかったが、1954年、私は9歳で小学4年生の夏だった。すぐに調べた記憶がある。元治元年は1864年、明治維新の4年前。それ以来90年が経ち、1944年生まれの私が9歳の時には1954年になっていた。彼は江戸時代の元号の元治を名前にもらっていたのである。私の子供時代はそのような老人がなお生存して働いていたのだった。

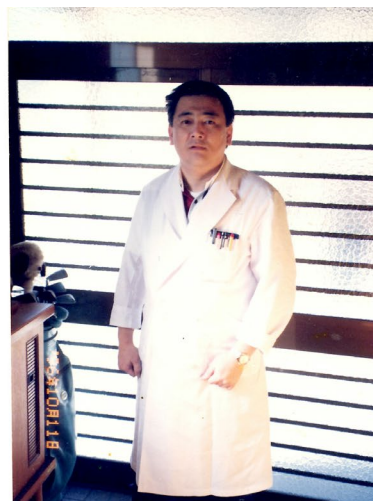


写真 24 荒瀬秀治医師。
昭和 23(1948)年 7 月 10 日 誕生～
平成 31(2018)年 2 月 6 日 70 歳没。

川立の家の8月半ばのお盆の頃は、荒瀬喜代伯母とその子供たち、そして、妹の鈴木文代伯母がともに来て泊り、写真9、11に見られるように祖先を迎えるお盆の法要を行っていた。素晴らしいお供え物が円勝寺の荒瀬家のお墓の周りに捧げられた。私はそのことを誇りに思っていた。

秀俊伯父が亡くなった時は葬儀には参列したが、私は三次高校を卒業して広島市で予備校生として過ごしていた。鷹野橋に近い従姉の貴子姉（結婚して澤貴子：大正13(1924)年11月14日(実は10月14日に誕生)～平成11(1999)年3月24日74歳没)の家から明治橋を渡った萬象園が見える羽衣町のアパートに8月から住んだ。食事、入浴、洗濯などなど、あらゆることで貴子姉のお世話になっていた。7か月の間、私は貴子姉の3人の子供達、裕幸君、洋子さん、玲子さんとも楽しく過ごした。

荒瀬病院の川立の旧邸は1964年の夏に他の人に渡った。私たちの両親は、三次町の尾関山の近くに引っ越した。その場所は、この物語の主題に関係し、戦争中に収容所として使われた愛光保育園からほんの50mのところだった。

7. 秀治君の原稿を編集して

溝田忠人・溝田武人

本文は医師・荒瀬秀治によって、亡くなる(2019年2月6日ご逝去)直前まで書かれた原稿に基づいて編集したものである。彼の兄秀賢君の葬儀の日、2019年1月14日(11日ご逝去)、彼は妻、淳子さんに助けられながら会葬した。休息室で彼は我々に、今、書いているという原稿の説明をしてくれた。三次にこんな話があるのだけど、コブちゃんからいろいろ聞いた話をまとめているのよね。完成は近いのよ、と告げた。我々は、彼の父・秀隆の母方の従弟になる。初めて聞いた内容であるが、重要性は瞬時に理解できたので、必ず完成させるようにと激励した。

しかし、彼はその当時すでに厳しい病状にあり、その病状は悪化しており、話を完成させる時間がないことを自覚していた。彼はそれを幾度も書き直そうと努力していたが、順序通りに保存することさえ難しかった。その原稿は秀治君のパソコンファイル上で50ページ以上になっていた。編集のために、それをコピー／ペーストして、互いにランダムに積み重なり、重複した状態だった。しかし、それを直す秀治君の残された体力はすでに限界であった。子供時代には我々とは兄弟同様に過ごした縁であり、編集して完成させたいという、彼と妻淳子さんの要望を我々は躊躇なく引き受けた。戦時中の三次 POW(戦時収容所)で起こった事件の間、医師として類ない仕事を行った荒瀬秀俊の、この時点での直系親族として、この歴史的事実を記述できるのは彼を持って他には居ない。縁のある我々がその後を引き継ぐのは当然の役目であった。約束を果たせた喜びはひとしおである。最後のLINE交換が補遺1“荒瀬淳子さん並びに秀治君とのLINE交換、彼の最後の10日間”としてこの間の様子が掲載されている。

秀治君の記述には三神國隆氏の三次の戦時収監者に関する著書⁵⁾から引用した記述が多

くあると思われる。そして、また疑いもなく彼が直接看護婦長の児玉さんから聞いた伝聞を含んでいる。それらを互いにはっきり分別することはかなり難しいので、我々自身の判断に従ってそれらを指摘した。

この文の表題は 2.10 の記述からとった。赤十字精神は長く認識されてきた。そして今や国境なき医師団は国際的に認められている。しかし、1944 年当時、日本の国粹主義の厳しかった時代に、“外科医のメスに国境はない”という精神が敵国の収監者、それが戦闘員だろうが非戦闘員だろうが、に実践された。荒瀬秀俊、彼は明治時代の生まれだが、オランダの収監者に、いわば、赤十字と侍（武士道）が結びついた精神を発揮して行動した。

米丸嘉一先生による論文⁴⁾は長くはないが、深い内容に構成されている。編集者の一人の溝田武人は約 60 年前に三次高校で彼の教えを受けた縁を得ている。米丸先生は、ジャーナリスト三神國隆氏がオランダ公文書館から直接得た三次におけるオランダ人収監者に関する原典を三神氏から提供され、文献 4) で引用している。小宮まゆみ氏（POW 研究会）の文献 13) は、戦時収監者として三次で人生の一時期を過ごしたオランダの軍医の子息との奇跡的な出会いを記述している。

他方、秀治君によるこの原稿は荒瀬秀俊医師の孫である立場からの記述である。また、看護婦長の児玉ハズエさんから直接聞いた多くの話が含まれている。

私たち編集者は秀賢、秀治兄弟より少し年上であり、彼らは良く旧川地村（川立と呼んだ）の旧荒瀬邸の溝田宅（現在の地名は三次市下川立町）に遊びに来て、まるで彼らの幼児期及び小学生の日々には本当の兄弟のようであった。我々は可愛川の深川橋の付近の、特に子供にとっては素晴らしい川辺で、魚釣り、魚とり、石投げ、石打ち、水泳、お絵描き、山菜や野の花摘みなどなど、多くの日々を楽しんだ。私たち、溝田家は、もちろん彼らの祖父、秀俊に大変なお世話になった。我々は秀俊の人間的な面を明らかにするために思い出を 6 章に付け加えた。それに加えて秀俊の次男・荒瀬敏博医師の記述による父の思い出の記述²¹⁾も加えた。

編集の過程で、秀治君の未亡人荒瀬淳子さん、そして秀賢君の未亡人の荒瀬妙子さんはこの仕事の過程を通じて、新聞記事、写真など貴重な関連資料の提供などによりずっと支えて下さった。中でも注目すべきは、秀俊が医学生時代にトレーシングペーパーに描いたと思われる 6 枚の人体頭部の解剖図の模写があった。我々は、この模写の原典を見つけるために東京医科大学の図書館にメールで尋ねた。以下のようなご返事をいただいた。

“東京医科大学の中央図書館の戸村由奈と申します。荒瀬秀俊氏によって描かれたこの絵は大学図書館の外部の建物の倉庫に保管されていたものと一致しました。その原典は”ラウベルの人体解剖学教科書（Rauber's Textbook of Anatomy of Men²⁰⁾）“に一致しました。添付した絵は確かに第 9 版（1911 年出版）から描かれています。ここに 6 巻の内の第 3 巻 87 ページから 98 ページの図をお送りします。スケッチの元は第 9 版の出版年からと同定されます。これは難しい探索でしたが、私はこの図書館の他のスタッフ達の支援を得て良い結果を得ることができました。私たちの学生にも、教授を含むスタッフにも興味深いと思いますので、荒瀬秀俊医師についての本が出版されたなら一冊いただけると大変ありが

たいです。ここに、東京医科大学同窓会広島県支部の歴史に載った荒瀬敏博による回想²¹⁾のコピーを同封します。また、荒瀬秀俊氏の写真(写真 13、p.25)を卒業アルバムに見つけましたので、当大学の 100 周年記念出版誌²²⁾と共にお送りします。その中に血判状の荒瀬の署名に対応するページに付箋を付けてあります。”

編集者注 5

血判状とは。以下は文献 22)、p.520 からの引用である。“大正時代の初期、国の指定を受けた医学校の卒業生は無試験で医師の開業資格を得ることができたが、開学当初の日本医学専門学校はこの指定を受けていなかった。そして設立後 2 年を経過しても未指定のままだったため、このことに不満を抱いた第 3 学年 111 名は経営者の辞職と、指定を受けられるようにするための財団設立を求めて決議を行い、血署連判状を作製した。その後ほとんどの在校生が連判状に署名し、やがて 4 5 0 名の総退学につながっていった。”

荒瀬秀俊は日本医学専門学校の医学生であった。この事件は荒瀬家の中で知られてはいなかったが、皆に明らかではなかった。このことは、引用文献 21)で息子荒瀬敏博によっても述べられている。

東京医大図書館の野坂恵美子さんもまた、荒瀬秀俊によるスケッチに関するラウベルの人体解剖学教科書の原画を見出した時の偶然の出会いと彼女の驚きについて私たちに伝えて下さった。

“今回は溝田教授が、私たちにこの核心を探求するための機会を与えて下さったことに感謝します。私たちは、幸運にもまた解剖学の教授である図書館長とこの問題について議論しました。そうして、解剖学の教授陣もまた私たちが原図を探すのを助けて下さいました。

私は、たまたま 1 つの絵を発見し、それはよく似ていましたが絵が逆向きでした。こうして、原図の引用は Gray ではなくて Rauber かもしれないと思うようになりました。その後、戸村さんがさらに完全な探索をして 1911 年出版の版を見つけました。ラウベルの教科書も、その図は版によって互いに異なっています。私たちが保有している書庫に 1911 年のその教科書の版を持っていたのを幸運にも見つけたので、戸村さんと私は共に世田谷の図書館に行き原図を見つけるべく書庫を探しました。荒瀬先生がスケッチされた図と同じ図を見つけた時、私たちはホントに飛び上がって喜びました。彼が 100 年前に学んだ、正にその本を私たちは開いたかのようです。私たちはこの経験を与えて下さったことに感謝します。编者コメント：飛び上がって喜ばれた瞬間は科学的な発見の瞬間の鳥肌モノとまったく同等だと感じます。この感動をなんらかの報告書にまとめて下さることをお願い致します。

私は荒瀬先生というお名前にたびたび出会っていました。私は同一のお名前の広島からの幾人かの先生がいらっしゃることを記憶していました。知ってはいましたが、その方々のご関係は知りませんでした。ある日、ある卒業生の息子さんが、この方もまた私たちの大学の卒業生ですが、お父様の遺品を大学に寄贈されました。寄贈された多くの書籍の中に、偶然“東京医科大学同窓会広島支部の歴史“を見つけました、そして、そのリーフレットに導かれるように開き、荒瀬敏博のお名前を見つけました。もっと驚いたのは、そのタイトルが”

親父、秀俊の思い出”だったことです。こうして、出会った多くの偶然が、私たちを故荒瀬秀俊先生に導いたのです。2016年に私たちの大学は100周年を祝った直後に、この大学の創立期の卒業者の一人と出会えたことに感謝いたします。“

引用文献20)の“Raubers Textbook of Anatomy of Men”の出版社 Georg Thiemeはその教科書から図を採録することを快諾して下さった。人体頭部の解剖図のスケッチとそのラウベルの教科書の原図は補遺6に掲載した。6.1 “親父、秀俊の思い出”は文献21)から転載した。その中の、解剖学の講義の時使用された図譜、とはこのスケッチのことであろう。また幾度も本文中に現れるように、伯父は自分のメスを自分で作っていた。そのメスと関係する手術道具は、手塚治虫記念館で行われた第7回ブラック・ジャック企画展(1996年1月1日~4月30日)に展示された。これらの道具は荒瀬秀賢医師の友人である永井明医師との関係で貸し出された。

もしそれが可能でご理解いただけるなら、秀俊による模写とそのラウベルの教科書の原図、彼が作ったメス等を東京医科大学などのしかるべき所に展示して下さることを、親族は望んでおり、そうなれば大変名誉なことである。

秀治君は最後に、もしこの事件が、このような良い結果に終わらなかったならば、東京裁判に当然付託され、未来の世代に残念な結果を伝えなければならない事態になっていたかも知れない、と言っている。この意味で、荒瀬秀俊医師と、その協力者によって支えられた判断と行動は、後世に残すべきであり、長く伝えられるべきであると私たちは思う。

8 謝辞

この文を編集するために、我々は多くの方々の支援を受けた。米丸嘉一先生は原稿を丁寧に読んでいただき副題への有用な助言を頂いた。タンゲナ・鈴木・由香里(日蘭イ対話の会代表)さんと小宮まゆみ(POW研究会会員、前高校教諭)さんは初期段階の不完全な原稿を読んで下さり、丁寧な助言を下さり、英訳し、出版するようにと激励を頂いた。小宮まゆみさんからは、三次の出来事を含む日本に多く存在したPOWの例に関するご高著19)を御献本頂いた。彼女はまた、米丸嘉一先生に案内されて行った、故荒瀬慶子(秀治の母)、故荒瀬秀賢へのインタビューにおいて撮られた写真を提供して下さいました。なお、現在の日本のPOW研究会は内海愛子/笹本妙子共同代表の元で国際的な活動を展開しておられる。

三神國隆さんは参考図書5)に関連して、原稿を読んで有用な助言を下された。中でも、(1)オランダ人44名は、非戦闘員であるので、捕虜とは言わないということ、(2)オブ・テン・ノールが拿捕された日付、1942年2月26日に関すること、そして、(3)オランダ人看護婦の患者ブラウアー婦人を移送するために使われたのは布団を敷いた“人を運ぶリヤカー”であったという点である。秀治は担架であると記述していた。三次市立図書館長の有光七瀬さんと君田図書館の鹿島寿子さんは引用文献2)およびその他の有用な文献番号18),19)などを送って下さった。東京医科大学図書館の野坂美恵子さん、戸村由奈さん、工藤綾さんは古い文献、ラウベルの人体解剖学教科書、を書庫から、また荒瀬敏博によって書かれた

“親父、荒瀬秀俊の思い出”を見つけて下さった。Ms. Barbara Elias はラウベルの教科書の図の転載、印刷をご許可下さった。秀治の従弟である澤 裕幸医師、能美洋子さん、坂根玲子さんの兄妹からは編集者と議論し多くの支援を頂いた。特に坂根玲子さんは最終校正に多大の実力を発揮されて協力して下さいました。

故・秀治の未亡人荒瀬淳子さんはこの仕事を我々に依頼し、完成させるべく原稿を繰り返して読んで下さった。秀賢の未亡人荒瀬妙子さんは多くの写真とコメントを提供し(補遺5)、最終校正への協力を含めてずっと我々を支えて励まして下さった。

この和文原稿のオリジナルは、三次地区医師会報“巴杏”に3回にわたって掲載^{24),25),26)}された。“巴杏”へ掲載の労を取られた三次医師会鳴門謙嗣会長および編集委員の先生方に感謝致します。この過程でとりわけ編集委員会事務局の星田昌紀課長からは種々のご助言と校正を頂いた。連載の期間を通して建設的なご支援をいただいたことに深く感謝します。これに若干の加筆をしたのが本文である。また、本文の校正の最終段階で、文献28),29)をご送付下さった。28)は谷岡只雄先生の貴重な交友記録として補遺8に紹介させて頂いている。

三次市教育委員会の立畑春夫氏は文献27)をご送付下さった。そして荒瀬元安が咸宜園に入門した時の入門簿に記述してある出身地の記述“藝州三治郡川立村”は備州“三次郡下川立村”であったと、氏は指摘されている。この点は現在謎である。なお立畑氏は三次市上志和池町に在住で、ここは旧荒瀬邸を眺めることができる地域であり、編集者達との共通の知己もいる縁である。氏は文献4)に[資料紹介]として“官営渡船の造り替え”という、下志和池町の渡し船の改修に関して古文書から報告をされている。古文書は地元の山田家にあったもので、山田家は英子や武人の同級生の郷里でもある。

編集者注6

雑誌名“巴杏”の由来は、星田課長から説明を受けた。巴は文字通り、3河川(西城川、馬洗川、可愛川)が巴をなして流れ込む三次の象徴であり、中心に巴橋もある。司馬遼太郎の、“街道をゆく”、21の芸備の道、には少なくとも3か所、この土地に流れ込む川が巴をなしている、と記述されている。杏は中国の故事にある名医の別称である。中国の故事とは、廬山の仙人董奉は人を治療しても礼金を取らず、治った者に記念として杏の木を植えさせたところ、数年にして杏の林が出来たという、を指している。

英文原稿の校正は元山口県立大学教授 Marilyn Higgins と山口大学名誉教授 Michael Higgins によって行われた。彼らはこの原稿の内容に興味を持ち、依頼した英文の修正を超える有用なアドバイスを下さった。このご厚意に深く感謝する。なお、英文にしたのちにもいくつかの貴重な資料が新しく見つかったため、和文の方は加筆・校正が進み、必ずしも対訳の形にならなかった部分が多いことを付け加えておく。

2020年10月

溝田忠人(昭和16(1941)年7月15日生まれ)

山口大学名誉教授、理学博士

溝田武人(昭和19(1944)年2月8日生まれ。)

福岡工業大学名誉教授、工学博士

引用文献

1. 溝田武人、荒瀬病院旧邸代主に関するある伝聞について、巴杏、三次地区医師会報、No.164、pp.21-26、2018.10
2. げいびグラフ、巻頭人物風土記、荒瀬秀俊、(株)菁文社、第44号、昭和61(1986)年7月5日。
3. 支局ノート、戦争の不条理伝える抑留所<三次>、中国新聞北部版 p.27、平成12(2000)年9月8日。
4. 米丸嘉一、戦時中の三次捕虜収容所について-オランダ国立公文書館文書から-：三次地方史、三次地方史研究会発行、第54号、2000.9.20
5. 三神國隆、海軍病院はなぜ沈められたか-第二氷川丸の航跡-、光人社、ISBN4-7698-2443-2 c0195、2005.1.15
6. 「つらかった収容所の生活」オランダ人元捕虜32年ぶり三次訪れる、中国新聞、昭和53(1978)年1月29日
7. 朝刊コラム、ほのぼの欄、国境越えた良心のメス、中国新聞1990.2.2、p.26
8. もうひとつのヒロシマ99、再建への鼓動26、被爆者に乾パン配る、中国新聞、昭和59(1984)年10月8日
9. 小宮まゆみ、三次の民間人抑留所をめぐるヤン・クーフェルデンさんとの交流、POW研究会、Dialog JI、2018.01.18
10. 平和を考える、三次英米人抑留所の貴重な写真、欧米流の交流の礎に、朝日新聞広島版、平成21(2009)年10月7日
11. 20世紀スポット、①9三次の抑留所・捕虜収容所、戦時下に園舎が変ぼう、国境を越えて交流芽生える、中国新聞、平成12(2000)年8月23日。
12. 贅澤な“海の病院”、皮肉や自国の捕虜を満載輸送、抑留下の和蘭病院船、朝日新聞、昭和17(1942)年4月2日。
13. 三次捕虜収容所スケッチ、オランダ人の鉛筆画、市にコピーを寄贈、中国新聞、平成29(2017)年6月1日。
14. 荒瀬秀隆、春山広臣：乳腺結核2例、日本臨牀結核、Vol.10、No.10、pp.546～548、1951-10。
15. 春山広臣、荒瀬 秀隆：腎盂輸尿管畸形に依る外科的疾患について、臨床外科、Vol.7、No.13、pp.773-774、1952-12。
16. 荒瀬秀隆：発癌母地の立場から見た肺の慢性非特異性炎症病巣における気管支粘膜上皮系の変化に就いて、日本外科学会雑誌、Vol.58、No.9、pp.1406-1423、1957-12。
17. 荒瀬秀隆：発癌母地の立場から見た肺の慢性非特異性炎症病巣における気管支粘膜上皮系の変化に就いて、東京医科大学、医学博士、学位授与年月日：1957-07-26。
18. 米丸嘉一：戦時中の三次捕虜収容所-オランダ国立公文書館文書から-、げいびグラ

- フ、ふるさと歴史物語、第 85 号、平成 12(2000)年 11 月 10 日。
19. 小宮まゆみ：敵国人抑留-戦時下の外国民間人-、吉川弘文館（歴史文化ライブラリ-267）、2009.2
 20. A. Rauber, et al., Lehrbuch der Anatomie des Menschen ; Abteilung 3: Muskeln, Gefasse. pp.87-98、Neunte Yermehrte und Verbesserte Auflage. Georg Thieme, Leipzig, 1911.
（日本語訳：A.ラウベルら著：人体の解剖学教科書 部門 3：筋肉、血管、pp.87-98、第 9 版は増加版と改良版を含む。ゲオルク・ティーム社, Leipzig, 1911.）
 21. 荒瀬敏博：親父、秀俊の思い出、東京医科大学同窓会 広島県支部の歩み、pp.131-134、平成元(1989)年。
 22. 東京医科大学百年史 1916-2016、東京医科大学創立 100 周年記念事業記念誌委員会、平成 30(2018)年。
 23. 朝日新聞夕刊、オランダ人抑留刻んだスケッチ、広島・三次 遺族、図書館に 10 枚 寄贈、平成 29(2017)年 6 月 24 日。
 24. 荒瀬秀治著、溝田忠人・溝田武人編集、“外科医のメスに国境はない～荒瀬秀俊伝～” 三次地区医師会報“巴杏”、No.166、pp.18-25、令和元（2019）年 6 月。
 25. 荒瀬秀治著、溝田忠人・溝田武人編集、“外科医のメスに国境はない その 2、～荒瀬秀俊伝～”、三次地区医師会報“巴杏”、No.167、pp.31-42 および裏表紙裏頁、令和元（2019）年 11 月。
 26. 荒瀬秀治著、溝田忠人・溝田武人編集、“外科医のメスに国境はない その 3、～荒瀬秀俊伝～”、三次地区医師会報“巴杏”、No.168、pp.31-45、令和 2（2020）年 3 月。
 27. 三次郡下川立村、国郡誌御用二附き下調書出帖、三次市教育委員会資料、文政二卯（1819）年。
 28. 谷岡只雄、“随筆/ずいひつ”、双三地区医師会会報、“巴杏”、第 2 号、pp.1-2、昭和 49(1974)年 2 月 1 日。
 29. 会員紹介、“荒瀬敏博先生”、双三地区医師会会報、“巴杏”、第 17 号、p.5、昭和 52(1977)年 11 月 30 日。
 30. 荒瀬秀賢、ブロックだより、荒瀬病院 200 年のあゆみ、巴杏、第 58 号、pp.22-24、昭和 63(1988)年 12 月。
 31. カーブ 50 年 われらカーブ人 28 三次の赤ヘル先生、病院ニュースに熱愛コラム、「鯉の病」県北一、2020.3.26(1999 年中国新聞朝刊採録記事)、中国新聞セレクト。
 32. 荒瀬秀賢、鯉心、巴杏、No.157、pp.44-46、平成 29(2017)年 3 月。
 33. 荒瀬秀賢、随筆、カーブ優勝おめでとう、巴杏、No.157、pp.47-50、平成 29(2017)年 3 月。
 34. 荒瀬秀賢、鯉心、巴杏、No.161、pp.20-22、平成 29(2017)年 10 月。

35. 荒瀬秀賢、鯉心、巴杏、No.162、pp.31-33、平成30(2018)年2月。
36. 荒瀬秀賢、鯉心、巴杏、No.163、pp.26-28、平成30(2018)年7月。
37. 荒瀬秀賢、鯉心、巴杏、No.164、pp.27-29、平成30(2018)年10月。
38. 荒瀬秀賢、写真、巴杏、No.164、裏表紙裏、平成 30(2018)年 10 月。
39. 細川延夫/宇田賢吉、「国鉄時代」C62「瀬戸の浜辺から 呉線その良き時代」、pp.3~13、ネコ・パブリッシング、2010.

補遺 1 著者秀治および彼の妻淳子と溝田兄弟との亡くなる前 10 日間の LINE

荒瀬秀治医師は、この記述を残して 2019 年 2 月 6 日に、兄秀賢医師を追うように他界した。彼が残し、完成できなかった“荒瀬秀俊・伝”の大きさは私たちの想像を超える。最後の数日を淳子夫人の助けを受けながら、文字通り必死に我々の質問に答えようとしてくれた。このことは、以下のラインの往復、秀治君（淳子さん）と武人らとのやり取りの中に、はっきりと示されている。彼の残された 10 日間に沿ってほぼ全文を掲げた。

2019.1.26(土曜日)

溝田武人(以下溝田)：妙子さんから淳子さんの電話番号を聞きました。これから“ライン”で連絡がとれます。

荒瀬淳子(以下荒瀬)：こんにちは。ありがとうございます。今日は、朝から訳のわからないことばかり言っていて、寝るのが怖いようで、ずっとしゃべりっぱなしです(☹️🌀)

溝田：そうですか。どうしたらいいのですかね。心配ですが、もし完成途中の文書が気になるのであれば、忠ちゃんと武ちゃんが完成させるから安心して、と尝试てみて下さい。

溝田：秀治君が電話で話せるようになったらまた話しましょう。

荒瀬：『いいねえ～それすごくいい考え、ぜひお願いしたい!!』だそうです。時々ピントがあうので、まだ大丈夫なのでは、と期待してしまいます。先生からは、あと数日だと言われてます。

溝田：“巴杏”に載せて貰うからねと言ってみて。

荒瀬：『うれしい!!じゃあ、送れるようにしなくちゃなあ。ありがとうございますって言ってますとラインに書いて』だそうです。

荒瀬：ありがとうございます。彼の兄が亡くなってから、がんばる意欲がなくなってしまっていたので、彼を勇気づけられてうれしいです。

溝田：大坂ナオミが全豪取ってランキング 1 位なったよ、アウチャン（アウチャンは秀治君の幼少期の呼び名）。

2019.1.27(日曜日)

溝田：おはようございます。秀治君がこれまで書いたことはパソコンに入っていればそのままいいのです。体裁を整えたりすることはこっちがやりますから心配しないで下さい。とにかくまだ書いてなくて記憶にあることがあれば、口述で良いから携帯電話の録音で残すか、淳子さんに伝えて、私に伝えてくれるのが負担は少ないかも知れません。

荒瀬：おはようございます。いろいろとご心配おかけしています。夕べはトイレに行きたがって、2回歩いて行きました。テニスの試合も見て、大喜びして、『明日はパソコン持って来て、準備しようかなあ』と前向きになっていました。どの程度仕上がっているのか、まったくわかりませんが、送らせていただきます。いろいろとご心配いただき、ありがとうございます。よろしくお願いします。

溝田：嬉しい返事です。そうです。とにかく出来ている分だけでも送って下さい。それに、忠兄の記憶を交えれば完成するはずです。まだ秀治君が文章にしていない部分を重点的に書くか、淳子さんに話して下さい。淳子さんがこのラインにでも書くか、電話でも良いから私に伝えてもらえば、文章化するとか体裁を整えたりすることはこちらでやります。

荒瀬：ありがとうございます。今、ベッドの上でパソコンを開きました。『とりあえず、武ちゃんにメールしなくちゃ』と、頑張っています。

溝田：そりゃいい！待っています。

溝田：松山もスコアを伸ばして14アンダーまで行っています。スママセン、ビデオで見ている興奮してしまいました。今日の結果はもう確定しているはずですよ。

溝田：以下は忠兄からのメールです。

元気が出たようでなにより。秀俊伯父の言葉で、強く印象に残っているのは、「医者とは病気の半分しか治せない。後の半分は、患者の力で治るのだ」。秀治君も聞いているかも。でも、患者として味わうと、医者としての君は半分と半分、両方だから、全快間違いないんだよ。まあ、落語の落ちみたいだが、そう思って、免疫力、を全開にしよう!!

荒瀬：ありがとうございます。涙しながら読み聞かせました。感謝です。頑張ろうねと約束しました。よろしくお伝えください。ありがとうございました。

溝田：文章確かに拝受しました。忠兄にも送りました。ここまで良く頑張りましたね。完読してまたメールします。

溝田：完読させていただきましたよ。良く書かれていますね。是非読み物にまとめて、巴杏に何回かに分けて載せて貰うのがよさそうです。それには、重複箇所を省くこと、中国新聞記事からの引用を明確にすること、コブちゃんの話の部分が判るようにすること、などに留意して、全体のストーリー性を整えて読みやすくする必要があります。患者さんから頂いた中国新聞の切り抜き記事は手元にあるのかな？あれば、私に送れますか。

溝田：これらの作業は私がやらないといけないでしょうね。やりますよ。

荒瀬：お世話になります。今、余計な文書を省いていました。けれど、なかなか進まず本人には言いませんが、おまかせした方が良くと思います。資料など手元にあるものを送らせていただいてもよろしいでしょうか。

溝田：忠兄は1月29日と2月12日に白内障の手術を受けるので、文書を読むのが大変な様子ですが、半分読んだそうです。そして、新聞記事の引用とコブちゃんの発言部分を分けて記述することが必要と書いて来ました。

溝田：そうして下さい。本人が疲れてはいけませんからね。

荒瀬：なるべく早く探して送らせていただきます。

溝田：伯父、秀隆、敏博兄等が並んだ食卓風景は良く理解出来ます。私も、お味噌汁の中味をご飯の上に乗っけて食べようとしたら、なにやら怒られて、鈴木のお母さんが取り繕ってくれたことを思い出しました。

荒瀬：本人、大笑いしています『武ちゃん、笑わせすぎです!!』と書いて、だそうです(笑)。

溝田：真面目な顔してこんな話(一部カット)が飛び交うのだから小学生の私は戸惑うよね。また、ある冬の夜、川立の塀の門(図2の西門)をドンドン叩く人がいて、千代子母が、どちらさんですかと、訝しげに聞くと、ワシヤあ川地の狸じゃ、と敏博兄の声が聞こえて来てホッとしたこともあったよ。あくる朝から狩猟をするために夜の内に川立に来たのです。

荒瀬：『おもしろ過ぎる、俺の知らない話、まだまだ聞かせてもらいたいなあ』ほんと、いろいろな話があったんですね(笑)

2019.1.28(月曜日)

溝田：秀治君が観察した秀俊伯父と真逆の話だけど、私は良く敏博兄にくっついて雪山に雉撃ちに行っていました。ある時、ブッシュから2羽の雉が飛び出したのです。慌てた敏兄は1羽に狙いを定めて引き金を引いたのですが、その瞬間敏兄は雪路に足を滑らせて転んで、見事に獲物を外してしまいました。慌ててもう1羽に 向かって発射しました。でもこれも当たらず2羽の雉は飛び去って行きました。この時敏兄は興奮気味に言いました。今は、足が滑らんかったら2羽とも獲っていたんでよ、のお、とのたまわれました。私は黙って頷きましたが、実はウサギ獲りのことわざ(二兎を追う者、一兎をも得ず)を思い出して、笑いを必死でこらえていたのです。敏博兄スママセン。

2019.1.29(火曜日)

溝田：ネットに載っている三次のオランダ人抑留者の記事をファックスでも送ります。しかし秀治君がコブちゃんから聞いた手術の英断の話は貴重です。

溝田：武人です。秀治君、調子はどうですか。今編集作業を進めています。段落に分けて、章、節、項の標題を付けて読むと本当に面白い臨場感のある読み物になりつつあるよ。“巴杏”もいいけど、中国新聞の連載記事でも十分になるように思います。まず“巴杏”に出してもらってからが、安心ですね。ただし、今こちらに送ってくれている資料からの記述がどの程度オリジナルか?を明確にすることが大事なので、待っています。ここはここから記述

した、ここは児玉さんから聞いたこと、というようにね。この資料を参考にしたということをはっきり書くことが、むしろ記述の信頼性を高めるのです。と元気な時の秀治君に話して下さい。

荒瀬：淳子です。ファックス、メールありがとうございました。三次図書館に寄贈された絵は、見に行きました。昨日も今日も眠ってばかりで『武ちゃんからメールがきているよ』と言っても『あつ、メール返さなくちゃ』と言って眠ってしまいました。資料も、どこにあるのやら。みよし地方史の米丸嘉一著、三次捕虜収容所について、という記事（文献 4）は出てきたのですが、この文書を書く時、いつも単行本（注：文献 5）の（こと）を見ていたような気がするんですが、新聞なのですかね？次に目を覚ました時、しっかり聞いてみます。

溝田：メールはファックスと同じものです。米丸嘉一氏は私の高校一年の時の先生です。秀治君の文章の中で、ここは引用だな、と言う所は大体分かります。米丸嘉一先生の三次地方史も送って下さいませんか。

荒瀬：了解しました。

溝田：患者さんから頂いた中国新聞の切り抜き記事はないかな？

荒瀬：それが、まったく記憶がなくなっているようなんです。なんのこと？と本人☹️👂。

溝田：それは君田診療所で勤務しはじめて 10 年位経った頃だという記述があるよね。

荒瀬：文書を私も読んでみました。あの患者さんがだれなのか、どんな記事だったのか、まったくわかりません。情けないことに。

溝田：また調子が良いときに、思い出せるように、働きだして 10 年位した時、患者さんの老婦人がお祖父ちゃんのことを誇りに思ってくれて、渡された新聞記事だよ、と話してみても。

荒瀬：わかりました。すみません。

溝田：三次地方史、54 号、米丸嘉一先生のところをファクスで送れませんか？

2019.1.30(水曜日)

溝田：以下は、白内障の手術を片方だけ終えて感激している忠兄とのやり取りです。

武人：それは良かった。退院はいつ？三次地方史に米丸嘉一先生がオランダ人抑留者の経緯を 5 ページ書いている。秀治文書の位置付けがハッキリしてきた。e-mail にまず転送する。

忠人：文章読みました。良く分かりました。児玉婦長の口述でしか得られない、手術のプロセスは貴重だね。米丸報告に、2 度の処置があったことが書かれているしね。慶子が恵子になっているけど。秀俊伯父の死亡年も昭和 38 年になっている。伯父とコブちゃんの写真も載せたいね。

2019.2.2(土曜日)

溝田：その後如何ですか？こちらは忠兄の白内障の手術が片方だけですが手術が旨くいっ

たので頑張ってくれています。オランダ人のスケッチを入手している小宮まゆみさんのグループと連絡が取れたりしています。そんな中で、英子姉が貴重な記憶を話してくれました。本人が小学校の1年生の時、荒瀬の食堂兼居間の障子を開けたら3、4人の大男の外国人が秀俊伯父と話していたのです。ビックリして、おお泣きしたら一人の人がキリンの縫いぐるみをくれてなだめてくれたそうです。川立には、しばらくその縫いぐるみがありました。オランダ人は1945年9月初旬までしか三次にいなかったし、我々は1945年3月末から川立に住んでいますから、この記憶は僅か5ヶ月の隙間期間でしか実現しなかったのです。しかも、戦局は敗戦間際という厳しい時で、白昼堂々と敵国人が何人も尋ねてきて歓談していた、と言う事実は驚くべきことです。是非載せたい事実ですね。

溝田武人：注：米丸嘉一先生の“三次地方史”には8月15日の終戦後、荒瀬で伯父が開いたお別れ会、という記述がある。9月12日には福塩線経由で一行は三次を離れている。英子さんが荒瀬の食堂で出くわしてキリンの縫いぐるみを貰ったのは、9月2日か9日の日曜日（病院が休みで、川地小学校1年生の英子さんが荒瀬に行けたとして）だったのでしょう。

荒瀬：こんばんは。忠人さんの手術無事に済んだとのこと。よかったです。英子お姉さまのお話、もう少し早く聞けていたら秀治さんも驚いていたことでしょう。すごい話ですよ。昨日から、まったくわからない様子。うなずきはしますが、目が合わなくなっていました。どこか痛いのでしょうかね、大きな声で騒いでいるか、寝ているか・・・という状態です。何もかもお任せしてすみません。ありがとうございました。

2019.2.3(日曜日)

溝田：秀治君に意識が通じたら、忠ちゃん、武ちゃんが頑張って、よい読みものに仕上げているからね、と伝えて下さい。英子姉の話しや、忠ちゃんの話しや武ちゃんの話も入れて彩るからね。コブちゃんへの敬意も十分に感じられて読みやすいものになるはず、と伝えて下さい。

荒瀬：ありがとうございます。必ず伝えます。

2019.2.4(月曜日)

溝田：秀治君のこと、心配しています。淳子さんは原稿を読んでおられたら以下のことは理解されると思います。

オランダ人の看護婦さんを手術する下りの記述ですが、秀俊伯父の前に来た医師二人は何もしないで立ち去った。日本軍関係者の“捕虜ですけえ”という言葉は伯父の耳には入らなかった、と前半では記述されています。しかし後半では、手術するにあたり祖父に小声で語った日本軍高官の一人であろうか、祖父が激怒した内容を見れば、とあって正反対なので

す。秀治君の意識が戻って聴けるなら、確認してみてください。祖父には、捕虜ですから適当にやって下さい、と言う日本軍高官の言葉があつて激怒したのか、祖父の耳には伝わらなくて激怒もなかったのか？ 記述からすると激怒はなかったと思いたいけどね。まあ激怒しても手術を行ったでも構わないのですがね。

荒瀬：ご心配おかけしています。状況はかわらず、誰が話しかけても、反応せず、水分をとることも難しくなっていました。耳元で、皆さんからのメールを読み聞かせるのですが、反応はありません。義兄や義母に呼ばれているのでしょうかねえ。まだやり残していることがたくさんあるのに。

溝田：そうですね、まあ聞こえているのですが反応は難しいのでしょうか。どうか苦しまないで欲しいですね。淳子さんも立派に務めていらっしゃいますね。

荒瀬：見守ることしかできませんが。

溝田：その優しさが秀治君には伝わっているのですよ。それこそ彼には今一番欲しいことです。

2019.2.6(水曜日)

溝田：11:22 秀治君の訃報を今聴きました。慎んでお悔やみ申し上げます。この上は忠兄と秀治文書の完成に向けてがんばります。完成後、ご仏前に供えさせて下さい。

荒瀬：12:21 ありがとうございます。たいへんお世話になりました。本人に代わってお礼申し上げます。

溝田：秀治君も淳子さんに優しく見守られて逝くことが出来て、幸せだったと思います。まことに御苦勞様でした。秀治文書を楽しみに待っていて下さい。

荒瀬：ありがとうございます。二人で楽しみにしています。

2019.2.7(木曜日)

溝田：以下のようなレタックスを斎場にお送りしました。装丁は貧しいけど我々の弔意をご理解下さい。

荒瀬秀治君のご逝去を悼み、惜しみながらお悔やみを申し上げます。秀治君が闘病中に頑張って残して呉れた文書は必ず我々が世の中に出します。先の大戦の終戦間際に三次収容所で瀕死の病だったオランダ人に対して手術を行った祖父・荒瀬秀俊院長、児玉ハズエ看護婦長から聴いて残したこの文書は三次の宝物になることでしょう。待っていて下さい。合掌。 溝田忠人、溝田武人、佐藤英子。

荒瀬：ありがとうございます。秀治さんも喜びます。

2019.2.11(月曜日)

溝田：無事に秀治君の見送りは済まされましたか？ 寒い日、そうでもない日、が交互にや

ってきて、疲れた体には何かと負荷がかかると思います。秀治文書は我々兄弟で推敲しています。巴杏に載せて貰うことになっています。秀治君の写真、秀俊さん、児玉さんの写真、君田診療所、あるいは仕事中の秀治君の写真などあれば用意しておいて下さい。秀俊伯父、児玉さんの写真は妙子さんに私から聞いてみても良いです。

溝田：今、荒瀬妙子さんと話しました。児玉さんや、秀俊さんの写真は探して私に送ってくれることになりました。秀治君の写真をお願いいたします。この原稿の閉め切りは 5 月連休明けの頃なので、ゆっくりでいいですよ。

荒瀬：21:56 こんばんは。たいへんお世話になっております。なんとか無事に葬儀を済ませることができました。弔電をいただいていたのに、お礼が遅くなりました。申し訳ありません。葬儀の時に紹介させていただきました。本人の望んでいたように小さな葬儀で、集骨は澤家のみなさんに手伝っていただきました。写真の件、承知しました。さがしておきます。お忙しい中、申し訳ありません。よろしく申し上げます。

補遺 2 手塚プロから荒瀬病院へ返還された秀俊作の医療用メス

以下の3枚の**補遺 2 写真 a, b, c**は荒瀬秀俊医師によって作られた医療用メスと、鉗子類である。これらは長い期間荒瀬秀俊によって使われ、これまで保管されてきた。1996年4月30日から宝塚市の手塚治虫記念館で開催されたブラック・ジャック展で展示された。それらが展示された経緯は、秀賢によって伝えられている。彼は東京医大で広島県三原市出身の作家永井 明さんとはクラスメートだった。永井さんはアニメーション版のブラック・ジャックの総合編集者でもあった。彼はこれらの特異な医療器具をその展示会に借り受けることを秀賢に頼んだ。展示会の後、これらの道具は20年間手塚プロダクションによって保管されていた。秀賢の没後、妻の妙子さんがそのことを思い出して、関係者に接触して無事荒瀬家に戻ってきたのである。秀俊の作ったいくつかのメスには握り手に“ARASE”又は“MADE BY ARASE”の刻印がある。これらの道具の形は、例えば、刃の大きさや握り手と刃の角度などに関して、それぞれの手術の目的、執刀部位に合わせて作られている。

坂根玲子さんが、巴杏 166号~167号^{24)~26)}を読んで、思い出話をしてくれた。「祖父が中学の時描いたという梅の絵は、とても中学生とは思えないほど上手でした。

巴杏 167号²⁵⁾には三次市長も特別寄稿しておられるので、学术论文のみならず、秀治文書は読んで下さったでしょうか。きっと三次の宝物と思って下さるはずですよ。

補足を読んで驚きました。祖父のメスや鉗子、小さい時、見たことはあったのかもしれないけれど、記憶にはありません。しかも、これが手塚治虫記念館で展示されていたとはね。NHKの当時の人気番組、『私の秘密：司会高橋圭三アナ』に、“メスを創るドクター”として祖父が出るはずだったと母から聞いていた記憶と繋がりました。祖父が倒れたから実現しなかったそうです。祖父の頬擦りとニンニクの香りも久しぶりに思い出しました。テレビ出演の話は武ちゃん知らなかったのですね。



補遺 2 写真 a 20年後に返却され、故荒瀬秀賢の机の上に置かれた祖父秀俊作の、メスと鉗子類。



補遺2 写真b 秀俊によって作られたメス(1)



補遺2 写真c 秀俊によって作られたメス(2)

補遺 3 収監者の一人、ヘリット・ファン・クーフェルデン大佐の描いた三次戦時収容所のスケッチ 23)

小宮まゆみさんは文献 9)で記述されているように“第二次世界大戦中に日本で収監されたオランダの非戦闘員捕虜”と題する研究発表を2016年アムステルダムでの NIOD (オランダ戦争資料研究所、アムステルダム) で開かれたシンポジウムで行った。発表の場には、三次の収監者であったヘリット・ファン・クーフェルデン氏 (p.61、補遺 4 表 [名簿 2]の No.25) の息子さんが来ておられた。後に彼女はそのヤン・ファン・クーフェルデン氏から、彼の父が三次収容所に収監中に描いた何枚かのスケッチ画を受け取った。その原画は現在 NIOD に収蔵されている。息子のヤン・ファン・クーフェルデン氏は1938年生まれで両親とインドネシアのスマトラのオランダの植民地に当時住んでいた。彼の父は別れてから三次収容所に収監されていたので彼らが再会するまでに4年間を要し、その後オランダに帰国した。ヘリット・ファン・クーフェルデン氏は1979年、74歳で没し、三次収容所で描いた多くのスケッチ画とオプ・テン・ノール号の絵を残した 9),13)。この絵のコピーは、現在三次図書館で保管されている。



補遺 3 図 a 三次収容所の内部の様子 (1)

myoshi, 1944

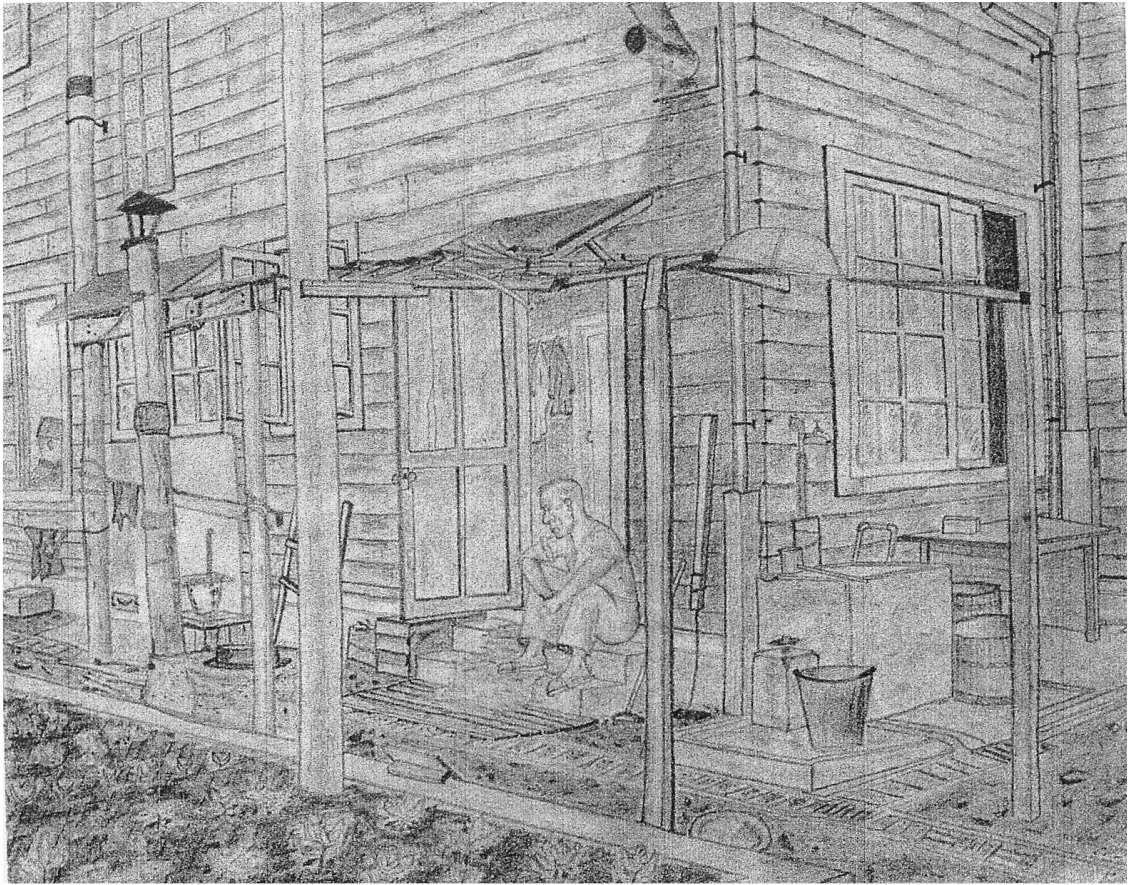


補遺3 図b 三次収容所の内部の様子(2)

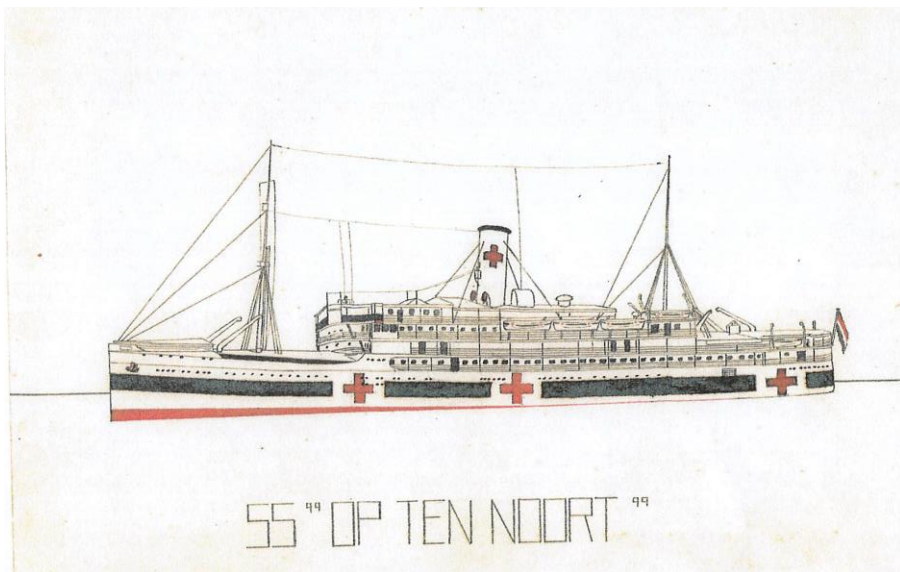
myoshi, Oct 1944



補遺3 図c 三次収容所の集会室



補遺3 図d 母国への帰還を思い孤独に耐える



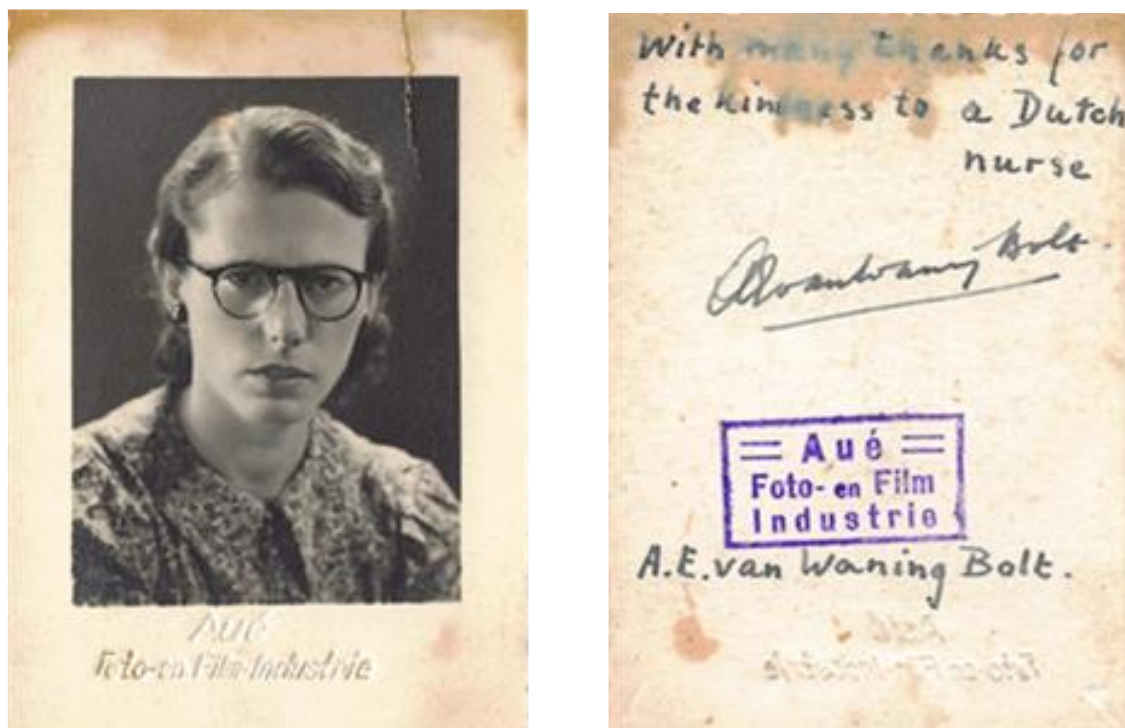
補遺3 図e オランダ海軍病院船オプ・テン・ノール号、原画はカラー。

補遺 4 表 第 2 期広島県三次抑留所名簿：外務省資料、小宮まゆみ氏より提供

【名簿2】 第2期広島県三次抑留所名簿			42年12月～45年8月			
抑留所	国籍	氏名(関公文書館史料)	氏名(外務省史料)	年齢	性別	職業その他
広島	1 蘭	Tuizinga, Gerrit	G・タイジンハ	51	男	船長
広島	2 蘭	Meisenbacher Ulrich August	U・A・メイゼンバックル	39	男	二等運転士
広島	3 蘭	de Best, Adriaan	A・ドゥ・ベスト	37	男	二等運転士
広島	4 蘭	Verhoef, Pieter Jan Govert	P・G・フェルフーフ	33	男	三等運転士
広島	5 蘭	Van der Wolf, Dirk Gerrit	D・D・ファン・デ・ヴルフ	41	男	二等機関士
広島	6 蘭	de Roy van Zuydewyn, Charles Anton	C・A・ザイドブエン	37	男	三等機関士
広島	7 蘭	Willems, Louis	ルイス・ウィルムス	36	男	三等機関士
広島	8 蘭	Hendrike, Derk	ダーク・ヘンドリック	32	男	四等機関士
広島	9 蘭	Kuiken Thijs	T・コイクエン	32	男	四等機関士
広島	10 蘭	Bakker, Johannes Bernardes Godefrides	J・B・G・バックル	32	男	五等機関士
広島	11 蘭	oost, Pieter	ピーター・オースト	26	男	五等機関士
広島	12 蘭	Stijve, Niklaas	N・ステイーベ	25	男	五等機関士
広島	13 イ	Soediren	マス・ステイラン	24	男	五等機関士
広島	14 イ	Soedarsono	スダルソノ	28	男	電気技師
広島	15 蘭	Dirkse, Jakobus	J・ディルクセ	53	男	司厨長
広島	16 蘭	Koenen, Francois Louis Mathieu Getrude	F・G・クーネン	50	男	料理人頭
広島	17 蘭	Sehuur, Cornelis Johannes	C・J・ズヒニール	40	男	無線技師長
広島	18 蘭	Van de Poel, Johannes Casper	ジョネス・C・ファンデポール	51	男	機関長
広島	19 蘭	Bollmann, Theodorus Stephanus Everardus	T・S・E・ボールマン	42	男	一等運転士
広島	20 蘭	Mulder, Johannes Jacobus	J・J・ミュルター	45	男	事務長
広島	21 蘭	Mellema, Andries Willem	A・W・メレマ	38	男	軍医長
広島	22 蘭	Vreede, Jan Johannes Antoni Arnoldus	J・A・フレージェ	45	男	予備軍医少佐
広島	23 蘭	Veldhuysen, Adrianus	A・フェルトハイゼン	45	男	内科医師
広島	24 蘭	Wempe, Johannes Willem Niolaas	J・W・ヴァンバ	49	男	予備軍医大佐
広島	25 蘭	Van Koeverden Brouwer, Gerrit Hendrik	ファン・クーフエルデン・ヴァラー	40	男	予備軍医大佐
広島	26 蘭	Veen, Ruurd	アール・フェーン	40	男	予備軍医大佐
広島	27 蘭	Wiemans, Sjoerd	S・ヴィーマンス	32	男	予備軍医大佐(歯科)
広島	28 蘭	Schouten, Netty	ネリー・スコウデン	50	女	看護婦長
広島	29 蘭	den Boer, Hermina Maria Johanna Elisabeth	H・E・デン・ボール	44	女	看護婦
広島	30 蘭	Hoekveen, Maartje	M・フックフェーン	44	女	看護婦
広島	31 蘭	van Waning Bolt, Agnes, Elisabeth	アグネス・ファン・ヴァニング・ボールズ	36	女	看護婦
広島	32 蘭	Leendertsz, Anna Margaretha	A・M・レーンデルツ	44	女	看護婦
広島	33 蘭	van den Berg, Anna Wilhelmina	アンナ・ウィルヘルミナ・ファン・デン・ベルハ	34	女	看護婦
広島	34 蘭	de Boer Gerth van Wijch, Jeanette Margaretha	J・M・デブール・ハルツ	51	女	看護婦
広島	35 蘭	Gunther, Petronella Hermina	P・H・フィテル	53	女	看護婦
広島	36 蘭	Mackay, Willemina Johanna	W・J・マカーイ	43	女	看護婦
広島	37 蘭	Smaardijk, Johanna	J・スマルディック	51	女	看護婦
広島	38 蘭	Vos de Wael, Maria Immaculata, Antonia Ernesta	マリア・フォス・デ・ヴァール	40	女	看護婦
広島	39 蘭	Brouwer, Charlott Geertruida Jansje van der Wolfnee van Bers,	C・G・ブラウワ	43	女	看護婦
広島	40 蘭	Clementine Maria	C・M・ファン・ベルス	42	女	看護婦
広島	41 蘭	Heil-Zuur, Tilly	A・M・ヘイルジュール	39	女	赤十字看護婦
広島	42 蘭	Smits, Elisabeth Petronella Cornelia	E・P・C・スメッツ	45	女	看護婦
広島	43 蘭	van den Bosch, Gerardus	G・ファン・デン・ボッシュ	43	男	看護士
広島	44 蘭	Rekers, Willem Joham	W・J・レーケルス	29	男	看護士
		① 国籍蘭のイはインドネシア人を示す。				
		② 年齢は1945年8月時点のもの。				
		③ 職業欄は外務省史料による。				

補遺 5 三次収容所に滞在していたオランダ人看護婦 A. E. van Waning Bolt
さんの写真と感謝のメモ

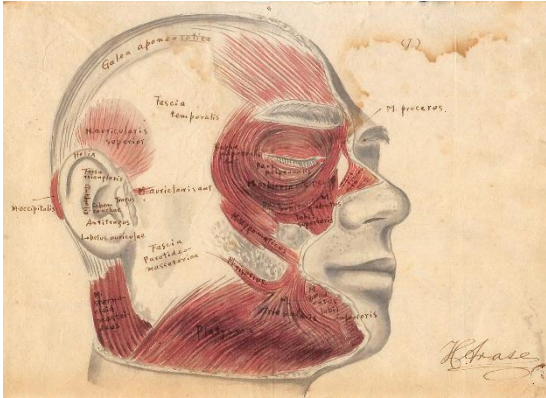
次に示す**補遺 5 写真 a, b** は、オランダ人の一行が無事に帰国した後に、荒瀬秀俊が受け取った写真である。これは荒瀬妙子さんが秀賢さんの没後、遺品整理をしていて見つけた。



補遺 5 写真 a ファン・バニング・ボルト、アグネス・エリザベス看護婦。**写真 b** 裏書メモ。

裏書きには、“オランダ人看護婦へのご親切に多くの感謝とともに、バニング・ボルト A.E. Van Waning Bolt” と記されている。彼女は**補遺 4 表** の31番目のファン・バニング・ボルト、アグネス・エリザベス、36歳、看護婦、である。

補遺 6 秀俊が学生時代に模写した人体解剖図とラウベル人体解剖学教科書の原画²⁰⁾。ゲオルク・ティーム社の転載許諾済み。



左列 a

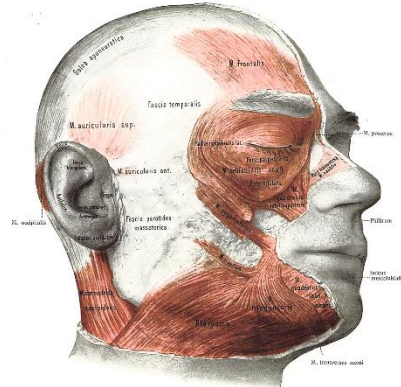
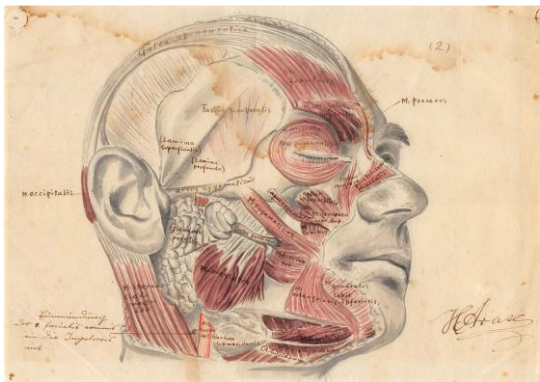


Fig. 73. Kopfmuskeln (I).
Oftotische Schädel mit Fascia temporalis und Fascia parotidomasseterica.

右列 a



左列 b

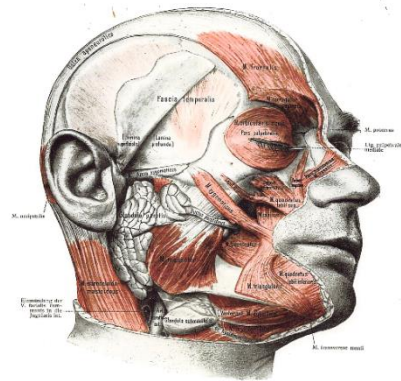
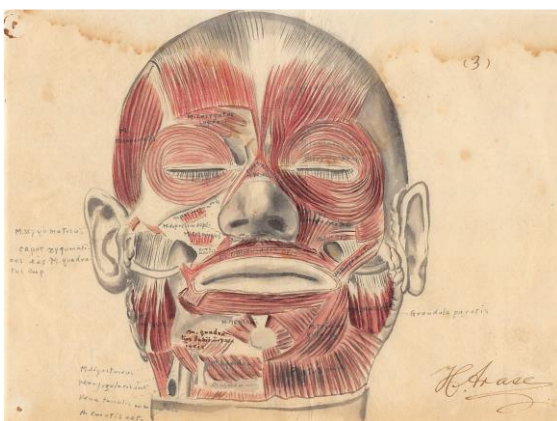


Fig. 74. Kopfkapitale (II) und obere Zungenbeinmuskeln.

右列 b



左列 c

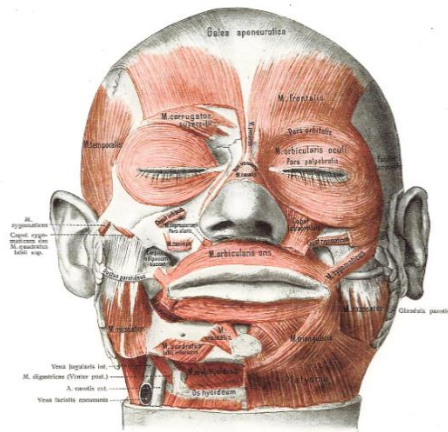
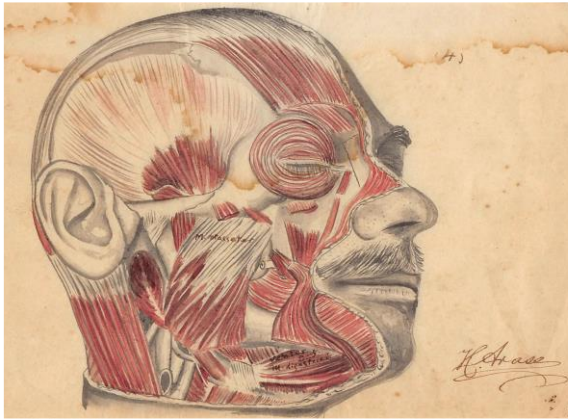


Fig. 75. Kopfmuskeln (III) von vorn.

右列 c



左列 d

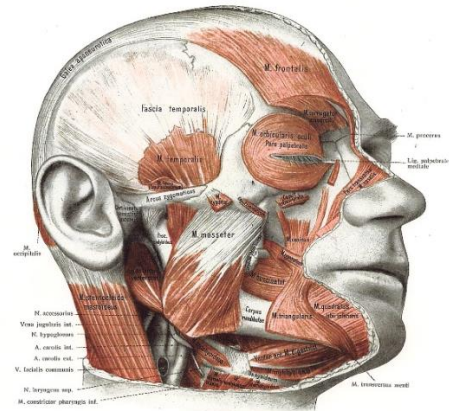
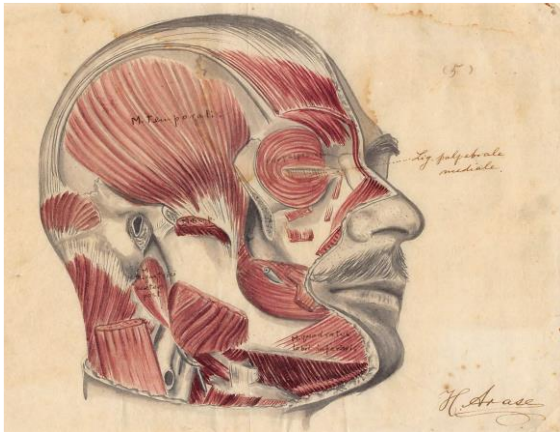


Fig. 76. Kopfmuskeln (IV) und obere Zungenbeinmuskeln.

右列 d



左列 e

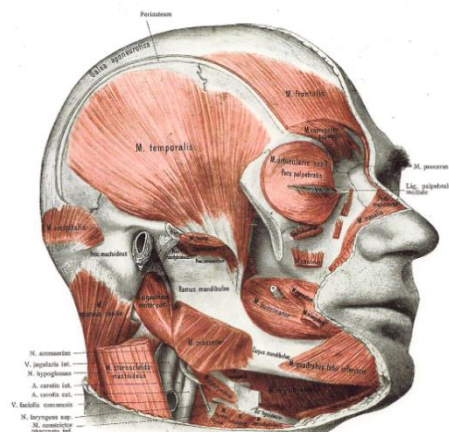
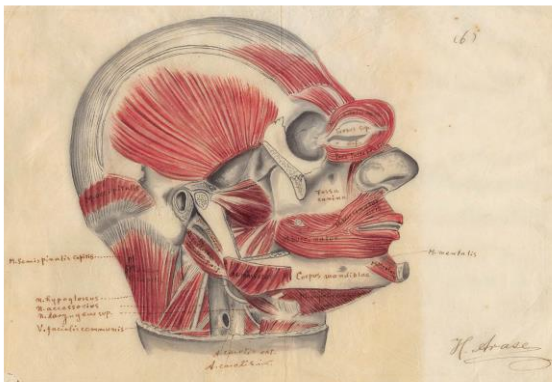


Fig. 80. Kopfmuskeln (V) und obere Zungenbeinmuskeln.

右列 e



左列 f

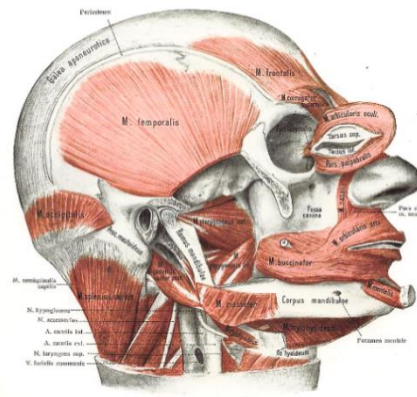
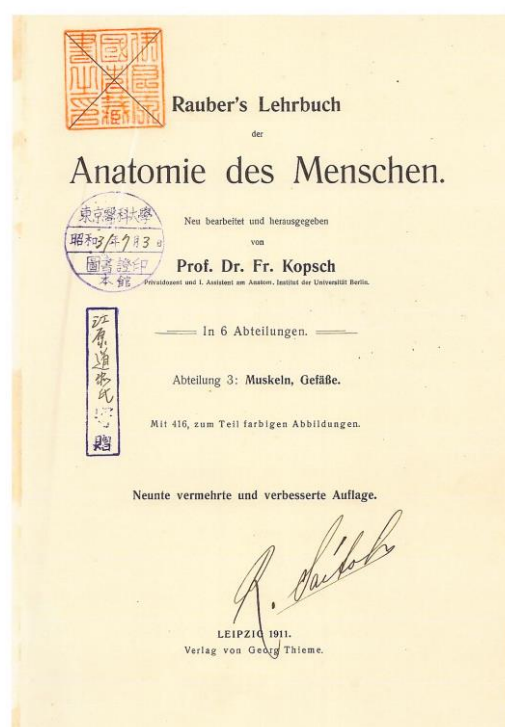
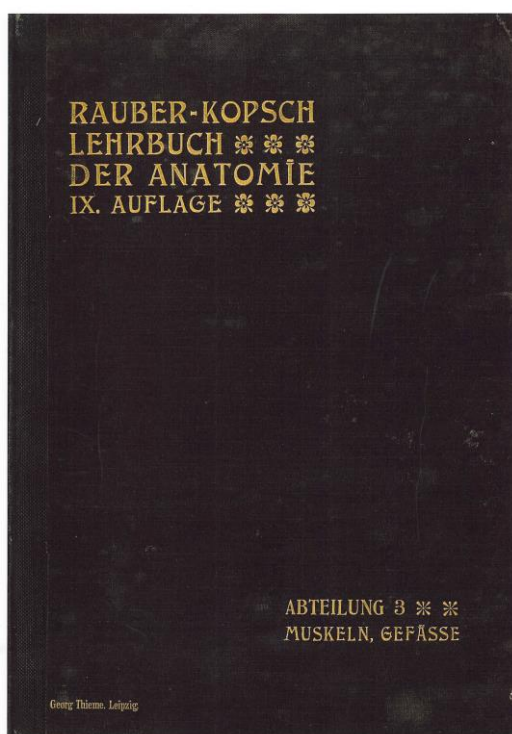


Fig. 81. Kopfmuskeln (IV) und obere Zungenbeinmuskeln.

右列 f

補遺 6 模写 左列縦列上から a, b, c, d, e, f: 秀俊が学生時代に模写した人体解剖図。右列縦列上から a, b, c, d, e, f: ラウベルの人体解剖学教科書の原画²⁰⁾; 3巻、87-98 ページ、上から下に図 73, 74, 75, 80、及び 81。左列の上から 4 番目 d、5 番目 e の図中の口ひげは秀俊の遊び心で描かれたものらしい。



補遺 6 写真 a 左 “ラウベルの人体解剖学教科書” の表紙。

補遺写真 b 右 表紙を開いた第 1 ページ。この教科書は東京医科大学図書館の世田谷の保存用書庫で見出された。発見の際の感動のいきさつは、p.42、p.43 に記述されている。

補遺 7 「巴杏」から谷岡只雄産婦人科医師による荒瀬秀俊伯父との交友話など

編集者付記 補遺 7-1

三次市の谷岡只雄産婦人科医師は荒瀬秀俊、三好治雄らと共に広島原爆投下直後に広島市内に駆け付け、救護班として活動されている⁸⁾。2020年、広島テレビの渡辺記者は原爆投下直後の救護班の活動を三次で組織された谷岡只雄医師達のサイドから製作しようとしている。その過程で“外科医のメスに国境はない²⁴⁾⁻²⁶⁾”の存在を知った。そこで、三次地区医師会事務局の星田事務局課長に問い合わせをした。星田課長は“巴杏”のなかに関連資料がないかと再調査したところ、救護班の記述ではないが、荒瀬秀俊、荒瀬敏博に関する2つの掲載記事を見つけた。以下にそれらを掲載する。

補遺 7.1 巴杏 2号²⁸⁾ 昭和49年2月1日発行 随筆/ずいひつ 谷岡只雄

「巴杏」に随筆をとのことでしたがくだらないことで紙面を費やすのは心苦しく思います。が……。

私の医業生活五十七年、其の間には、いろいろのことがありました。時には、得意満面高慢にも似た心境になり、時には何事に医者になったことか、と意気消沈、睡眠すらできなかつたこともありましたが、幸いにして問題化した事はありませんでした。皆さんの内には同感同感と苦笑するような苦い経験をお持ちの方は無いでしょうか。こんな苦心談でも書けば、あるいは面白可笑しく読まれる方もあるかと思いますが、それは止め、最も印象深い思い出話で責を果したいと思います。

私が、最初開業挨拶廻りにA君を訪れた時、待合・玄関超満員にも不拘、応接室に通され待つ事数分、その間に白衣を背広に着替え、いとも丁重な対応振り。それから数日後、答礼にと来訪を受けた時もまた、キッチンとした服装で、言動共実に礼儀正しいことでした。この二回の会談で二人は、完全に意気投合、親密になり、爾来戦争中のことで、何は無くとも互い招いたり、招かりたりで度々食事を共にするようになりましたが、その食事が大変。時々お得意の山または川猟の獲物をご持参、自分で手料理の御自慢、差しつ差されつ、大いに飲み、然し「メートル」は上がっても、二人共歌は大の苦手、只話に花を咲かせつつ盃を重ねるうちに夜は深けて1時を過ぎるのがおきまりでした。

宴終わって、お帰りの際がまた大変。送ったり、送られたり、当時は夜中には、街に車は無く、人通りも少なく、誰憚（はばか）る事もなく、二人は腕を組み、路は我が物顔に聞く人も無いのに、気焰万丈尽きる事無く、同じ街を右往、左往、往復二、三回にも及び翌朝笑われた事も屡（しばしば）でした。その親友悲しくも故人と成られ早くも13年誠に心淋しい事となりましたが、今もって当時を思い出し、たまらなく懐かしくときにはアルバムまで持ち出し、噂しながら当時の愉快さを再燃させています。げにも、持つべきものは、真の親友かな、とつくづく考えさせられる今日この頃です。十三回忌五月三日(?)久々にお墓の前で、語りたと思う。

補遺 7.2 巴杏 17 号²⁹⁾ 昭和 52 年 11 月 30 日発行 会員紹介

荒瀬敏博先生 大正十二年一月二五日生

私が学校を卒業し、三次へ帰ったのが昭和二五年です。元気だった父に、毎日日々、下品な言葉ですが、糞の出る程叱られながらの手伝いが始まりました。医術の事ばかりでなく、父の好きだった鰻釣りも習いました。そして或る日、父の曰く、わしより大きい鰻を釣ったら嫁をもらってやると。亦父の悪い冗談とばかり思って居ましたが、それが本当に実現したのには驚きました。怖ろしいと思っていた父にも、そんなユーモラスな一面もあったのです。

あの頃は今はなき先生方も皆お元気で、ご活躍されており、私が 1 番若い会員でした。父逝去後、数年余りで当地に開業し、現在まで七年余、大過なくやって来られたのも、父のお蔭とっております。

これから残された人生、好きな魚釣り、竿を担いで山陰地方を、駈け廻りたいと思っております。

編集者付記 補遺 7-2

「6.4.1 患者としてお世話になった」の最後に記した子宮筋腫の切除手術の患者は谷岡産婦人科から依頼された患者であると聞いたことを忠人は覚えている。

読者は、補遺 7.1 の谷岡只雄先生の「随筆/ずいひつ」の中の A 君は、まぎれもなく、荒瀬秀俊であることに納得されるであろう。「巴杏」からも、谷岡只雄先生のご家族からも、転載の許可を頂いた。谷岡只雄先生のご息子の谷岡慶宣先生からは、「子供のころ、(父は)荒瀬秀俊先生と遅くまで隣室で飲んでいたので覚えています」というコメントを頂いた。

谷岡慶宣先生は、秀賢の父の荒瀬秀隆が診察中に倒れたその日に駆け付けて下さった方々のおひとりである。また秀賢の葬儀の際には「秀賢君・・・」から始まる心温まる長文の弔辞を捧げて下さった方でもある。秀賢の祖父秀俊に補遺 7.1 のような珠玉の弔辞を「巴杏」紙面に捧げて下さった父上から始まって荒瀬家には 3 代にわたってその縁は続いていたのである。

上記の「随筆/ずいひつ」を編集者が読んだ時には、幻想的なモノクロ映画の一シーンが現れた。そこは戦前の三次の街の真夜中。灯もなく、三次名物の霧が深く立ち込めて来て、月明かりにかすんでいる。二人の酔っ払いは肩を組んだりぶつかりあったり、でも何処に行くのかも定かでないほどおぼつかない足取り、酔いはますます深まり、時々立ち止まっては、大声で「そうだそうだ」と、なんのことだか感じ合い共感し合って叫んでいる。それは信頼・尊敬に根差した人生の親友に確かに巡り合えたという確信と至福の喜びである。ベートーヴェンの第九「歓喜の歌」を響かせているかのような、まことに羨ましい二人の姿であった。

敏博の文中の秀俊の鰻つりと結婚を結びつけるユーモラスな面は、秀治の本文「3.6.4 赤チンで描かれた小さなオタマジャクシ」や「6.4.3 伯父の周りの悲喜劇——英語の質問」の最後のトイレの張り紙等にも通じる秀俊の強面(こわもて)ばかりではない面を垣間見る思いがする。

補遺 8 荒瀬秀賢の“巴杏”投稿記事“鯉心”と“荒瀬病院 200 年のあゆみ”

編集者付記 補遺 8

荒瀬秀賢が“巴杏”に投稿した記事は多数ある^{30),32)~38)}。これらの記事の大部分は本文の編集の最終段階で“巴杏”の星田事務局長が見つけて送付して下さった。「荒瀬病院ニュース、あらせニュース」からの転載である。

「荒瀬病院ニュース」と冠しては、昭和 62(1987)年 7 月(第 1 号)から平成 11(1999)年 5 月まで発行された。病院名称の変更にもなって、「あらせニュース」となったが、平成 11(1999)年 6 月から平成 30(2018)年 9 月まで発行された。全部で 375 号の A3 版の新聞である。毎月 300~500 部発行して、患者さんや我々親戚や知人・友人に 1 回の休刊もなく配布していた。述べ発行部数は 15 万部以上になる。内容は、病気・健康・食生活・医療問題、地域関連記事、など多岐にわたる A3 版の新聞である。その中から文献 32)~37)は熱狂的広島カープファンの名物コラムニストとして書き続けた“鯉心”を転載したものである。文献 31)は溝田武人の中学時代の同級生で友人の田中克章君(元中国新聞記者)が送ってくれた「あらせニュース」取材した中国新聞記事(1999 年)の復刻版(2020.3.25)である。「荒瀬病院ニュース」、「あらせニュース」はこのように社会的にも関心を呼んでいたのである。編集委員長は秀賢の妻・荒瀬妙子さんである。編集委員長自身が“鯉心”の一番のファンだったのかも知れないとおっしゃるのである。いずれ早い内に独立した本になることを期待している。

“鯉心”の話題の最後に思い出したことが 2 点ある。一つは中学生の時から広島市に移り住んでいた彼は、当時は紙屋町にあった広島市民球場に通っていたが、ある時こんなことを言っていた。“外野席の入場料は 100 円なんよね。その 100 円玉を必死で握って走って試合を観に来る大人の人もヨーケいて、たまげたよ。100 円でも大変な人がまだまだ沢山いるのよね”。この頃からすでに彼は心根の優しい配慮ができていたのである。

もう一つは、彼ら兄弟には音楽的なセンスがあって色々な楽器を早くから巧みに弾いていた。彼らが小学校の高学年の頃のある時、秀治君が秀賢君に、“そうだ、武ちゃんと 3 人でバンドを作ろう。面白いよねえ”、と提案した。秀賢君はちょっと悲しそうに首を横に振って、“無理よ”と言った。その時、ホッと安心したのは私であった。そのセンスが私には無いことを、彼は知っていたのである。

なお、文献 30)は江戸期から 11 代続く荒瀬病院の歴史を知るうえで貴重な内容であり、文献 1)とも深く関係しているので、以下に転載する。

ブロックだより

荒瀬病院200年のあゆみ

荒瀬 秀賢

この度、北部地区医師会が100周年を迎えられるにあたり、私共の病院が100年以上、医療に携わっている事につき、表彰していただける事は、誠に栄誉な事であり、つきましては「荒瀬病院」の簡単な歴史を申し述べさせていただきます事となりました。

私の先祖は過去帳によりますと、石州浜田領、和田村に居を構え、御典医を務めていたと記してあります。

五代目荒瀬元益が、寛政年間（1788～1804年）現在の三次市川立町下川立の「割庄屋、村上家八代目、村上利左衛門なる人に、この地に悪病流行せる為、招かれる」と記されており、その家は現在、他人の所有になっておりますが、残っております。ここで私の先祖達を紹介させていただきます。

五代目 元益 安永4年～文政8年
(1775～1825年)

六代目 元寿 文化9年～安政6年
(1812～1859年)

「元寿」の名の入った大小2本の大刀が現存しております。

七代目 元泰 天保6年～明治32年
(1835～1899年)

八代目 一基 慶応2年～昭和15年
(1866～1940年)

九代目 秀俊 明治29年～昭和37年
(1896～1962年)

十代目 秀隆 大正9年～昭和59年
(1920～1984年)

となっており、八代目一基は、村上家より元泰の一人娘の養子となり、長崎にて、シーボルトの弟子に学んだ事があるそうです。

当時は診療科別の概念は全くなかった時代で、かなり広範囲の往診を主として（この時使っていた人力車は、現在本宅玄関にあります）、あらゆる患者を診察していたそうです。一基夫人のウタから、産婦人科も上手だったという事を、母が聞いたと申しております。

秀俊は、三次中学卒業後、日本医学専門学校（現在の日本医大）に入学し、今で言えば学内紛争のような事が起り、学生400人によるストライキによって、大正7年、東京医学専門学校を設立する事になりますが、そのメンバーの一人として活動し、その時の血判状は今も東京医大に保管してあります。

その後、理由は、はっきりしませんが、時の東京市長、後藤新平より褒賞として贈った、「浄涵有餘」という掛軸は、今も我家にあります。茶の間の祖父の背によく掛けてあったのを記憶しております。

血気盛んに、医学生時代を過し、大正10年同校卒業後、大正12年関東大震災の被災者の診療に従事し、大正13年川立に戻って来る事になるのですが、それを喜んだ一基は、屋敷内の蔵を後方へ移転し、その跡に白壁の診療室を建造したとの事です。

大正終りから昭和初期と云えば、この地に外科医というものは、秀俊が初めてで、その

知識と技術を、次第に発揮していくのですが、川立という地理的条件により、又、三次町の人々から懇望された事もあり、昭和3年10月、西中町に荒瀬病院を開業、昭和6年、内町に移転致します。

写真〔I〕は、昭和11年夏、新しく購入した手術台で、Ope患者第一号として、虫垂切除術を、執刀中の場面で、戦国の武将が、敵の首でも取ったかのように、Appeを高々と持ち上げてポーズをとっているのが、秀俊、その右で患者の手を握っているのが、祖母喜代、そのAppeを掛布越しに恐る恐る、覗きこむ患者は、何と当時中学生で、術者の次男であるところの、敏博（荒瀬十日市外科）という今から52年前のものです。この時秀俊、丁度40歳の時です。

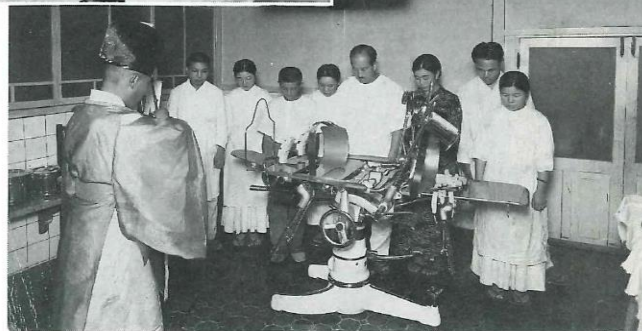
そして写真〔II〕は〔I〕の前日、手術台購入に際し、神主さんより、祝詞を上げてもらう所で、右から西村看護婦（現在も在職中

で、長いキャリアを生かし、陰に陽になり、目のとどきにくい所まで、気をくばり、頑張ってくれております。）一人おいて祖母、祖父、次に児玉前婦長の姿があります。

児玉婦長は、一昨年退職するまで、57年間、一基、秀俊、秀隆、私の代まで4代に仕え、看護婦一筋に、荒瀬病院の屋台骨を支えてくれた人で、本院にとって、最大の功労者と言えるでしょう。

その左が、先に述べましたように、次の日の生け贄にめされると知ってか知らずか、敏博の姿があります。

そして、昭和18年4月、現在の栄町に居を移し今に至るのですが、何しろ当時は、双三郡、比婆郡、高田郡、豊栄、島根県邑智郡・飯石郡の全域に至る広範囲から、患者が集まっていたそうで、手術も毎日多くの数をこなし、食事も夜中1時、2時というのが普通の生活だったと聞いております。



昭和20年8月6日には原爆投下直後より、谷岡老先生らと共に広島へ出向き医療班として治療に当たっております。子供の頃、その惨状をよく聞かされた記憶があります。

戦後になり、次第に世の中が落ち着き始め、秀俊は、自分なりに色々のアイデアを持ち、敏博に聞く所では、ステンレスの出始めに、今のキンチュア一釘のような髓内固定のものを作ったり、牛骨を煮沸したものを髓内固定に用いたとか、(現在時々そのOpeをされた方が来られますが、何も問題はないようです)開腹手術時の器具を自分の使いやすいようなものを作ったり、既成のものを改造したりしており、現在私もその器具を用いておりますが、使ってみれば結構便利なものです。

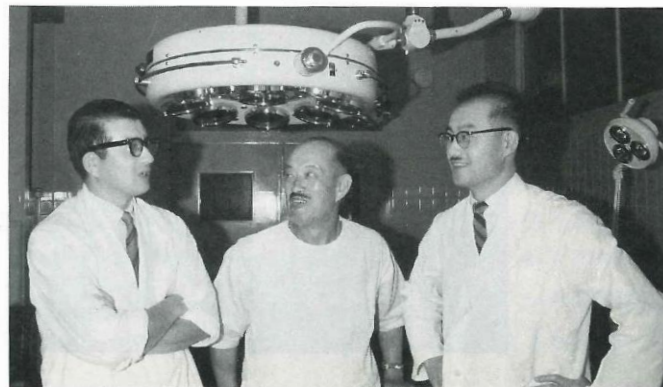
中でもメスは数百本自分で作り、用途によって、刃の角度、大きさ、柄の形等それぞれ細かな違いをつけてあり、実際どれがどう用いられたものか分からないものもありますが、現在もワセリンをしっかりとぬって保管してあります。

その祖父秀俊も、昭和37年5月他界致しますが、10代目秀隆は、大正9年生れで、秀俊の後を継ぎ、昭和18年東京医専を卒業、次いで伯父敏博も、昭和23年同校を卒業し秀隆は軍医として北支の地(現在の中国の北部)を転戦の後、昭和20年12月に復員致します。そして昭和23年東京医大第一外科に入局、敏博

は卒業後、三次へ帰り秀俊の手伝をし、共に荒瀬病院を支え、秀隆は昭和31年、秀俊、心筋梗塞にて倒れた際、三次へ帰郷、大学で学んだ新しい外科で、まだまだ、いろんな面で条件の悪い中、メスをふるい、その後病気の回復した秀俊、敏博と3人で診療に携わる事になりますが、写真〔Ⅲ〕は、丁度その時期のもので、昭和34年、新しく出来た手術室で何やら相談している所です。2人の医師としての息子に囲まれて、祖父秀俊には何とも言えぬ安らぎが、伺えるように見えます。この時秀隆39歳、敏博36歳の時です。

そして時が経ち、昭和54年5月、現在の病院が、完成し昭和56年8月私が帰って参りまして、2人で診療を行って来たのですが、この頃より、時折、軽い発作が見られるようになり、59年12月脳内出血のため、永眠致します。

私の記憶としましては、前にも記しましたが、祖父が食事中に茶釜で牛骨を煮込み、鑷子で食物をつかんでいた頃より以後になる訳で、それ以前の長い歴史を無限に感じると同時に、その責務の大きさを改めて肌を感じております。この約200年間の積み重ねを、世の中がどう変わろうと、医療の原点を顧みながら、後生に継続してゆく事を使命として肝に命じております。



補遺 9 芸備線を走っていた C58(シゴハチ)と荒瀬秀賢による SL スケッチ

編集者付記 補遺 9

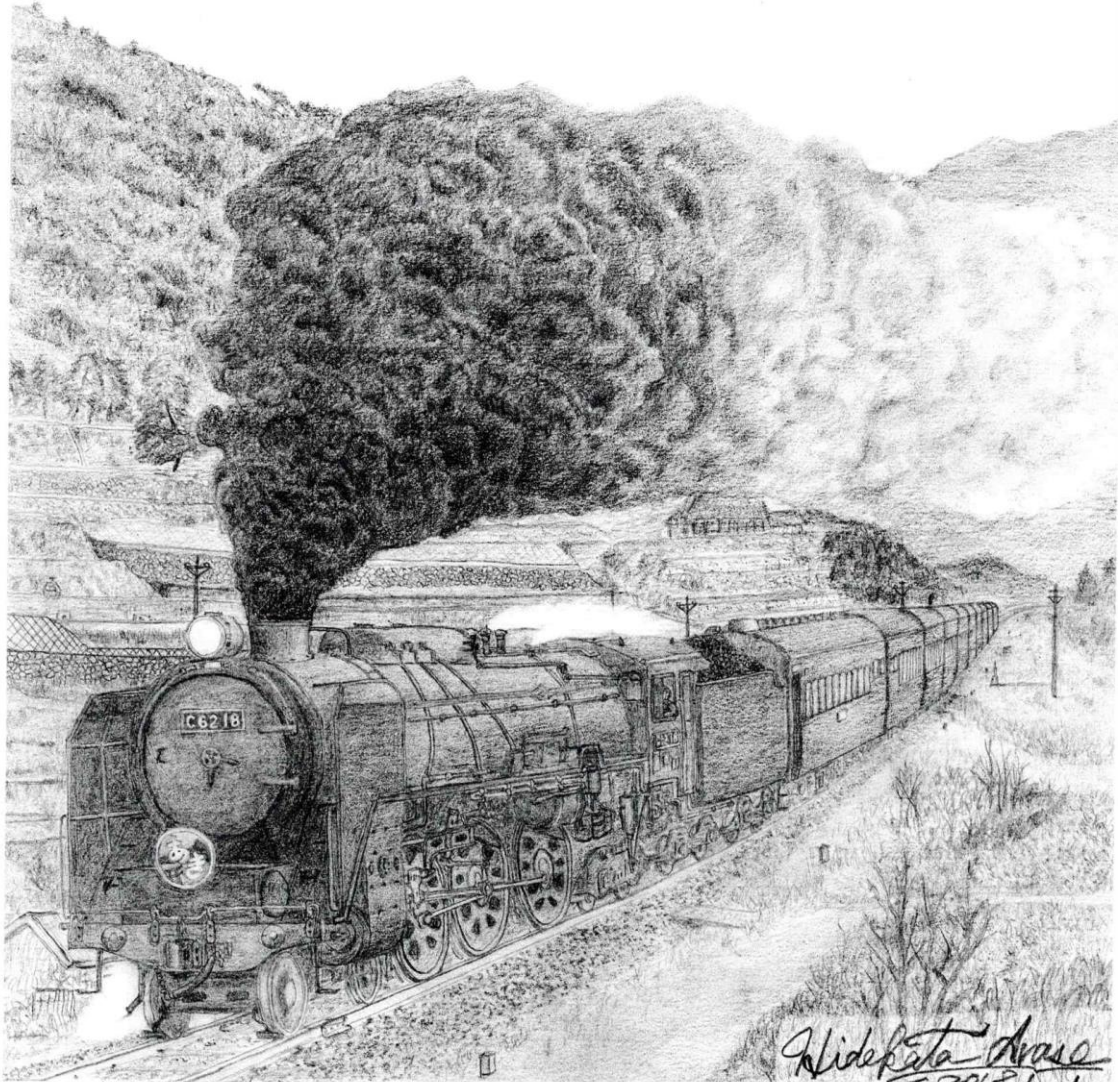
溝田忠人による、6.4.4 秀賢君の思い出、にもあるように秀賢君は川立の旧荒瀬病院邸に来たときは、**補遺 9 写真**のような蒸気機関車が 300m 離れた芸備線を疾駆する度に、どこで遊んでいても、汽笛を聞きつけて縁側に走り出て、SL を観察したり、長い貨物列車の車両数を数えることに熱中していた。その頃から機関車を画用紙にクレヨンなどで猛烈なスピードで描くので驚かされた。

晩年に至ってもその趣味は変わらず、7 枚のスケッチを残している。妙子さんによると、“2011 年暮れ、秀賢さんは年賀状にするために、その頃しきりに懐かしがって、幼い頃から好きだった SL の写真集を持ち出して鉛筆でスケッチをしていた。それを 2012 年の年賀状として親しい方々にお出しました。それから毎年暮れになると、夜事務室にこもり二週間くらいで描き上げていました。2017 年版は何故か描く意欲がなくて残念ながら作品がありません。”

鉄道ファンには、「乗り鉄」、「撮り鉄」、「描き鉄」がいるそうであるが、彼は幼児から「描き鉄」でもあった。亡くなる 1 年前の 2018 年に描いた SL 図 **補遺 9 図**のように、“巴杏”に記事付きで載せている³⁸⁾。この記事の中の東京と一緒に出かけた親戚は、溝田の家族で母千代子、長女英子、次男の武人である。



補遺 9 写真 昭和 30 年代芸備線の上川立駅から志和池駅に向けて疾駆する SL C5860。



安浦～安登間を走る、六島発呉線回り東京行き急行「安芸」。この先待ち構え、16%の急勾配に何かい最高出力を発揮するためのエネルギーを蓄える。

C62 18号機

小学校4年生になる春休み、親戚一家に連れられて上京したことが、唯一「急行あき」に乗った経験です。それは、当時祖父母に育てられていた三次から、東京医大でいろいろな修業をしていた父と母、弟たちに会うための旅行でした。

乗車した車両は、もちろん寝台車など当時は考えられもせず、4人掛けのボックス席。14時半広島発、呉線回りで翌朝8時に東京着という、今では絶対存在し得ない列車でした。

しかし、小学生にとって、そのようなことは全く問題外のことで、久しぶりに会えることを除いても、何から何まで、唯々、興味津々で、楽しいばかりの旅でした。とくに、東海道本線に入って夜が明けてから初めて見た太平洋の大きさには、完全に目を奪われっぱなしだったのを覚えています。

絵にある呉線のこの場所も、間違いなくその日に通過したのだと思うと、描きながら何とも言えぬ感慨が湧いてきました。

いまから63年前のことです。

荒瀬外科 荒瀬 秀賢

補遺 9 図 2018年1月1日 荒瀬秀賢によるのSLスケッチ。文献31)にも掲載されている。文献39)写真からスケッチしたものと考えられる。ただし、SL前面の列車名“あき”のプレートは、ほかからの借用だそうである。荒瀬秀賢63年前の小学4年生の春休みの東京行き of 遠い思い出に重ねて画いている。

外科医のメスに国境はない —荒瀬秀俊伝—

2020年11月2日 発行

著者 荒瀬秀治

編集 溝田忠人・溝田武人

《非売品》

発行者 荒瀬淳子、荒瀬妙子、溝田忠人、溝田武人

連絡先 溝田武人 e-mail: mizota0208@yahoo.co.jp

〒811-3221 福津市若木台4丁目10-17

この文書の英語版にご興味をお持ちの方は上記 e-mail 宛ご連絡下さい。